

白業なければ、黑白業の報なし。上業及び以下業あることなし。この師いま王舎城のうちにいます。や
やれがはくば大王、屈駕してかしくにゆけ。この師をして身心を療治せしむべしと。ときに王、こたへていはく
審に能かくの如きわが罪を滅除せば、われまさに歸依すべし。

またひとりの臣あり。なづけて藏徳といふ。また王のところにゆきて、しかもこの言をなましく。大王さんがゆへ
そ面貌憔悴して、唇口乾燥し、音聲微細なるや。乃なんの苦むところありてか、身いたむとやせん、心いた
むとやせん。王すなはちこたへていはく。われいま身心いかんぞいたまざらん。われ難首にして慧目あることな
し。もろくの悪友にちかづきて、ためによく提婆達多悪人のことばにしたがひて、正法の王によこさまに逆
害を加ふ。われむかし智人の偽説せしなきいき。もし父母、佛および弟子において不善の心を生じ、悪業をお
こさん。かくの如の果報、阿鼻獄にありと。この事をもつての故に、われをして心怖れて大苦惱を生ぜしむ。
また真醫のありて、しかも救療せらるることなげんと。大臣またいはく、惟れがはくば大王しばらく恐怖すること
なけれ。法に二種あり。一には出家、二には王法なり。王法といふはいはくその父を害すれば、すなはち國土
に王たるなり。これ逆なりと云ふといへども、實に罪あることなげん。迦羅羅處のながらす母のほらなやぶり
てしかうして後にいまし生するがごとし。生の法かくのごとし。母の身をやぶるといへども、實にまた罪なし。
〔羅腹の體難等またく是のごとし。治國の法、法として是のごとくなるべし。父兄を殺すといへども、實に罪
あることなし。出家の法は乃至蚊蟻を殺すにまた罪あり。至王の言ふところのごとし。世に真醫の身心を治す

るものなげん。いま大師あり。末伽梨拘舍梨子となづく。一切知見して、衆生を憐愍すること、ななし赤子の
ごとし。すでに煩惱はなれてよく衆生の三毒の利箭をぬく。乃この師いま王舎大城にいます。惟れがはく
は大王そのところに往至し給へ。王もと見ば、衆罪消除せんと。ときに王こたへていはく、審によくかくのご
とき我罪を滅除せば、われまさに歸依すべしと。

またひとりの臣あり。なづけて實徳といふ。また王のところに到りて、すなはち偶をときていはく、大王さんが
ゆへぞ身に遷路をぬぎ、首のかみ蓬亂せる。乃至かくの如くなるや。乃これ心いたむとやせん、身いたむとやせ
んと。王すなはち答へていはく、われいま身心あに痛まざることをえんや。わが父先王、慈愛仁愍してことに
矜念せらる。實に幸なし。ゆきて相師にとふ。相師こたへてまふさく。この兒むまれをはりて、定めてまさに父
を害すべしと。この語をきくといへども、なを瞻養せらる。むかし智者の是のごときを言をなすことをきき。も
しひと母に通じ、および比丘尼をけがし、僧祇物をぬすみ、無上菩提心をおこせるひとを殺し、およびその父を
殺せん。かくの如きのひと、必定して、まさに阿鼻地獄に墮すべしと。われいま身心あに痛まざることをえん
や。大臣またいはく、惟れがはくば大王また慈苦することなけれ。乃一切衆生みな餘業あり。業縁をもつてのゆ
へに、しばし生死なうく。もし先生に餘業あらしめば、王今これを殺さんにつるに何の罪かあらん。惟れが
はくば大王、意を寛にして愁ふることなけれ。なにをもつての故に、もしつれに愁苦すれば、愁つれに増長す。
ひと眠をこのめば、れむりすなはち滋ぐおほきがごとし。姪を食し、酒をたしなむも、またくかくのごとし。

乃阿蘭耶毗羅膩子。

またひとり臣あり。悉知義となづく、すなはち王の所に至りて。是のごとき言をなさく。乃至王すなはちこたへていはく、われいま身心共に痛みなきことをえんや。乃至先王つみなきに、よこさまに逆害を興す。われ亦むかし智者の説きて言ひしなきいき。もしひと父を害することあればまことに無量阿僧祇劫において、大苦惱なうくべしと。我いま久しからずして、かならず地獄に墮せん。また良醫のわが罪を救療することなけん。大臣すなはちいはく、やれがはくば大王、愁苦を放捨せよ。王きかすやむがし玉ありき。なづけて羅摩といひきその父を害しをばりて、王位をつぐことをえたりき。跋提大王、毗樓眞王、那睺沙王、迦帝迦王、毘舍佉王、月光明王、日光明王、愛王、持多人王、かくのごときらの王、みなその父を害して王位を継ぐことをえたりき。然るにひとりとして王の地獄にいるものなし。いま現在に毘瑠璃王、優陀耶王、惡性王、鼠王、蓮華王、かくの如き等の王、みなその父を害せりき。悉くひとりとして王の愁惱を生ぜるものなし。地獄、餓鬼、天中といふといへども、たれか見るものあるや。大王たしふたつの有あり。一には人道、二には畜生なり。この二ありといへども、因縁生にあらず、因縁死にあらず。もし因縁にあらずば、なにもか善惡あらん。惟れがはくば大王、恐怖をいだくことなけれ。何を以てのゆへに、もし常に愁苦すれば、愁つるに增長す、人れむりをこのめば、眠すなはち滋く多きがごとし。蠶を食し酒をたしなむも、またく是の如しと。乃至阿耨多含欽婆羅乃至

また大臣あり。なづけて吉徳といふ。乃至地獄といふは、なんの義ありとかせん。臣まことに之をとくべし。地は地になづく、獄は破になづく。地獄を破せん罪報あることなけん。これを地獄となづく。また地は人になづく、獄は天になづく、その父を害するをもてのゆへに、人天にいたらん。この義をもてのゆへに婆蘇仙人となへていはく、羊を殺して人天の樂をう、これを地獄となづく。また地は命になづく、獄は長になづく、かの壽命の長を殺るすをもてのゆへに地獄となづく。大王この故にまことに知るべし、實に地獄なけん。大王、夢をうへて夢をえ、稻をうへて稻をうるがごとし。地獄を殺してはかへりて地獄をえん。人を殺害してはかへりて人をうべし。大王いままことに臣の所説なきに、實に殺害なるべし。もし有我ならば實にまた害なし、もし無我ならばまた害するところなけん。何を以ての故に、もし有我ならば、つれに變易なし、常住をもてのゆへに、殺害すべからず、不破、不壞、不繫、不縛、不瞋、不喜はなし、虚空のごとし。いかんぞまことに殺害の罪あるべき。もし無我ならば諸法無常なり。無常をもてのゆへに、念々壞滅す。念々に滅するがゆへに殺者死者みな念々に滅す、もし念々に滅せばたれかまことに罪あるべき。大王、火木をやくに、火すなはち罪なきがごとし。斧樹をきるに、斧また罪なきがごとし。鎌くさをかる、鎌實に罪なきがごとし。刀、人をころすに、かたな實に人にあらず、刀すでに罪なきがごとし。人いかに罪あらんや。毒人をころすに、毒實に人にあらず、毒藥つみにあらざるがごとし。人いかに罪あらんや。一切萬物、みなまた是のごとし。實に殺害なけん。いかんぞ罪あらん。惟れがはくば大王愁苦を生ずることなけれ。何を以てのゆへに、もしつれに愁苦せば、愁つるに增長せん。人れむりを喜めば、

れむりすなほち溢く多きがごとし。婦を食し酒をたしなむも、またくかくのごとし。いま大師あり、迦羅鳩駄迦旃延となづく。乃至

またひとり臣あり。無所畏となづく。乃至いま大師あり尼乾陀若健子となづく。乃至

そのときに大醫ありなづけて耆婆といふ。王のところに往至して白してまふさく大王、安眠することをえんやいなやと。王、偶をもて答へていはく、乃至耆婆、われいま病おもし。正法の王において惡逆害をおこす。一切の眞醫、妙藥、呪術、善巧、瞞病の治することあたはざるところなり。何をもての故に、わが父法王、法のごとく國をおさむ。實に辜告なし、よこさまに逆害を加ふ。魚の陸に處するがごとし。乃至われむかし智者のときていひしをきき。身口意業もし清淨ならずば、當に知るべし、この人かならず地獄に墮せんと。われまたくかくのごとし。いかんぞまことに安穩に眠ることなうべきや。いま我また無上の大醫の、法藥を演說して、わが病苦をのぞくことなしと。耆婆こたへていはく、よきかなく、王つみをなすといへども、心に重悔を生じてしかも慙愧をいだけり。大王、諸佛世尊つれにこの言をときたまはく、ふたつの白法ありよく衆生をたすく。一には慙、二には愧なり。慙はみづからつみをつくらず、愧は他をなしてなさしめず。慙はうちにみづから羞恥す。愧は發露してひとにむかふ。慙は人にはづ、愧は天にはづ、これを慙愧となづく、無慙愧はなづけて人とせず。なづけて畜生とす。慙愧あるがゆへ、すなはちよく父母、師長を恭敬す。慙愧あるがゆへに、父母、兄弟、姉妹あることをとく。よきかな大王つぶさに慙愧あり。乃至王の言ふところのごとし。よく治す

るものなけん。大王、まことにしるべし、迦毗羅城に淨飯王の子、姓は瞿曇氏、喬達多となづく。僻なくして覺悟せり。自然にして阿耨多羅三藐三菩提をえたり。乃至これ佛世尊なり。金剛智ましくて、よく衆生一切惡罪を破せしむ。もしあたはずといはば、この處あることなけん。乃至大王、如來に弟提婆達多あり。衆僧を破壊し、佛身より血をいだし、蓮華比丘尼を害す。三逆罪をつくれり。如來ために種々の法要をときたまふに、その重罪をしてすなはち微薄なることを得しめたまふ。このゆへに如來を大眞醫とす。六師にはあらざるなり。乃至

大王、一逆をつくれば、則ちつぶさに是のごときの一罪をうく。もし二逆罪をつくらば、すなはち二倍ならん。五逆つぶさならば、罪もまた五倍ならん。大王、いま定めてしんぬ、王の惡業かならず免るゝことをえじ。惟れがはくは大王、すみやかに佛のみもとにまうづべし。佛世尊をのぞきて餘はよく救ふことなけん。われいま汝を懲れむがゆへに、あひ勤めてみちびくなり。そのときに大王、この語をき、なはりて、心に悔懼をいだけり。身をあげて戰慄す。五體掉動して芭蕉樹のごとし。仰いでこたへていはく、天、これ誰とかせん。色像を現せずしてたゞ聲のみありていはく、大王、われはこれ汝が父瞿曇婆羅なり。なんぢいままことに善惡の所説にしたがふべし。邪見六臣の言にしたがふことなかれと。ときに聞きをばりて關絶地にたふる。身のかさ増劇して、臭穢なること、さきよりもまされり。冷熱を以てぬり、瘡を治療すといへども、瘡深はし。毒熱たゞ増して損することなし。已上抄出

教行信證講義

五六〇

一 大臣、日月稱となづく。一 富蘭那となづく。二 藏德、ニ末伽梨物舍離子となづく。三 一の臣あり、なづけて實徳といふ。三 迦闍耶毗羅臈子となづく。四 一の臣あり、悉知義となづく。四 阿耨多翅金欽婆羅となづく。五大臣なづけて吉徳といふ。五 婆蘇仙。六 加羅鳩駄迦旃延。六 尼乾陀若健子となづく。
【字解】一。王舎大城 梵名ラーヤグリーハ (Rājagṛha) 中印度摩竭陀國の都城、紀元前六世紀、頻婆娑羅王の築くところ、その子阿闍世王もここに都し、釋尊の最も多く傳道せられた地である。今のラージャギル (Rājgir) の地に當る。

二。阿闍世 梵語アヤターマシヤトル (Ajātasattu) (阿)は未、ヤターマ(闍)は生、シヤトル(世)は怨、即ち未生怨と譯す。初め父頻婆娑羅王が、年老いて子なきを憂へ、相者をして、占ばせると、某山に、自分の子となつて生るべき仙人があることを知り、未だ命數の盡きない中に、人をして其仙人を殺した。仙人の臨終の怨みが、太子と生れて、父王の怨敵となつたと云はれてゐる。そして其名も未生怨とつけられたと云ふのである。王は十七歳の時、提婆に唆かされて、父王を殺して王位に上つたが、間もなく自分の子を受する念から、父母の慈愛に目が醒め、舊惡を懺悔して、佛教に歸依し、佛教外護の大施主となつた。釋尊滅後、第一結集の際、大檀越として、此の聖業を完成せしめた。其後も大迦葉、阿難に奉持し、大に佛法興隆に力を盡した。
三。口四惡 十惡中の口の四惡。妄語、綺語、惡口、兩舌。
四。華報 來世の果報を受ける前に、さながら果實を結ぶ前に花咲くやうに、現世に於いて、善惡の報を受

けること。

五。地獄 梵語那落迦 (Naraka)、無幸處と譯す。地獄は義譯である。地下にある獄の義。閻浮提の地下二萬由旬にして無間(阿鼻)地獄あり。その上に重層して、大焦熱、焦熱、大叫喚、叫喚、衆合、黑繩、等活の七地獄あり。之を八熱地獄といふ。この地獄の各に四門あり、四門の外に、各四小地獄あり、即ち一地獄に十六小地獄ある故に、總べて一百三十六地獄となる。又八熱地獄の周圍に八寒地獄(額部陀、尼刺部陀、額所陀、囉囉婆、虎々婆、囉鉢羅、鉢特摩、摩訶鉢特摩)がある。總稱して八寒八熱の大地獄といふ。

六。草提希 上 五二三頁をみよ。

七。四大 一にては肉體といふ意。上二一八頁をみよ。

八。黑業 惡業のこと。

九。白業 善業のこと。

一〇。提婆達多 梵語デーヴァダッタ (Devadatta) 天授と譯す。釋尊の從兄弟、阿難の兄、甘露飯王の子と稱せらる。



第七章 重釋要義

五六一

點線のやうな他の二王の子といふ説もある。或は又拘利城主善覺長者の子で、耶輸陀羅姫の兄とも云はれてゐる。釋尊の弟子となり、晩年に釋尊に反抗し、阿闍世王を唆かして父王を殺さしめ、自分は釋尊を三度も殺さんとしたが、遂に生きながら大地獄の中へ捲き込まれたと傳ふ。

- 一一。迦羅々蟲 黒蟲と譯す。生るれば必ず母蟲を害すといふ。
- 一二。驢腹懷妊 芭蕉は實を結んで枯れ、驢馬は子を産んで死すと「普曜經」等に説かれてゐる。
- 一三。瓔珞 印度の貴人、殊に婦人や少年が、頭、頸、胸などに掛けた珠玉の飾りをいふ。
- 一四。僧祇物 僧祇は僧伽、即ち僧家に所有するものをいふ。
- 一五。阿鼻地獄 梵語アキーナラカ(Apinarakā)無間地獄と譯す。八熱地獄の最下に位し、間なく苦みを受く、故にこの名あり。
- 一六。耆婆 梵語ナーツカ(Jivaka)釋尊當時の名醫。父は王舎城の王子無畏、母は時の全盛の娼婦婆羅跋提である。彼女は耆婆を生みて之を路傍に捨てたが、不思議にも父の無畏王子に拾はれ、成長の後、北方得叉尸羅國にゆき阿提梨實迦羅といふ人に就いて醫術を學び、歸りて内外科ともに非凡の手腕を振ひ、屢釋尊の病を治した。
- 一七。辜咎 辜は罪、即ちつみとが。
- 一八。迦毘羅城 釋尊誕生の故城。梵語カピラスツ(Kapilavastu)今のニポール國カライ地方である。

釋尊の晩年、舍衛國主琉璃王の爲めに滅され、西曆五世紀の初め、法顯三藏の旅行せし頃は、城址荒れ果てて、民家數十散在してをつたといふ。

- 一九。淨飯王 迦毘羅衛國主。釋尊の父。梵語シユツドホーダナ(Suddhodana)。父は獅子頰王。
- 二〇。瞿曇 釋迦族の姓にして、又釋尊の通稱。梵語ヒーマヤ(Gotama or Gautama)釋迦種族の先祖の事。へた仙人の名であつたのを、一族の姓にしたと傳へらる。
- 二一。蓮華比丘尼 神通第一の比丘尼として有名であつた。在俗中は屢悲慘の境遇に陥り、遂に目連尊者によりて出家し、修道堅固にして比丘尼教團の上首となつたが、提婆が阿闍世王に疎せられし時彼女に宮城より出て來りて提婆に逢ひ、遂に撲殺された。

【文科】「梵行品」によりて、阿闍世王の逆害後の煩悶をのべ、六師の誘惑と、耆婆の勸化を説きたまふ一段である。

【講義】又『涅槃經』梵行品に言はく。王舎城に阿闍世といふ王があつたが、狂惡な性質で、人を殺すことを何とも思はず、口には四惡を絶たず、心には貪欲瞋恚愚痴の煩惱を起して、逆まく浪のやうなはげしい王であつた。妻子眷屬にまつわつて、現世の欲樂にふけり、その欲樂を遂げんがために、無道にも幸のない父の頻婆娑羅王を殺すやうになつたのである。父の王を殺してから、狂猛な惡人ながら、流石に、後悔を生じ煩悶するやうにな

つた。この心の煩悶が、肉體に顯はれて、瘡毒となり、その瘡が穢臭を放つて寄りつくことが出来ないやうであつた。王は自ら思ふやう、私は、今現に、生きながら、斯ういふ地獄の業報を受けて居る。もう地獄へ落ち込んで苦患を受けることも問のないことである。王は斯う思つて獨り苦みを重ねて居つた。その王の病氣の間、母の韋提希夫人は、我子の可愛さに引かれて、瘡毒の臭きも厭はず、子の無道をも憤らず、種々の藥を王の身體に塗つてやつたが、瘡はこれがために勢を増しても決して滅するといふことはなかつた。阿闍世は母にいふやう。私のこの瘡は心の煩悶から生じたので身體から出たのではありません。それで決して癒る理窟はありません。王は斯うして苦しみを受けて居つた。

時に、日月稱といふ大臣があつたが、王の座所へ参り、御伺をして片方に立つて申し上げるには、大王は、何故、そのやうにおやつれになり、面白くない御顔色をして御座るのでありますか、御身體の御痛みでありますか、御心の御痛みでありますか。王はこれに答へていふやう。私は今どうして、身體も心も苦しみ痛ますに居られやうか。私は何の罪も在りませぬのに父の王に無道の逆罪を加へ奉つた。私は昔し智慧ある人に聞いたことがある。地獄へ墮ちるに間違ない人間が世間に五人ある。五逆罪を作つたものだといふことである。

私は今現に、數限りもない澤山の罪を負うてをる。この私がどうして身も心も痛ますに居られやうぞ、私の身體の病を治して呉れる醫者はないのである。

日月稱大臣は更に王にいふやう。大王、そんなに御心配遊ばすな。世の中にも「心配すれば心配は増すもの、眠れば益々眠たいもの、色も酒も同じこと」といふぢやありませんか。王の仰しやる様に、地獄へ墮ちるに間違ない人間が五人あるなどと仰せになりますか、そんなら地獄へ行つて見て来て大王に御話したものでありますのか。地獄といふは、この世間にあるもの、ことです、智者のいふたといふのはそのことです。大王よ、あなたは、あなたの御病氣を治す醫者がないと仰せになりますか、今、富蘭那といふ大醫がおります、この人は一切知見を有し、自在定を得て、清淨の行業をして居られます。この人は常に數限りもない衆生のために、さとり法の説いてをります。この人の弟子に教ゆる所に依れば、悪業といふものもなければ、悪業の果報といふものもない。善業といふものもなければ、善業の果報といふものもない。上業だの、下業だのといふものはない。斯ういふ説法であります。この人は、今王舎城に来てをりますが、願くば大王、どうぞ駕を枉げてこの人の所へ行いて法を聞き、身心の御病氣を療治遊ばれるやうに願ひます。

王はこれに答へて、そんなによく、私の今迄の罪を除き去つて呉れる人ならば、私は歸依いたさう、といった。

又藏徳といふ大臣があつたが、この人も王の座所へ入つて次の様に申し上げた。

大王よ、あなたは、何故に、御顔の艶が衰へて、唇はがさ／＼と乾いて、御聲もそんなに細り給ふたのでありますか、御苦しきは身體の方でありますか、御心の方でありますか。

王はこれに答へて申すやう。私は今、どうして身體も心も痛まないでゐられやうぞ、私は盲で、智慧の目がない。悪い友達に近いて、提婆のやうな悪人にそゝのかされて、正法を護持して居られた父の王に無道な逆害を加へ奉つた。私は智者の偈を説くのを聞いたが、父母や、佛又は佛弟子に對して、善からぬ心を起し悪事をしたものは、阿鼻大地獄の果報を受けるといふ意味であつた。これを思へば、私は水を抱くやうに心がふるえて苦しむのぢや。私を療治して呉れる良醫はないのぢや。

大臣は更に申し上げるやう。大王、そんなに御心配あそばすな。一概に法と申しますけれども、法にも二通ありて出家の法と王法とは違ひます。王法に依れば、父を殺害するものは國王となる丈けのことでありませぬ。これは勿論逆さ事ではあります、決して罪には

なりませぬ。迦羅羅といふ蟲は母の腹を破つて生れますが、自然の與へた生れる法がさういふのでありますから母蟲の身を破つても罪はありません。驅驢は子を生むと死にますが、これも自然の法だから罪になりませぬ。王家を治める王法も亦この通り、目上の父や兄を殺した處で罪になりませぬ。それは出家の法は嚴しいもので蚊や蟻を殺しても罪になりませぬ、王法とは根柢から相違があるのであります。大王は王の御病氣を治す醫者はないと仰せになります、今末伽梨狗賒梨子といふ一切知見の王先生があつて、衆生を亦子のやうに憐れみ、自ら凡ての煩惱を離れて御座るから、衆生の貪瞋痴の三毒の毒箭を抜いて下さります。この王先生は今王舎城に居りますから、どうぞ大王自らこの人の所へ御行き下さい。大王がこの人に御遇ひ下されば、すべての罪は皆消えて仕舞ひます。

王はこれに答へていふやう。そんなに能く、私の罪を除き去つて呉れる人ならば、歸依するであらう。

又實徳といふ大臣があつたが、この人も王の座所へ行つて、偈を説いていふやう。大王何故あなたは瓔珞を抜き去り、蓬のやうに髪を亂して御座るのか。心の苦痛でありますか、又は身體の苦痛に堪へないのでありますか。

王はこれに答へて、私は今どうして身心共に苦痛を感せずにおられやうぞ。私の父は慈愛溢れ仁深く、常に憐れみを垂れ給ふた方で罪は少しも在りなかつたのだ。父の王は、人相見の所へ行きて尋ね給ふた時に、人相見は、この御兒様が生れ給ふと、屹度大王を殺す方になられますと答へた。父はこの豫言をきいても猶御厭ひなく、私を可愛がつて下された。私は昔し智者の斯う語るをきいたことがある。母に通じたり比丘尼を汚したり、僧伽のものを盗んだり、無上菩提心を起した人を殺したり、又は父を殺したりする人は無間地獄に墮つるといふのである。して見れば、私はどうして身心の苦痛を感せずにおられやうぞ。

大臣更に申し上げるやう。大王どうぞ且くその御心配を止めて下さい。すべての衆生は皆過去の業を持つて居ります。過去の業があるからいろ／＼の生死を受けるので、先王にも同じく過去の業縁で、あの様な果てやうをなされたのでありますから、王には何も罪はないのであります。大王どうぞ、意を寛うして御心配を止めて下さい。心配すれば心配は増すもの、眠れば、益々眠むたいもの、色も酒も同じ」といふ諺もあります。今、那闍耶毘羅胝子といふ大先生がおりますが、この人の處へ駕を枉げて、法をきいて下さい。

又、悉知義といふ大臣があつて、王の座所へ行き、かく申し上げた。

王はこれに答へて申された。私は今どうして、身心の苦痛を受けずにおられやうぞ。父の王には罪在りなかつたのに逆害を加へたのは私である。私は昔し智者が、父を殺せば數限りもない長の間大苦惱を受けねばならぬといふたことをきいたが、私は間もなく地獄に墮ねばならぬ。この身心の病氣を治して呉れる醫者はどこにもない。

その時大臣は又申すやう、大王どうぞその御心配を捨て、下さい。大王も御聞き及びのことでありましやうが、昔、羅摩といふ王があつて、父を殺して王位に昇つた。跋提大王、毘樓眞王、那睺沙王、迦帝迦王、毘舍佉王、月光明王、日光明王、愛王、持多人王、これらの王はみな父の王を殺して、王位を紹いだ人達である。然も一人の王も地獄へ墮ちたものはない。それのみならず、今現に毘瑠瑠王、優陀耶王、惡性王、鼠王、蓮華王など父を殺して王位を奪つた王は幾人もありますが、一人もそのやうに苦しんでゐる人はない。地獄、餓鬼、天などいうて居りますけれども、誰れもそんなものを見たものはないので、あるものは、人間と畜生だけなのであります。それも實は因と縁とで出来たものでもなければ、又因と縁とで滅びて行くものでもありません。もし因縁で生死するものでなければ、

善悪などいふことも何處にもないのであります。どうぞ大王、その御心配を去つて下さい。「心配すれば心配は増すもの、眠れば、益々眠むたいもの、色も酒も同じ」といふ諺もあ
ります。大王、今阿耨多羅含欽婆羅といふ大先生がおりますから、この人の處へ行いて法
を聞いて下さい。

又吉徳といふ大臣があつた。前の大臣等と同じ様に、初め大王と問答して、扱て改め
ていふやう。地獄といふはどういふ意味でありましたやう。私が説明してみまじやう。

地は大地の地である。獄は破るといふことである。地獄を破つて、罪業の報のないといふ
のが地獄の義である。又、地は人、獄は天で、父を殺して、人天の樂を得るといふのが地
獄の義である。それであるから、婆蘇仙人は、羊を殺して人天の樂をうるを地獄といふと
いうてゐる。又、地は命、獄は長いといふ義で、壽命の長いのを殺すといふが地獄といふ
ことである。してみれば大王、地獄といふものは全くないのである。大王麥を種えれば麥
がとれます。米を蒔けば米がとれます。してみれば地獄を殺せば地獄を得るし、人を殺せ
ば、人に生れるといふのが當り前であります。大王、今私のいふことをきいて下さい。
一體世に殺すといふことはないのであります。何故なれば、有我というても殺はなく、無

我といふても殺はない。有我ならば、我は變らぬ常住のものだから殺すといふことはない。
破られもせず壞されもせず、縛られず、繋かれず、瞞られず、喜ばれない、丁度虚空の様
なのが我である。してみれば、どうして殺害の罪といふものが成り立ちまじやうか。もし
又我がないものとするれば、一切諸法はすべて無常なもので、念々に滅するものであるから、
殺すものも殺されるものも又皆、念々に滅するのである。もしこの様に念々に滅するもの
とすれば、誰に罪があるとしやうか、罪を受くべき責任者は、何處にもないではありませ
んか。大王よ、火が木を焼いても誰も火に罪があるとは申しませぬ。又斧が樹を斫つても、
鎌が草を刈つても、罪はありませぬ。又刀が人を殺しても、刀は人でないから罪のないや
うに人も又罪はありませぬ。毒藥が人を殺してもその通り、毒藥は人でないから罪がなく、
人も亦罪のあらう道理はありませぬ。一切のものが、みなこれと同じ様に、殺すといふこ
とはないのであります。大王よ、どうぞ御心配遊はすな。「心配すれば心配を増し、眠れ
ば益々眠むたく、色も酒もその通り」といふぢやありませんか。今迦羅鳩駄迦羅延といふ大
先生が在ますから、どうぞ、その人の處へ御出で、法をきいて下さい。

又、無所畏といふ大臣があつたが、この大臣も亦、前の人達と同じやうに大王をなぐさ

めて、尼乾陀若提子の所へ行くやうにすゝめた。

その時、耆婆といふ有名な醫者があつた。この人も亦、王の座所へ見舞して、申し上げるには、大王、御安眠が出来ますか。

王はこれに偈を以て答へられた。耆婆よ、私は今重病にかゝつてゐる。王法を護持し給ふた父王に無道な逆害を加へた、それから起つて來た重病である。この病氣は、どんな名醫でも咒法でも、手のといた巧な看病でも療治することの出来ない病氣である。何故かといへば、私の父は正法を護持せられた王で、法の如くに善く國を治められ、少しも罪の在りませぬのに、私は無道の逆害を加へ奉つた。丁度水中の魚を陸へ引き上げたやうな仕業である。私は昔し智者が身口意の三業の清淨でないものは必ず地獄に墮つると説いたのをきいたことがある。私は今それである。どうして安眠することが出来やうぞ。今私の病苦はいかなる大醫もこの上ない名醫も、法の藥を説いて治して下さることは出来ないのである。

耆婆はこれに答へていふやう。善哉、善哉、大王は大罪を犯し給ふたけれども、今この大後悔を生じ、大慚愧の心を起して御座る。大王よ、諸佛世尊は常に宜ふやう、二つ

の善い法があつて、衆生を救ひ出す、一は慚である。二は愧である。慚といふは自分再び罪を作らないやうにする心である。愧といふは、他人をして再び罪を作らさない様にする心である。又慚は、自ら内心を省みて恥ぢる心ばえであり、愧はその心が露はれて他人に對して愧づる心ばえである。又慚といふは人前を耻ぢ、愧といふは天に向つて耻ぢる心である。これが慚愧である。この慚愧のない人は人ではない畜生である。慚愧心があるから父母師匠目前の人を救ふ心も起り、慚愧心があるから、父母兄弟姉妹の關係が結ばれるのである。大王あなたが今この慚愧の思ひを充分に味うて御座るといふは誠にうれしいのであります。

大王よ、今あなたの重病を癒して呉れる醫者が無いといふのは、あなたの仰せられる通りであります、然し大王、よく御知りなさい。今迦毘羅城に淨飯大王の御子様で瞿曇姓で、悉達多といふ方があります、この方は、師を待たずに、獨りでに覺悟を開き、無上正眞道を得なさいました、此の方こそ佛であります。世に最も尊ぶべき方でありました。よく障礙を破ること金剛の如き智慧を有し、衆生のすべての罪過を消滅して下されます。この佛世尊があなたの重病を治して下さられんといふことはありませぬ。

大王よ、この如來には從弟の提婆達多といふ人があります。この提婆は、衆僧の和合を破り、佛の御身體から血を出し、蓮華比丘尼を殺し、五逆罪の中三逆罪までも作つた人でありませぬ。如來は斯ういふ惡人に對して、いろいろの大切の法を御説きなされて、その重い罪を軽くして下されました。それでありませぬから如來を大良醫と申します。六師外道を良醫とは申しませぬ。

その時に空中に聲あつていふやう。大王よ、一逆罪を作れば、それに相當した罪を受け、三逆罪を作れば、三倍になり。五逆罪を作れば五倍になる。大王よ、してみれば、大王の今までの罪は、到底墮獄を、免かれないのである。大王どうぞ、一時も早く、如來の御許に行け、如來を除いては王を救うて下さる方はないのである。私は王の身の上が氣の毒であるから、斯うして來て勸めるのである。

その時阿闍世王は、この空中の語をきいて、非常に怖れを懷き、丁度芭蕉の葉やうに、身體中ふる／＼と慄はして、空中を仰いで天よ、あなたは誰方でありませぬと問ふた、空中からしては、もとの通り、相を顯はさないで聲のみして、大王、私は王の父の頻婆娑羅である。王よ、耆婆のすゝめに従つて早く世尊の御許に行くがよい。決して邪見な六大臣の

語に迷はされてはならぬとの答があつた。

この語をきいて、阿闍世王は中心の悶えの餘り氣絶して大地に歸れた。すると身體中の瘡が、一時に増して、その臭いこと、以前に倍するやうになつた。冷藥を塗つて治療せやうとしても、瘡は益々華を開いたやうに割れては毒熱を吐いて、増しても減するやうなことはなかつた。

日月稱といふ大臣は富闍那外道をすゝめ、藏徳といふ大臣は末伽梨拘隸梨子外道をすゝめ、實徳といふ大臣は、刪闍耶毘羅藍子外道をすゝめ、悉知義大臣は阿耨多翅舍欽婆羅外道をすゝめ、吉徳大臣は婆蘇仙の言を引いて、加羅鳩駄迦施延外道をすゝめ、無所畏大臣は尼乾陀若提子外道をすゝめたのである。

【餘義】一此下正しく阿闍世王の痛烈しい苦悶を明す。傳ふる所によれば、阿闍世王は父王を幽閉して食を断たしめ、更に父王が窓を通して遙かに耆闍崛山の翠緑を仰いで釋尊を念する様を知りて、その窓を塞ぎ、足裏を削らしめた。かやうな殘忍を擅にした間もなく阿闍世王はその子優陀耶が腫物を病んで傷々しく泣いてゐるのを見て、可愛さ餘りてその膿血を吸うてやつた、母耆提希夫人は、この時傍にありて、泣いて父頻婆娑羅王が阿闍

世の幼少の折、矢張かやうに膿を吸はれたことを告げた。王は之を聞いて、子に對する愛情から電氣に撲れたやうに父王の愛情を感じた。そして狂氣の如く臣下を父王の牢獄に遣はして、父王の安否を見せしめたが、父王はもう此時は息絶えてあつた。阿闍世王の取り返しのつかぬ罪惡感はこの時より起つて、日夜に心を嚙んだのである。本文に「我父辜なきに横に逆害を加ふ」と自らの罪惡を摘撥して、墮獄の感に戦いてゐることによりて明かである。

二。六師外道中、第一富蘭那迦葉 (Purāṇa Kaśyapa) 外道は、空見を主張する、即ち因果を否定して自己の責任を免れんとするのである。

第二末伽梨拘唎梨子 (Māśaragosaḥi-putra) 外道は、常見を主張する、人は必ず又人に生る。そして其人の苦樂は、生後自然に受ける、従つて殺生に就いても責任を受けないといふのである。

第三刪闍耶毘羅胝子 (Sañjaya-vairāṭṭi-putra) は、舍利弗、目連の最初の師として有名である。人は皆な前世の宿業によりて果報を獲る。これは人間の意志でどうすることも出来ないものである、故に吾等が現世に罪惡を犯しても、決して責任を受けるに及ばぬ。この理

を知らざるによつて、人は造罪の爲めに苦められると云ふ一種の宿命論者である。

第四、阿耆多翅舍欽婆羅 (Ajita-kesa-kambhala) 外道は、自然生を主張す、即ち善惡因果を否定して、罪惡よは、免れんとする。そしてこの外道は髪を抜き、弊衣を着けて苦行をこととした。

第五、迦羅鳩駄迦旃延 (Karakudakatyāyana) 外道は、自在天外道らしい。犠牲を供へて福社を得ることを説いてゐる、又巧妙なる思辯を弄し、一種の哲理を説いて罪惡を否定してゐる。

第六、尼乾陀若提子 (Nigraṇṭhajaṭi-putra) 外道は裸形外道である。衣服といふ虚飾を捨て赤裸々な生活を營みて、苦行を修す。現世に苦しんでおけば來世には福徳を獲るといふのである。

以上六師外道は、當時王舍城に於いて、多くの弟子を養成し、云はゞ宗教家と教育者と兼帯のやうな資格を有し、その日常生活に於いても、思想に於いても一般人に抜んで、をつた爲めに、衆人の尊崇を受け、祭祀を司り宗教上のことに就いて、一般人の師匠であつた。彼等は亦遊行者と稱せられ、各地を遍歴して道を弘めることは釋尊と同じであつた。

そして是が當時印度宗教家の布教振りであつたのである。

六師の説は經典の各所に斷片的に説かれてあるで、其委しい教の内容を知ることは出来ぬ。本文にもほんの教の筋道だけしか説いてない。されど上の記載丈にても大體の骨組を知ることが出来る。阿闍世王の逆害の苦悶を中心として、各の説が述べられてあるが、王は是等の説によりて、苦悶をなくすることが出来なかつた。いかに學説に依り思辯を弄しても、現在自分の中心に喰ひ込んである罪惡感拭ひ去ることは出来ぬ。愛子の苦痛を自己の苦痛と感ずる王は、同様に父王の苦痛を自己の苦痛と感ぜざるを得ない。是は論理や學説に得たるものではない。直接經驗である。その深さは實に生命とその根を一にしてゐるのである。

かくて王は、着婆の慰問を受けた。着婆は頻婆娑羅王の弟の子、其母は王舎城第一の遊女であつた、彼は生後直ちにその母に捨てられたが、偶父の王子に拾はれて名醫となつた。そして深く釋尊に歸依し、此年(成道三十七年)もちやうと、自分の邸内に釋尊を請じて兩期の修道を保證してをつたのである。流石に着婆は、深く王の中心に同情を表し、慙愧の徳を述べた。王はいま眞の道に進んでゐるのである。慙愧は實にその門戸であると

いふ。王の心が釋尊に向うた時、忽然として空中に父王の勸めを聞いた。我を殺した子を熱愛して、死すとも死せず、釋尊に行けと勸む。誠に痛烈骨に徹する趣きがある。王の最後の負け惜みの魂は、この父王の言に撲れて、悶絶した。自力我慢の立場がなくなつて、他力本願に歸する有様は實に是である。苟も信仰を獲る人は、何人もこの趣きを經驗するのである。

三。聖人は此引文の最後に六師と六臣を並べ上げられた。この中第五の婆蘇仙は六師の中でないが、吉徳の言葉の中にでた古仙人の名で、其人の言が至説の主要をなしてゐるのであげられた。普通ならば、第六の迦羅鳩駄迦旃延が、婆蘇仙の位置にあるべきである。又第六の大臣無所畏を略されたのは、婆蘇仙をあげた爲めである。是は唯上の文の主要の人物を列擧したのである、そして『淨土和讃』の初めに、王舎城の悲劇に關係した十五人をあげて、權者とせられたやうに、こゝにも是等阿闍世王の苦悶に接觸した人々の名を列擧して、權假方便の聖者と感謝せらるゝ爲めであらう。これ聖人が常に自分一人の爲めと味はれたことを表明してゐるのである。

因に『高田本』には六師六臣の配當が順序よくなつてゐる。

第三科 「梵行品」の文

又言善男子如我所言爲阿闍世不入涅槃如是密義汝未能解何故我言爲者一切凡夫阿闍世者普及一切造五逆者又復爲者卽是一切有爲衆生我終不爲無爲衆生而住於世何以故夫無爲者非衆生也阿闍世者卽是具足煩惱等者又復爲者卽是不見佛性衆生若見佛性我終不爲久住於世何以故見佛性者非衆生也阿闍世者卽是一切未發阿耨多羅三藐三菩提心者乃至又復爲者名爲佛性阿闍世者名爲不生世者名爲怨以不生佛性故則煩惱怨生煩惱怨生故不見佛性以不生煩惱故則見佛性以見佛性故則得安住大般涅槃是名不生是故名爲阿闍世善男子阿闍世者名不生不生者名涅槃世名世法爲者名不汗以世八法所不汗故無量無邊阿僧祇劫不入涅槃是故我言爲阿闍世無量億劫不入涅槃善男子如來密語不可思議佛法衆僧

亦不可思議菩薩摩訶薩亦不可思議大涅槃經亦不可思議爾時世尊大悲導師爲阿闍世王入月愛三昧入三昧已放大光明其光清涼往照王身身瘡卽愈至乃王言者婆彼天中天以何因緣放斯光明大王今是瑞相相似爲及以王先言世無良醫療治身心故放此光先治王身然後及心王言者婆如來世尊亦見念耶者婆答言譬如一人而有七子是七子中遇病父母之心非不平等然於病子心則偏重大王如來亦爾於諸衆生非不平等然於罪者心則偏重於放逸者佛則慈念不放逸者心則放捨何等名爲不放逸者謂六住菩薩大王諸佛世尊於諸衆生不觀種姓老少中年貧富時節日月星宿工巧下賤僮僕婢使唯觀衆生有善心者若有善心則便慈念大王當知如是瑞相卽是如來入月愛三昧所放光明王卽問言何等名爲月愛三昧者婆答言譬如月光能令一切優鉢羅華開敷鮮明月愛三昧亦復如是能令衆生善心開敷是故名爲月愛三昧大

王譬如日月光能令一切行路之人，心生歡喜，月愛三昧亦復如是。能令修習涅槃道者，心生歡喜，是故復名月愛三昧。諸善中，王為甘露味，一切衆生之所愛樂，是故復名月愛三昧。爾時佛告諸大衆言：一切衆生為阿耨多羅三藐三菩提，近因緣者無先善友，何以故？阿闍世王若不隨順者，婆語者來月七日必定命終，墮阿鼻獄。是故近因莫若善友。阿闍世王復於前路聞舍婆提毗瑠璃王乘船入海，遇火而死，瞿伽離比丘生身入地，至阿鼻獄，須那利多作種種惡，到於佛所，衆罪得滅，聞是語已，語者婆言：吾今雖聞如是二語，猶未審定。汝來者，婆欲與汝同載一象，設我當入阿鼻地獄，冀汝捉持，不令我墮。何以故？吾昔曾聞得道之人，不入地獄。云何？說言：定入地獄。大王一切衆生所作罪業，凡有二種：一者輕，二者重。若心口作，則名為輕；身口心作，則名為重。大王心念口說，身不作者，所得報輕。大王昔日口不勅殺，但言創足。大王若勅侍臣立斬王首，坐時乃斬，猶不得罪。況王不勅

云何得罪？王若得罪，諸佛世尊亦應得罪。何以故？汝父先王頻婆娑羅，常於諸佛種諸善根，是故今日得居王位。諸佛若不愛其供養，則不為王。若不為王，汝則不得為國，生害若汝殺父，當有罪者。我等諸佛亦應有罪。若諸佛世尊無得罪者，汝獨云何而得罪耶？大王頻婆娑羅往有惡心，於毘富羅山遊行射獵，周徧曠野，悉無所得。唯見一仙，五通具足，見已即生瞋恚惡心。我今遊獵，所以不得正坐。此人驅逐令去，即勅左右而令殺之。其人臨終，生瞋惡心，退失神通，而作誓言：我實無辜，汝以心口橫加戮害，我於來世亦當如是。還以心口而害於汝。時王聞已，即生悔心，供養死屍。先王如是，尚得輕受，不墮地獄。況王不爾，而當地獄受果報耶？先王自作還自受之，云何令王而得殺罪？如王所言，父王無辜者，大王云何言無夫有罪者？則有罪報無惡業者，則無罪報。汝父先王若無辜，罪云何有？報頻婆娑羅於現世中，亦得善果。及以惡果，是故先王亦復不定。以不定故，殺亦不定，殺不定故，云何而言定入地

獄大王衆生，狂惑凡有，四種一者貪狂，二者藥狂，三者呪狂，四者本業緣狂。大王我弟子，中有是四狂，雖多作惡，我終不記。是人犯戒，是人所作，不至三惡。若還得心，亦不言犯。王本貪國，逆害父母，貪狂心作云何得罪？大王如人，耽醉逆害其母，既醒悟已，心生悔恨，當知是業亦不得報。王今貪醉，非本心作，若非本心云何得罪？大王譬如幻師，四衢道頭，幻作種種男女象馬瓔珞衣服，愚癡之人謂爲真實，有智之人知非。真有殺亦如是，凡夫謂實諸佛世尊，知其非真。大王譬如山谷響聲，愚癡之人謂之實聲，有智之人知其非真。殺亦如是，凡夫謂實諸佛世尊，知其非真。大王如人執鏡，自見面像，愚癡之人謂爲真面，智者了達，知其非真。殺亦如是，凡夫謂實諸佛世尊，知其非真。大王如熱時炎，愚癡之人謂之是水，智者了達，知其非水。殺亦如是，凡夫謂實諸佛世尊，知其非真。大王如乾闥婆城，愚癡

之人謂爲真實，智者了達，知其非真。殺亦如是，凡夫爲實諸佛世尊，知其非真。大王如人夢中受五欲樂，愚癡之人謂之爲實。智者了達，知其非真。殺亦如是，凡夫謂實諸佛世尊，知其非真。大王殺法殺業，殺者殺果，及以解脫我皆了之，則無有罪。王雖知殺，云何有罪？大王譬如有人主知典酒，如其不飲，則亦不醉。雖復知火，亦不燒。燃王亦如是，雖復知殺，云何有罪？大王有諸衆生，於日出時作種種罪，於日出時復行劫盜，日月不出，則不作罪。雖因日月令其作罪，然此日月實不得罪，殺亦如是。至乃大王譬如涅槃，非有非無，而亦是。有殺亦如是，雖非有非無，而亦是。有慙愧之人，則爲非有，無慙愧者，則爲非無。受果報者，名之爲有，空見之人，則爲非有，有見之人，則爲非無。有有見者，亦名爲有，何以故？有有見者，得果報，故無有見者，則無果報。常見之人，則爲非有，無常見者，則爲非無。常見者，不得爲無，何以故？常見者，有惡業果，故是故常見者，不得爲無，以是義，故雖非有非無，而

亦是有大王夫衆生者名出入息斷出入息故名爲殺諸佛隨俗亦說爲殺至乃

世尊我見世間從伊蘭子生伊蘭樹不見伊蘭生栴檀樹我今始見從伊蘭子生栴檀樹伊蘭子者我身是也栴檀樹者即是我心無根信也無根者我初不知恭敬如來不信佛法僧是名無根世尊我若不遇如來世尊當於無量阿僧祇劫在大地獄受無量苦我今見佛以是見佛所得功德破壞衆生煩惱惡心佛言大王善哉善哉我今知汝必能破壞衆生惡心世尊若我審能破壞衆生諸惡心者使汝常在阿鼻地獄無量劫中爲諸衆生受大苦惱不以爲苦爾時摩伽陀國無量人民悉發阿耨多羅三藐三菩提心以下如是等無量人民發大心故阿闍世王所有重罪即得微薄王及夫人後宮采女悉皆同發阿耨多羅三藐三菩提心爾時阿闍世王語者婆言者婆我今未死已得天身捨於短命而得長命捨無常身而得常身令諸衆生發阿耨多羅三藐三菩提心諸佛弟

子說是語已即以種種寶幢復以偈頌而讚嘆言實語甚微妙善巧於句義甚深秘密藏爲衆故顯示所有廣博言爲衆故略說具足如是語善能療衆生若有諸衆生得聞是語者若信及不信定知是佛說諸佛常輕語爲衆故說盡歸依第一義是故我今者歸依於世尊如來語一味猶如大海水是名第一諦故無無義語如來今所說種種無量法男女大小聞同獲第一義無因亦無果無生亦無滅是名大涅槃聞者破諸結如來爲一切常作慈父母當知諸衆生皆是如來子世尊大慈悲爲衆故苦行如人著鬼魅狂亂多所爲我今得見佛所得三業善願以此功德迴向無上道我今所當獲種種諸功德願以此功德三寶常在世我遇惡知識造作三世罪願以此破壞衆生四種魔我遇惡知識

今於佛前悔願後更莫造願諸衆生等悉發菩提心
繫心常思念十方一切佛復願諸衆生永破諸煩惱
了見佛性猶如妙德等

爾時世尊讚阿闍世王善哉善哉若有人能發菩提心當知是人
則爲莊嚴諸佛大衆大王汝昔已於毗婆尸佛初發阿耨多羅三
藐三菩提心從是已來至我出世於其中間未曾復墮於地獄受
苦大王當知菩提之心乃有如是無量果報大王從今已往常當
勤修菩提之心何以故從是因緣當得消滅無量惡故爾時阿闍
世王及摩伽陀舉國人民從座而起繞佛三匝辭退還宮抄出

【讀方】 またいはく善男子、わが言ふところのことし。阿闍世王のために涅槃にいらす。かくの如きの密義、
なんぢいまだ解することあたはず。なにを以ての故に。わが爲といふは、一切凡夫、阿闍世王はあまれく一切
五逆をつくるものにおよぶなり。また爲はすなはち、一切有爲の衆生なり。われつるに無爲の衆生のため
にして世に住せず。なにをもつてのゆへに、その無爲は衆生にあらざるなり。阿闍世はすなはちこれ煩惱等
を具足せるものなり。また爲はすなはちこれ佛性をみざる衆生なり。もし佛性をみんものには、われつるに

ために久く世に住せず。何を以てのゆへに佛性をみるものは衆生にあらざるものなり。阿闍世はすなはち
これ、一切いまだ阿耨多羅三藐三菩提心を生ぜざるものなり。乃至た爲はなづけて佛性とす。阿闍世はなづけて不
生とす。世は怨になづく。佛性を生ぜざるをもつての故に、すなはち煩惱のあだ生ず。煩惱のあだ生ずるが
ゆへに、佛性をみざるなり。煩惱を生ぜざるをもつての故に、すなはち佛性をみる。佛性をみるをもつて
のゆへに、すなはち大般涅槃に安住することなう。これを不生となづく。この故になづけて阿闍世とす。善男子
阿闍世は不生になづく。不生は涅槃となづく。世は世法になづく。爲は不汚になづく。世の八法を以てがされ
ざる所なるがゆへに、無量、無邊、阿僧祇劫に涅槃にいらす。このゆへにわれ阿闍世王のために、無量億劫に
涅槃にいらすとすのたまへり。善男子、如來の密語不可思議なり。佛、法、衆僧また不可思議なり。菩薩摩訶薩ま
た不可思議なり。大般涅槃經また不可思議なり。そのときに世尊、大慈導師、阿闍世王のために、月愛三昧
にいれり。三昧にいりをはり。大光明をはなつ。そのひかり清涼にしてゆきて王の身をてらしたまふに、身
の瘡すなはちいえぬ至

王のいはく、善哉、かれは天中天なり。なんの因縁をもつてこの光明を放ちたまふぞや。善哉答ていはく、大王
いまこの瑞相は王のために及ぼすにあひ似たり。王さきに世に眞醫の身心を療治するものなしといふがゆへに、こ
の光を放てまづ王身を治す。而してのちに心におよぶ。王のいはく、善哉、如來世尊、また見たてまつらんと念ふ
をや。善哉、たへてまふさく、たとへば一人にしかも七子あらん、此七子の中にやまひにあへば、父母の心平等
ならざるに非ざれども、しかも病子において、心すなはち偏におもきがごとし。大王、如來も亦かなり。もろ

もろの衆生におきて、平等ならざるに非ざれども、しかも罪者において心すなはち偏におもし。放逸のものにおいて、佛すなはち慈悲を生ず。不放逸のものには心すなはち放捨す。何等をかなづけて不放逸のものとするいはく六住の菩薩なり。大王、諸佛世尊もろの衆生に於て種姓、老、少、中年、貧富、時節、日月、星宿、工巧、下賤、僮僕、婢使をみそなはず。たゞ衆生の善心あるものをみそなはず。もし善心あれば、すなはち慈念したまふ。大王まさしるべし。かくのごとき瑞相は、すなはちこれ如来、月愛三昧に在りて放つところの光明なりと。王すなはち問ていはく、なんらなかなづけて月愛三昧とすると。善婆こたへていはくたとへば月のひかり、よく一切の優鉢羅華をして開敷し鮮明ならしむるがごとし。月愛三昧もまたかくかくのごとし。よく衆生をして善心開敷せしむ。このゆへになづけて月愛三昧とす。大王たとへば月のひかりよく一切かちをゆく人の心に歡喜を生ぜしむるが如し。月愛三昧もまたく是のごとし。よく涅槃道を修習せんもの、心に歡喜を生ぜしむ。このゆへにまた月愛三昧となづく。乃至諸善のなかの王なり。甘露味とす。一切衆生の愛樂することゝなり。このゆへにまた月愛三昧となづく。至乃

そのときに佛、もろの衆生につけてのたまはく、一切衆生阿耨多羅三藐三菩提にちかづく因縁のためには、善友をさきとするにはしかず。何をもつてのゆへに、阿闍世王もし善婆のことはに隨順せば、來月七日に必定して命絶して阿鼻獄に墮せん、このゆへに、近き因は、善友にしくことなし。阿闍世王また前路においてきく、舍婆提の毗瑠璃王ふれに乘じて海邊に在りて死す。瞿伽離比丘、生身に地に在りて阿鼻獄にいたれり。須那利多是種々の惡をつくりしかども、佛所に在りて衆罪消滅しぬ。この語を聞をは

りて善婆にかりていはく、われ今かくの如きの二の語をきくといへども、なを未だ定めて善ならず。汝きたれ。善婆、われ汝とおなじく一象ののらんとおもふ。たとひ我まさに阿鼻地獄に在るべくとも、れかばくば汝提持して、我をして墮さしめざれ。何をもつての故に我むかしかつてきき。得道の人ば地獄にいらすと乃いかんぞ説てさだめて地獄に在ると言と。佛、大王に告たまはく、一切衆生の所作の罪業に、おほよそ二種あり、一には輕、二には重なり。もし心と、口とにつくるは、則ちなづけて輕とす。身と口と心につくるは、則ちなづけて重とす。大王、心におもひ口にときて身になさざれば、うるところの報輕なり、大王、むかし口に殺せよと勅せず、足をけづれといへりき。大王、もし侍臣に勅せましかば、たちどころに王の首をさりました。坐のときに乃ちきるとも、なほ罪をえじ、いはんや王勅せず。いかんぞ罪をえん、王もし罪をえば、諸佛世尊もまた罪をえたまふべし。何をもつてのゆへに、汝が父先王頻婆娑羅つれに諸佛においてもろくの善根をうへりき。このゆへに今日王位に居することをえたり。諸佛もしその供養をうけざらましかば、すなはち王たらざらましも。もし王たらざらましかば、汝すなはち國のために害を生ずることなえざらまし。もし汝、父を殺してまきに罪あるべくばわれ等諸佛また罪ましますべし。もし諸佛世尊つみを得たまふことなれば、汝ひとりいかんぞしかも罪をえんや。大王頻婆娑羅、むかし惡心ありて毗富羅山に遊行して、鹿を射獵して曠野を周徧しき。ことごとく得るところなし。たゞひとりの仙の五通具足せるをみる。見をはりてすなはち瞋惡心を生じき。われいま遊獵す。得ざる所以はこの人驅り逐うて去らしむるに坐す。すなはち左右に勅して殺らしむ。そのひと終にのそんで瞋を生ず。惡心ありて神通を退

失して、しかも誓言をななく、われ實に華なし。なんぢ心口をもてよこさまに毆害をくはふ。われ來世において、またまさに是の如くかへりて心口をもて、しかも汝を害すべしと。ときに王き、をはりて、すなはち悔心を生じて、死屍を供養しき。先王かくのごとくなほ軽くうくることをえて、地獄におちす。いはんや、王は爾す。しかもまさに地獄に果報をうくべけんや。先王みづから作りて、かへりて自らこれなうく。いかんぞ王をしてしかも殺罪をえしめん。王のいふところのごとし、父の王つみなしと云はば、大王いかんぞ無といはんやそれ罪あらば、則ち罪報あらん。惡業なくばすなはち罪報なけん。なんぢが父先王もし罪あることなくば、いかんぞ報あらん。類邊婆羅、現世のなかにおいて、また善果および惡果をえたり。このゆへに先王またく不定なり。不定なるをもてのゆへに、殺もまた不定なり。殺不定ならば、云何んしてかまためて地獄にいらんといはん。大王、衆生の狂惑におほよそ四種あり。一には貪狂、二は癡狂、三には呪狂、四には本業緣狂なり。大王、わが弟子のなかにこの四狂ありおほく惡をつくるといへども、我つるにこの人戒を犯せりと記せず。この人の所作、三惡にいたらず、もしかへりて心をえば、また犯といはず。王もと國を食してこれ父の王を逆害す。貪狂の心をもてたれになせり。いかんぞ罪をえん。大王、ひとの耽醉してその母を逆害せん。すでに醒悟しはりて、心に悔恨を生ぜんがごとし。まさに知るべし、この業また報をえじ。王また貪醉せり。本心の作せるにあらず。もし本心にあらずはいかんぞ、罪をえんや。大王、たとへば幻師の四衢道の道のほとりにして、種々の男女、象馬、瓔珞、衣服を幻作するがごとし。愚痴の人はおもうて眞實とす。有智のひとは眞にあらすとしれり。殺もまたかくのごとし。凡夫は實とおもへり。諸佛世尊はそれ眞にあらすとししめせり。大王、たとへば山谷

の響の聲のごとし。愚痴のひとはこれを實のこゑとおもへり。有智の人はそれ眞にあらすとしれり。殺もまたかくのごとし。凡夫は實とおもへり。諸佛世尊はそれ眞にあらすとししめせり。大王、ひとの怨ありて許りきたりて親附するがごとし。愚痴の人はおもうて眞實とす。智者は了達して、すなはちそれ虚く許れりとしらん。殺もまたかくのごとし。凡夫は實とおもふ。諸佛世尊はそれ眞にあらすとししめせり。大王、ひとを鏡をとりてみづから面像をみるがごとし。愚痴の人はおもうて眞の面とす。智者は了達してそれ眞にあらすとしれり。殺もまたかくのごとし。凡夫は實とおもふ。諸佛世尊はそれ眞にあらすとししめせり。大王、熱のときの炎のごとし。愚痴の人はこれこれ水とおもはん。智者は了達して、それ水にあらすとしらん。殺もまたかくのごとし。凡夫は實とおもはん。諸佛世尊はそれ眞にあらすとししめせり。大王、乾闥婆城のごとし。愚痴の人はおもうて眞實とす。智者は了達して、それ眞にあらすとしれり。殺もまたかくのごとし。愚痴の人はこれをおもうて眞實とす。智者は了達して、それ眞にあらすとしれり。殺もまたかくのごとし。凡夫は實とおもへり。諸佛世尊はそれ眞にあらすとししめせり。大王、殺法、殺業、殺因、殺果、および解脱、われみなこれをさとれり。すなはち罪あることなけん。王、殺をしると雖どもいかに罪あらんや。大王、たとへば人主ありて酒を典れりといへども、もしそれ飲ざれば則ちまた醉はざるがごとし。また火とするといへども燒燬せず。王もまた殺を知る月の出るときにおいて、また劫盜を行せん。日月いでざるにすなはち罪をつくらしむといへども、この日月實

につみをえず。殺もまたかくのごとし。至乃
 大王、たとへば涅槃は有にあらす、無にあらすして、而もまたこれ有なるがごとし。殺もまたかくのごとし。非有非無にして、しかもまたこれ有なりといへども、慙愧の人はすなはち非有とす。無慙愧の者はすなはち非無とす。果報を受るもの、これを名けて有とす。空見の人はすなはち非有とす。有見のひとはすなはち非無とす。有有見の者亦なづけて有とす。何を以てのゆへに、有々見のものは果報をうるがゆへに。無有見の者はすなはち果報なし。常見の人はすなはち非有とす。無常見の者はすなはち非無とす。常々見のものは無とすることをえず。何を以てのゆへに、常々見のものは惡業の果あるがゆへに、このゆへに常々見のものは無とすることをえず。この義をもつてのゆへに、非有非無なりと雖ども而もまにこれ有なり。大王、それ衆生は出入の息になづく。出入の息をたつ。がるがゆへになづけて殺とす。諸佛俗にしたがひてまたときて殺とす。至乃
 世尊、われ世間をみるに、伊闍子より伊闍樹を生ず。伊闍より栴檀樹を生ずるものをみす。われいまはじて伊闍子より栴檀樹を生ずるをみる。伊闍子はわが身これなり。栴檀樹はすなはちこれわが心、無根の信なり。無根とは、我はじめて如来を恭敬せんことをしらず、法信を信ぜず、これを無根となづく。世尊、われもし如来世尊にまうあはずばまきに無量阿僧祇劫において、大地獄にありて無量の苦をうくべし。われいま佛をみたまつる。この佛をみたまつりて、うるところの功德をもて、衆生の煩惱惡心を破壊せしむ。佛のたまはく、大王、よきかな、我いま、汝のかならずよく衆生の惡心を破壊することをしれり。世尊、もし我あきらかによく、衆生のもるゝの惡心を破壊せば、われつれに阿鼻地獄にありて無量劫のうちに、もろゝの衆

生のために苦惱をうけしむともつて苦とせず。そのときに摩訶陀國の無量の人民、ことごとく阿耨多羅三藐三菩提心をおこしき。かくのごときらの無量の人民、大心を發するをもつてのゆへに、阿闍世王所有の重罪、すなはち微薄なることをえしむ。王および夫人、後宮、采女、ことごとくみなおなじく阿耨多羅三藐三菩提心をおこしき。そのときに阿闍世王、善婆にかたりていはく、善婆、われ今いまだ死せずしてすでに天身をえたり。短命をすて、しかも長命をえ、無常の身をすて、しかも常身をえたり。もろゝの衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむ。乃 諸佛の弟子、この語をときをばりて、すなはち種々の寶幢をもつて乃 また偈頌をもつてしかも讚嘆してまふさく。

實語はなほ微妙なり。善巧句義において、甚深秘密の藏なり。衆のためのゆへに、所有廣博の言を顯示す。衆のためのゆへに、略してとかく是のごときの語を具足して、よく衆生を療す。もしもろゝの衆生ありて、この語をきくことを得るものは、もしは信、および不信、さだめてこの佛説をしらん。諸佛つれに輒語をもて、衆のためのゆへに應をときたまふ。應語および輒語、みな第一義に歸せん。この故にわれいま世尊に歸依したまつる。如来のみことば一味なること、なほ大海の水のごとし。これを第一論となづく。かるがゆへに無々義のみことをもつて、如来いま種々無量の法を説きたまふ所なり。男女大小、きいておなじく第一義を得しめん。無因また無果なり。無生また無滅なり。これを大涅槃となづく。きくもの諸結を破す。如来一切のために、つれに慈父母となりたまへり。まさに知るべし、もろゝの衆生はみなこれ如来の子なり。世尊大慈悲、衆、のために苦行を修したまふ。人の鬼魅にくるはされて、狂亂して所爲おほきかごとし。わ

れいま佛をみたてまつることを得たり。うるどころの三業の善、ねがはくばこの功徳をもて、無上道に廻向せん。われいま供養するこの佛法、および衆僧、ねがはくばこの功徳をもて、三寶つれに世にまします。我いままきに得べきところの種々のもろくの功徳、ねがはくばこれをもて衆生の四種の魔を破壊せん。われ悪知識にあひて、三世のつみを造作せり。いま佛前にして悔仰。ねがはくば後にさらに造ることなかん。ねがはくばもろくの衆生、ひとしくことごとく菩提心をおこさしめん。心をかけて、つれに十方一切佛を思念せん。またねがはくば、もろくの衆生、ながくもろくの煩惱を破し、丁寧に佛性のみること、なを妙徳のごとくして等しからん。

そのとき世尊、阿闍世王をほめたまはく、善哉々々、もし人ありて、よく菩提心をおこさん、まきに知るへしこの人はすなはち諸佛大衆を莊嚴すとす。大王、汝むかしすでに毘婆尸佛において、はじめて阿耨多羅三藐三菩提心をおこしき。これよりこのかたわが出世にいたるまで、その中間において、いまだ曾てまた地獄に墮して苦をうけず。大王まきにしるべし。菩提の心、いましかくのごときの無量の果報あり。大王、けふより已往に、つれにまきに菩提の心を勤修すべし。何をもつての故に、この因縁にしたがひて、まきに無量の悪を消滅することを得べきがゆへなりと。そのとき阿闍世王および摩伽陀國の人民、こぞりて座より起て、佛をめぐること三市して、辭退して宮にかへりにきと。抄出

【字解】一。有爲衆生 無爲衆生に對す。有爲は爲作造作の意、無爲自然の働きをなすことの出来ない衆生といふこと。こゝでは凡夫と聲聞、緣覺の二衆を指す。

二。無爲衆生 有爲衆生に對す。齷齪な心の働きたる爲作造作を離れ、無爲自然の働きをなす衆生初住以上の聖者を指す。

三。世八法 『起信論義記』下末によれば、利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂。人生々活には必ずこの八事ありて自他を汚すといふ。

四。阿僧祇劫 又は阿僧企耶、梵語アサンクフヤ (Asankhya) の音譯。無數、無央數と譯す。限りない長い時間のこと。

五。優鉢羅華 梵語ウトバラ (Utpala) 又は尼羅毘鉢羅華 (Vilvapa) ともいふ。青蓮華と譯す。

六。舍衛提 舍衛城のこと。梵語シヌラーワステイ (Savasti) 室羅筏悉底、尸羅婆提、皆な音譯。拘薩羅國の都城、釋尊在世の時、波斯匿王こゝに都す。祇園精舍は、この都城の南一里の處にあり。鹿園精舍は、祇園精舍の東北一里の處にあつた。

七。羅伽離 又は羅波離。提婆達多黨の一人で、舍利弗、目連を誹謗した爲めに、身に惡瘡を生じ、漸次に増大して、膿血流れ、發熱甚しくして焼くが如く、遂に大鉢曇摩地獄(八寒地獄の二)に墮在したと傳ふ。

八。毗富羅山 摩竭陀國にある山名。梵語キプラ (Vipula) 廣と譯す。即ち廣山。山の形によりて廣博、山とも譯せらる。

九。仙人 世間を離れて、山林に生活し、神通自在の術ありといふ人。

一〇。五神通 天眼、天耳、宿命、他心、神足通の稱。

- 一、食狂 貪欲が本で發狂する。金錢の欲や、名譽欲や、色情のことで發狂するのは夫である。
- 二、樂狂 性に合はぬ樂を呑みで發狂する。
- 三、咒狂 人に咒はれて發狂する。
- 四、本業緣狂 過去の業因で發狂する。
- 五、乾闥婆城 龍神が空中に現はす所の城廓。今の屋氣樓のこと。乾闥婆はもと西域の樂兒のこと。彼等は奇術によりて稱々の幻作をなす。この城は化現の城であるから、樂兒の化作に托して、この名を作つたらしい。

- 一六、空見之人 罪惡の體は空なものと思ふ人。
- 一七、有見之人 罪惡の體はどこ迄もあると思ふ人。
- 一八、有見者 有に於いて有を見る人。即ち罪惡の體は有るといふことを、もう一つ執着する見解。
- 一九、無有見 第二の有見に反對する人。罪惡の體は有ることはないといふ見解。以上の四種は其内容は有無の二見であるが、論理的に四種に煩つたのである。
- 二〇、常見之人等 上の「有」を常に代へたるもの。即ち罪惡に就て、上にはその存在(有)にて論じ、今は常恒性(常)に就いて云ふの相違あるのである。
- 二一、伊蘭子 梵語エーランダ(Erandā)、伊蘭樹の實(子)といふこと。この樹は臭氣強く、四十由旬(一由旬は我國の七里弱又は五里)の間に蒸じ、花は紅にして愛すべきも、之を食へば發狂して死に至ると稱せらる。
- 二二、栴檀 梵語チャンドナ(Candana)、香木の名。赤、白、紫の數種ありて、病を治すといふ。此木僅に芽を吹けば、伊蘭林の惡臭を皆な失くするといふ。
- 二三、後宮 妃、きさき。
- 二四、采女 宮中に仕へる官女。采は彩、紅粉にて化粧する女といふ意。
- 二五、天身 淨天身のこと。淨天は聖者のこと。聖者の身といふこと。
- 二六、第一義 第一義諦のこと。即ち眞如實相のこと。
- 二七、四種覺 煩惱覺、死覺、五陰覺、天覺。
- 二八、毗婆尸佛 梵語キハシニイシ(Vipaśyī)。過去七佛の第一。人壽八萬歳の時、般頭婆提城に生れ、波羅羅樹下に成道して、説法度生せりと。

【六科】 同く梵行品の文によりて、佛住世の因縁、逆罪消滅、閻王の獲信等をのべたまふ一段である。

【講義】 又同じき『涅槃經』梵行品に言はく、善男子よ、私(佛自ら)を指し給ふ(の)いふ通りである。私は、阿闍世王のために、命を延べて、涅槃の雲に隠れぬのである。迦葉よ、汝には、この秘密の意味はいまだ解らぬであらう。何故かといへば、私が、「爲」といふのは、一切の凡夫のためといふことで、阿闍世は、すべて五逆罪を作つたもの其の代表に出したまでのことである。また「爲」といふのは、一切の有爲の衆生、即ち凡夫二乗のため

といふことである。私は無爲の衆生、即ち眞如有爲を證り得た衆生のために、この世に生きてゐるのではない。何故かといへば、無爲の衆生といふけれども、實は眞如無爲を證つたものは衆生でないからである。阿闍世といふは、ひろく、あらゆる煩惱を具足して凡夫等を指すのである。また「爲」といふは、いまだ佛性を見ることの出来ない衆生のことである。佛性を見たもの、ために私はこの世に生きてゐるのではない。何故ならば、佛性をみたものは、既に衆生でないからである。阿闍世といふは、いまだ無上の菩提心を起さないすべての衆生をひろく指すのである。また「爲」といふは佛性のことである。阿闍世の阿闍(アチャータ)は不生といふこと、世(シヤトル)は怨といふことである。佛性の芽を生ぜないから、一日中いろ／＼の煩惱の怨を生じてゐるのである。煩惱の怨が起りづめに起つてゐるから佛性が見られない。もし煩惱を起さないやうになれば、本有の佛性を見ることが出来、従つて、大般涅槃の證悟に住することが出来るやうになるのである。これを不生といふのである。それで阿闍世と名けるのである。

善男子よ、又阿闍は不生といふこと、不生は不生不滅で、涅槃のことである。世は世の八法(利衰毀譽等)のことである。「爲」は汚されぬといふことである。譽めたり毀つたりする世の八法に汚されないで、數限りもない長劫の間、涅槃の雲に入らず、世に住することを、阿闍世のために住すといふのである。

善男子よ、如來の秘密の御語は思ひ識ることの出来ぬものである。佛法僧の三寶も亦不可思議である。菩薩摩訶薩も亦不可思議である。「大般涅槃經」も亦不可思議である。その時に、大慈悲を以て世の導師となり給ふ世尊は、阿闍世王のために、月愛三昧に入りて大光明を放ち給ふた。この御光明はいかにも清らかに涼しく、遙かに阿闍世王の邊にいたり、王の身を照すに、今まで見るに見られぬ全身の瘡が、一時に跡形もなく癒えたのである。

阿闍世王のいふやう。耆婆よ、彼の如來は天の中でも最も勝れた天である。どういふ緣由で、この光明を放ち給ふたのであらうか。耆婆はこれに答へていふやう。大王よ、今此の光明を放ち給ふ大瑞相は、王のために給ふのでありまじやう。王が先に自分の病氣を療治する醫者はないと仰せられましたから、如來は先づこの光明を放つて王の身の病を療治してそれから心の病氣の方に向ひ給ふたのであります。

王のいはるゝやう、耆婆よ、如來も亦私を見たいと思ひ給ふであらうか。
 耆婆これに答へていふやう。譬へて白せば、七人の子のある親は、七人の子供は皆變りなく可愛いが、その中、一人病氣の子があるとすると、どうしても特別に、病氣の子に心を引かるゝやうなもので、如來も亦この通りであります。一切の衆生を一子に如く平等に愛し給ふけれども、特に罪の重いものに眼をかけ給ふのである。如來は放逸のものに對して慈悲の念深く、不放逸にして精進の修行の出来るものをば打ち捨て置き給ふ。不放逸の人とは十住位の前六位の菩薩のことで、この菩薩は打ち捨て置いても、自分のことは自分で處置をつけて行く力があるからである。大王よ、諸佛如來は、衆生の氏や素情や、老若貧富の區別や、衆生の生れた時節、日月、星宿の具合とか、手仕事をするものとか、身分が卑しいとか名使だとか、さういふことを觀給はず、たい衆生に善心——喻へば慙愧心の如き——の有る無しをみて、善心あるものがあれば、自ら喜び給うて、慈悲愛憐の念を垂れ給ふのである。大王よ、私共の先程見奉つた瑞相は、如來が、月愛三昧に入つて、その中の定中のより放ち給ふた光明であります。
 王問うて曰く。月愛三昧とは何のことであるか。

耆婆答へて曰く。譬へて申しますと、月の光には、すべての青蓮華を鮮明に花咲かせるはたらきがあるやうに、月愛三昧には、衆生の善心を起さしむるはたらきがあります。それで月愛三昧と名づけます。

又譬へて申せば、月の光は、すべての路行く人に歡喜をあたへるやうに、月愛三昧も、涅槃の道を通る修行者に歡喜を與へ給ふのであります。それで月愛三昧と名づけます。

又この三昧は、あらゆる善の中の王であります。甘露の味のあるものであります。すべての衆生の非常によろこび願ふものであります。それで月愛三昧と名づけます。

其の時に、釋迦牟尼如來は、會座の大衆に告げ給ふやう。すべての衆生が、無上正眞道のさとりを得る一番近い因縁となるものは、善き友即ち善知識である。何故かといへば、阿闍世王が、耆婆のすゝめに隨はなかつたならば、王は來月七日に必ず生命終つて、無間地獄に墜つる筈であつたのである。それであるから、さとりを得る大切な近い因縁は、善知識である。

阿闍世は、佛の御許へ參らうとする途中で、舍衛城の毘瑠璃王が、災難を避けんがために、船に乗つて、海に入り、却つて、船火事に遇うて、死んだといふこと、瞿伽離比丘が

生きながら、大地が裂けて無間地獄に墮ち込んだこと、須那利多はいろ／＼の悪事を積んだが、佛の御許へ走つて、すべての罪の消えたことをきき、耆婆に語つていふやうには、斯ういふ二つの事柄、即ち毘瑠璃王と瞿伽離比丘が佛に歸依せずして災に遇ふたこと、須那利多が佛の御許へ參つて罪の消えたことと二つの事柄をきくけれども、私は猶迷うてゐる。耆婆よ、私は御前と一緒に、同じ象に乗らうと思ふ。さうすれば、たとひ私が無間地獄へ墮ちやうとしても、御前が押へて墮さしめぬであらう。何故ならば、私は曾て道を得た聖者は決して地獄に墮ちないと聞いて居るからである。すれば私も御前と一緒に居れば地獄へ墮つることはないであらう。

佛、阿闍世王に告げ給はく。すべての衆生のつくる罪に輕罪と重罪の二種類がある。心と口で造る罪は輕罪であるが、身と口と心に造る罪は重罪である。大王よ、心に何々させやうと思つて、それを口に顯はした丈で、身體を以てなさなければ、罪も輕く、従つてその人の受くる報も輕いのである。

大王よ、王は昔、父の王を殺せとは命せず、たゞ禁足して幽閉せよと命せられた丈である。たとひ、大王が侍臣に王の首を斬れと勅命を下して、直に王の首を斬つても、猶、

自ら手を下さぬのであるから、重罪にはならぬ。況んや、王は殺せと命せられたのでないから重罪にはならぬ。もし王が重罪を得るといふならば、諸佛世尊も亦罪を得給ふ譯である。何故ならば、王の父頻婆娑羅王は、過去世に於て、常に諸佛如來を供養し奉つて善根を植え、その善根に依つて、今生に王位に昇つたのである。もし諸佛如來がその供養を受け給はなんだならば、頻婆娑羅王も王位に昇らなんだであらうし、従つて、王も國を奪はんとして殺害するやうのこともなかつたであらう。王が父の王を殺して重罪あらば、諸佛も亦罪を得給ふ譯である。諸佛に罪がなくて、王獨り罪ある道理はない。

大王よ、昔、王の父頻婆娑羅王は、狂惡の心を懷いて、毘富羅山に遊び、鹿を得やうとしてはてしない野をさまよひ歩いたが、一頭も得ることが出来ず、不圖、五通を具へた一仙人を見出して、大に怒り、一頭の鹿も得られぬのは、畢竟この仙人が鹿を逐ひやつたからである。無理なことを思つて、左右の侍臣に命じて仙人を殺さしめたのである。仙人はその臨終に瞋恚の炎を燃やし、五神通を失ひ、誓を立て、いふには、私には罪がないのだ。汝が心と口とに依つて私を殺させるのだ。よし私も來生は、汝のした通りに心と口とを以て汝の命をとつて復仇するであらうと。頻婆娑羅王はこの咀の語をきいて、後悔をして、

懇ろに仙人の屍を供養した。頻婆娑羅王は、自ら殺せと命じてこの大罪を犯したけれども、懺悔の力に依つて、報は軽く地獄に墮ちずに済んだのである。況んや王は殺せと命じたのではないから、王獨り墮獄の果報を受けるといふことはないのである。今度のことは頻婆娑羅王が自ら作つて、自らその果報を受けた丈けのことである。どうして王が殺逆罪を作つたと曰はれやうぞ。王は父の王に辜はないと問はれるけれども、どうして罪がないと云はれやうぞ。罪があるから罪の報があるので、罪がないなら、罪の報はないのである。王にも罪がないならば、どうして報があらうぞ。頻婆娑羅王は、現生に、國王の善果と殺害の悪果とを得て居る。それであるから先王は善果の人とも、悪果の人ともいふことが出来ぬ。不定の人である。この不定の人を殺したのであるから、罪も亦重いと名づけられぬ。不定の罪であるから、吃度地獄へ墮ちるとは定められぬ。

大王よ、衆生の狂氣に四種類ある。一には貪欲の煩惱が高じて狂氣になつたもの。二には薬を呑んで狂氣になつたもの、三には呪咀はれて狂氣になつたもの。四には過去の業報で狂氣になつたものの四種類である。大王よ、私の弟子の中にも、この四種の狂者がある。それであるから、私は、弟子が罪を作り戒を犯しても、狂氣でしたことならば、その人は

戒を犯したとは云はぬ。この狂者の所作は三惡道に墮する罪とはならぬ。正氣になれば、戒を犯さぬのであるからである。王も亦、昔國をとりたといふ欲から、父の王を殺したので、つまり貪狂心でした仕事である、これをどうして罪だといふことが出来やう。大王、譬へば酒に泥酔して母を殺して酒が醒めて、後悔するやうなもので、この泥酔の所作は罪とはならぬ。王も亦貪欲の煩惱に酔はされて無道のことをしたので、實は本心ではなかつたのである。本心でしたことではなければ、どうして罪を得るといはれやうぞ。大王、譬へば幻術者が町の四角で、男女、象馬、瓔珞、衣服のいろいろのものを作り出すを見て、愚かな人は眞實のものだと思ひ、智慧ある人は、眞實のものでないと知つて居る。殺害も丁度その如く、凡夫は實事と思ふけれども、諸佛世尊は殺すの殺されるのといふことはないことを知り給ふから、幻であると知り給ふのである。又、大王、譬へば、山彦の様なので、愚かな人は眞實の聲と思ふけれども、智慧ある人は、眞實の聲でない、ほんの反響であるとして知る。殺害もその通りで、凡夫は眞實の殺害と思ふけれども、諸佛如来は眞實のものでなく、幻に過ぎないと知り給ふのである。大王よ、譬へば怨を懐いて居る人が、詐つて阿諛するのに、愚かの人にはまことの事と思ひ、智者は腹を見抜いてその詐りを

看破するやうなものである。殺生罪についても、凡夫はまことの事と思ひ、諸佛世尊はその幻を知り給ふのである。大王よ、又譬へば鏡に向つて寫つたすがたをみて、愚かのものはまことの顔と思ひ、智慧あるものは鏡中の影であると知るやうに、殺生についてもその通り、凡夫はまことごとと思ひ、諸佛世尊はその幻なることを知り給ふのである。大王よ又譬へば陽炎をみて、愚かのもとは水と思ひ誤り、智者は水でないを知るやうに、殺生についてもその通り、凡夫はまことごとと思ひ、諸佛世尊は幻であると知り給ふのである。大王よ、又譬へば尋香城(唇氣樓)をみて、愚かなものは眞實の城と思ひ、智慧あるものは化城といふことを知るやうに、殺生に就いてもその通り、凡夫はまことと思ひ、諸佛世尊はその幻なるを知り給ふのである。大王よ、又譬へば、人が夢の中で五欲の樂を得るを、愚かな人は現實のことと思ひ、智者は夢の中のことと悟るやうに、殺生に就てもその通り、凡夫はまことごとと思ひ、諸佛世尊はその幻なるを知り給ふのである。大王よ、私は殺生の法も正しく殺生することも、殺生の因も、殺生の果も及びその解脱法もすべてみな知つてゐるけれども、殺生をしたことがないから罪がない。王も殺生を知るけれども、これでどうして罪があると曰はれやう。譬へば、人あつて、酒のことを主り、酒

のことはよく知つて居るけれども、もし飲まなければ、酔ふといふことがなく、復たとひ火のことを知つてゐてもそれ丈で火は物を焼かぬやうに、王もその通り、殺生のことを知つて居つても、それでどうして罪があると云はれやう。大王よ、衆生あつて、日の出て居る時に種々の罪を造り、月の出てゐる時に、強盜をはたらき、日も月も共にない時に、罪惡をせなんだとすれば、日と月とに依つて罪を作つたといふことになるが、それでも日も月も罪あるとは云はれないやうに、殺生についても亦その通りである。

大王又譬へば涅槃の實性は有とも云はれず、又無ともいはれず、而もその業用のある邊からいへば有と云はねばならぬと同じである。殺生もその實體からいへば、有ともいはれず、無ともいはれず、業用からいへば有と曰はねばならぬものである。慚愧心ある人に對しては非有であり、慚愧心のない人に對しては非無であり、その果報を受けた人からいへば有である。又諸法の本性本來空なるを知る人には非有である。萬有實在の迷妄に囚はれてゐる人には非無である。この有見を執じてゐる人には有である。何故ならば、この有々見の人は罪の果報を受けるからである。この有見を持たず、罪體の空なるを知る人には罪の果報はない。又涅槃の本性の常住寂滅なることを了解して居る人には非有である。こ

の涅槃の常住寂滅を知らない人には非無である。又この常住寂滅を執著してゐる人には有である。何故ならば、この常住寂滅を執著してゐる人には、罪の果報があるから有といはねばならぬのである。

それであるから、殺生の實體は、非有であり、非無であつて、而もその業用から云へば有といはねばならぬ。

大王よ、一體衆生といふは出たり入つたりする息を名づけたものである。この出入の息を断ち切つて仕舞ふのを殺害といふのである。五蘊もと無常なれば、殺害といふことはないのであるけれども、諸佛世尊は世俗の人々に従つて假りに説いて殺害といふことをいはれるのである。

その時、阿闍世王は世尊に左の如く申し上げた。世尊よ、私は世間を見渡しますに、伊蘭といふ毒樹の實からは伊蘭の樹が生えます。伊蘭の實から栴檀の樹の生えたことを見たことはありません。然るに今私は初めて、伊蘭の實から栴檀の樹の生じたのを見ました。伊蘭の實といふは、私のことでもあります。栴檀の樹といふは、私の心に生えた根のない信仰のことであります。根のないといふのは、私は、今まで、恭しく如來に事へ奉つたこと

もなく、法實、僧實を信じたこともない者であります。斯う云ふ者へ、斯の信仰の生じて下されたのは、眞實に根のない處へ生えた樹のやうであるから申したのであります。世尊、もし私にして、如來世尊に御遇ひ申すことが出来なれば、私は無量永劫の間、地獄へ墮ちて限りのない大苦惱を受けねばならぬのであります。私は現に今佛を拜し奉つてゐますが、願くば、この見佛のあらゆる功德を以て、未來の衆生の煩惱を破りたいと思ひます。

佛の宣ふやう。大王よ、善い哉、汝のその功德を以て未來衆生の煩惱を破り悪心を除き得ることは今、私の見透してゐる所である。

阿闍世王の申し上げるやう。世尊、もし私が、衆生の悪心を破ることが出来ますならば、私は無間地獄にあつて、無量永劫の間、衆生のために苦惱を承け通しに承けても苦しいとは思ひません。

この阿闍世王の語をきいて、摩伽陀國の數多い國民が一時に大菩提心を起した。これらの數多い人々が、大菩提心を起したために、阿闍世王の重い罪は、大に薄らぐ事が出来た。阿闍世王を始めとし、韋提希夫人、その他奥御殿の采女達も皆、一樣に大菩提心を起され

た。
爾の時に、阿闍世王、耆婆に語つて申さる、やう。私は近い中に、死ぬべき身であり乍ら、死を免かれて、聖者の得給ふ身體を得た。短かい命を捨て、無量壽の生命を得た。無常の身體を捨て、常住の身體を得た。その上、私のことが御縁となつて、多くの衆生をして、無上菩提心を發さしめた。實に何といふ不可思議なことであらうか。

眞の佛弟子——諸の佛弟子とあれども、今はこの意味に用ひられるのである——たる阿闍世王は、耆婆に對して右の如く語つた後に、いろいろの寶幢を以て、佛を供養し奉り、更に次の偈を以て、佛を讚嘆し奉つた。

如來の説き給ふ御語には皆眞實と微妙とがこもつてゐる。如來は能詮の言句にも、所詮の義理にも巧に在す。如來の御語には甚深にして量るべからざる秘密の意味が包まれている。衆生のために時には廣く説き、時には略して説き給ふ。如來は斯ういふ種々の御語を以て、衆生の病を治し給ふ。もし衆生にして、この如來の御語を聞けば、信するものはいふまでもなく、信せざるものも、遂には疑晴れて、まことの佛説を信するやうになる。如來は常に柔軟な語を以て法を説き給ふが、時あつて、衆生のためとあれば危

暴な語を須る給ふこともある、けれども輕語と麤語とに拘らず、その肝要たる第一義諦に離れ給ふやうなことはない。それであるから、私は今世尊に歸依し奉るのである。

如來の御語はいつでも變り給ふことなく一實相の御法を説き給ふから、一味である。猶、大海水の常住同味であると同じ。これを第一諦と名けるのである。それであるから、如來には意味のない御語といふものはない。如來は今いろいろの數多い法を説き給

ふたが、男女老少の人々をして、同様に、第一義の涅槃を證らしめんためである。この第一義の涅槃といふは、因もなく果もなく、又生もなく滅もないもので、これを大涅槃と名けるのである。この説法を聞く人々はみな自己の煩惱を除き去るを得るのである。

如來は、すべての衆生のために、常に慈悲の父母となりて、愛憐し給ふのであるから、衆生はすべてこれ如來の子である。如來は衆生を助けたいといふ大慈悲を以て、衆生に代つて、難行苦行をつとめ給ひ、さながら、魔物につかれて、狂心して、種々雜多のことをする人のやうに在ます。

私は、今幸に佛を見奉ることが出来たが、願くばこの見佛に依つて得た身口意三業の功德を、この上ない菩提の道に指し向きたい。今私が三寶を供養し奉る功德に依

つて、三寶、永くこの世に在りて衆生のために光となつて頂きたい。今私の獲ます
る種々の功德を以て、諸の衆生の修道上の魔縁を退治したい。

私は嘗て悪い友達に欺かれて、過去未來現在三世の罪を作つた。私は今如来の御前に
於て懺悔をいたします。願くば佛力に依つて再び悪をしないやうにしたい。すべての衆
生が、心をこの方面に注いで、一心に十方法界のすべての諸佛を念じ奉り、自ら長く、
自分の煩惱を断ち切り、明了に佛性を見ること、文殊菩薩のやうにならんことを切に祈
るのである。

爾の時に、世尊は阿闍世王を讀めて宣ふやう。もし一人でも、大菩提心(他力の信心)を
發すものがあるならば、この人は諸佛説法の會坐の大衆を莊嚴するのである。大王よ、王
は昔し已に毘婆尸佛の御許に於て、大菩提心を起した。それ以來、今日私の出世に至る
まで、未だ一度も地獄へ墮ちて苦惱を受けたことはなかつたのである。大王よ、菩提心に
はこのやうな限りない大果報があるのである。大王よ今より以後、常にこの菩提心を失は
ないやうにとめねばならぬ。何故ならば、この大菩提心に依つて量られぬ程多い罪惡を
滅することが出来るからである。この説法をきいて、阿闍世王及び摩伽陀國の人民は、そ

の座を立ち、佛を三遠りして、會座を去り、阿闍世王は宮に歸つたのである。

【餘義】一。此引文、正しく阿闍世王の歸佛を説く。その中初めに釋尊「阿闍世王の爲
めに涅槃に入らず」といふ密義を説き給ふ。そしてその密義を廣説せられた。阿闍世王と
は、一切の五逆を造る者、一切有爲の凡夫、及び佛性を見ざる者の謂ひであると人に付い
て三釋をあげられた。即ち他力信心を得ざる一切迷妄の凡夫の爲めに涅槃に入らずと仰せ
られる。次に法に付いて二釋をあぐ。初めは阿闍世王の煩惱に解し、次は涅槃佛性となす。
かくの如く釋尊は、逆惡の阿闍世に就いて具體的に考へ、抽象的に思考せられ、無量
永劫涅槃に入らずに化他の大益を施し給ふを説かれた。是れ實に佛世尊の胸中の秘密で
ある。この逆惡の凡夫の爲めに初めて如来の本願が説かれるのである、之を本文に「如来
の密語不可思議なり。佛法衆僧も亦不可思議なり」等と仰せられた。良に如来の眞の御言
葉は不可思議である。眞の三寶も不可思議である。之を信受する修道者(菩薩)も亦不可
思議である。是れ如来の不可思議の誓願の然らしむる所である。今や阿闍世王が耆婆に勸
められて佛法に入らんとする心機を見そなはし、即ち月愛三昧に入りて、先づ身の病を治
し、次に疑りに疑つた王の罪惡觀の臍血を、八方より實例を擧げて、散らされた。徒に機

を憐むは、生命に入る所以でない。罪に執著する心を拂はねばならぬ。而もその罪を全く否定し去るやうな捌きをつけるのではない。罪の執着を拂ひ給ふ所に、罪惡を感み給ふやるせなき大慈悲が濺がれるのである。それが如來の秘密である。五逆罪を造る一切衆生の爲めに涅槃に入らずとは、「若不生者、不取正覺」の大慈悲である。文中、衆生の狂惑の爲めに涅槃に入らずとは、狂惑の自覺を促し給ふやるせなき大慈悲が溢れてゐる。この狂惑の自覺がそのまゝ無限の生命である。本願に攝取せられた所である。これが狂惑を感み給ふ大悲心の徹透つた所である。

王の獲信

果然、王は心中限りなき喜びを感じ、力を感じ、生命を感じ、無限の希望を感じた。是れ實に本願他力の表顯である。伊蘭の心より、梅檀の信が生じたのである。煩惱に根のない如來廻向の信心である。この無限の生命に蘇つた王は、無限の希望を感じて「我れ審に能く衆生の諸の惡心を破壊せば、我常に阿鼻地獄に在りて、無量劫の中に諸の衆生の爲めに苦惱を受けしむるも、以て苦とはせじ」と叫んだ。これそのまゝ、「我行精進、忍終不悔」の佛心である。自力の大苦惱のどん底から、他力の大信心に浮み上つた一念の喜びである。

佛心の顯

然るに阿闍世王のこの言葉が、餘りに偉大であるといふので、之を以つて阿闍世王を權者とする證文に擬するのは、餘りに斧鑿に過ぎてゐると思ふ。聖人は何も夫等の文字に依りて阿闍世王を特に權者とせられたのではない。文字の如何に係らず、信仰上全體として、我一人の爲めの權者と味はれたのである。それであるから、權者であると同時に又實業の凡夫である。

二。王は亦先に自分を導いて呉れた耆婆に對して自督を述べた。「我れまた死せずして已に天身を得たり」等と心ゆくばかりその豊かな心境を披露した。こゝにいかなる罪惡にも妨げられぬ本願の一道がある。「和讃」に

罪障功德の體となる 氷と水のごとくにて

氷多きに水多し さはり多きに徳多し。

と仰せられ『嘆異鈔』初めには

しかれば本願を信せんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆゑに、惡をも恐るべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆゑにと云々

進んで第七節には

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずること能はず、諸善もおよぶことなきゆるに、無碍の一道なりと、云々
 今やこれ等の文の具體的の表現がこの阿闍世王の入信である。清澤滿之師の『我信念』の終りに

無限大悲の如來は、如何にして私にこの平安を得せしめたまふか。外ではない、一切の責任を引きうけて下さることによりて、私を救済したまふことである。如何なる罪惡も如來の前には毫も障りにならぬことである。私は善惡邪正の何たるを辨するの必要はない。何事でも私は只自分の氣の向ふところ。心の欲する所に順從うて之を行つて差支はない。其行が過失であらうと罪惡であらうと、少しも懸念することはらない。如來は私の一切の責任を負うて下さることである。私は只この如來を信ずるのみにて、常に平安に住することが出来る。

と云はれたのは、全くこの阿闍世王の心持と軌を同うしてゐるのである。この心境は側から、勝手に極めた善惡の標準をもつて、かれこれ批評すべきものではない。全く一人々々が命懸けに當面つて見なければ解らないのである。人生といふもの、自分といふもの、最後に表はれた一筋道である。故に聖人は上の三心釋の終りに
 おほよそ大心海を按すれば、乃至造罪の多少をとはず、修行の久近を論せず、行にあらず、善にあらず、乃至唯これ不可思議、不可稱、不可説の信樂なり。たとへば阿伽陀藥の、よく一切の毒を滅するが如し。如來誓願の藥は、よく智愚の毒を滅するなり。良に滔々たる絶對の天地である。そして是れ亦吾等の親しく實驗する所である。先人と後人と、同一心海に波打つ感じがある。

第四科 「迦葉品」の文

又言、善男子羅閱祇、王頻婆娑羅其、王太子名、曰善見、業因緣、故生惡逆、心欲害其父、而不得便、爾時惡人提婆達多亦因過去業因緣、故復於我所生不善心、欲害於我、即修五通、不久獲得與善見太子共、爲親厚、爲太子故、現作種種神通之事、從非門出、從門而入、從門而出、非門而入、或時示現象馬牛羊男女之身、善見太

子見已既生愛心喜心敬信之心爲是事故嚴設種種供養之具而供養之

又復自言大師聖人我今欲見曼陀羅華時提婆達多即便往至三十三天從彼天人而求索之其福盡故都無與者既不得花作是思惟曼陀羅樹無我所我若自取當有何罪即前欲取便失神通還見己身在王舍城心生慚愧不能復見善見太子復作是念我今當往至如來所求索大衆佛若聽者我當隨意教詔勅使舍利弗等爾時提婆達多便來我所作如是言唯願如來以此大衆付囑於我我當種種說法教化令其調伏我言癡人舍利弗等聰明大智世所信伏我猶不下以大衆付囑泥汝癡人食唾者乎時提婆達多復於我所倍生惡心作如是言瞿曇汝今雖復調伏大衆勢亦不久當見磨滅作是語已大地即時六反震動提婆達多尋時躡地於其身邊出大暴風吹諸塵土而汚空之提婆達多見惡相已復作是言若我此身現世必入阿鼻地獄我要當報如是

大怨時提婆達多尋起往至善見太子所善見見已即問聖人何故顏容憔悴有憂色耶提婆達多言我常如是汝不知乎善見答曰願說其意何因緣爾提婆達多言我今與汝極成親愛外人罵汝以爲非理我聞是事豈得不愛善見太子復作是言國人云何罵辱於我提婆達多言國人罵汝爲未生怨善見復言何故名我爲未生怨誰作此名提婆達多言汝未生時一切相師皆作是言是兒生已當殺其父是故外人皆悉號汝爲未生怨一切內人護汝心故謂爲善見提婆夫人聞是語已既生汝身於高樓上棄之於地壞汝一指以是因緣人復號汝爲婆羅留枝我聞是已心生愁憤而復不能向汝說之提婆達多以如是等種種惡事教令殺父若汝父死我亦能殺瞿曇沙門

善見太子問一大臣名曰雨行大王何故爲我立字作未生怨大臣卽爲說其本末如提婆達多所說無異善見聞已卽與大臣收其父王閉之城外以四種兵而守衛之提婆夫人聞是事已卽至王

所_レ時守_レ王人遮_レ不_レ聽_レ入_レ爾時夫人人生_レ瞋恚心_レ便呵_レ罵_レ之_レ時諸_レ守人
 即告_レ太子大王夫人欲_レ見_レ父王不_レ審_レ聽_レ不善見聞已復生_レ瞋嫌_レ
 即往_レ母所_レ前牽_レ母髮_レ拔_レ刀欲_レ斫_レ爾時着_レ婆自言_レ大王有_レ國已來罪
 雖_レ極重_レ不及_レ女人_レ况所生_レ母善見太子聞_レ是語已_レ爲_レ着_レ婆_レ故即便
 放捨_レ遮_レ斷_レ大王衣服臥具飲食湯藥_レ過_レ七日已_レ王命便終_レ
 善見太子見_レ父喪_レ已_レ方生_レ悔心_レ雨行大臣復以_レ種種_レ惡邪之法_レ而
 爲_レ說_レ之_レ大王一切業行都_レ無_レ有_レ罪何故_レ今者而生_レ悔心_レ着_レ婆復言_レ
 大王當_レ知_レ如是_レ業者罪兼_レ二重_レ一者殺_レ害父_レ王_レ二者殺_レ須陀洹_レ如_レ
 是_レ罪者除_レ佛_レ更_レ無_レ能除_レ滅_レ者善見王言_レ如來清淨無_レ有_レ穢濁_レ我等
 罪人云_レ何得_レ見_レ善男子我知_レ是_レ事_レ故告_レ阿難_レ過_レ三月已_レ吾當_レ涅槃_レ
 善見聞已_レ即來_レ我所_レ我爲_レ說法_レ重罪得_レ薄獲_レ無_レ根信_レ
 善男子我諸_レ弟子聞_レ是_レ說_レ已_レ不_レ解_レ我意_レ故作_レ是_レ言_レ如來定_レ說_レ畢竟
 涅槃_レ善男子菩薩_レ二種_レ一者實義_レ二者假名_レ假名_レ菩薩_レ聞_レ我_レ三月
 當_レ入_レ涅槃_レ皆生_レ退心_レ而作_レ是_レ言_レ如其_レ如來無常_レ不_レ住_レ我等_レ何爲_レ爲_レ

是事_レ故無量世中受_レ大苦惱_レ如來世尊_レ成就_レ具足_レ無量_レ功德_レ尙_レ不_レ
 能_レ壞_レ如是_レ死魔_レ况我等_レ輩當_レ能_レ壞_レ耶善男子是故_レ我爲_レ如是_レ菩薩_レ
 而作_レ是_レ言_レ如來常住_レ無_レ有_レ變易_レ我諸_レ弟子聞_レ是_レ說_レ已_レ不_レ解_レ我意_レ定
 言_レ如來終_レ不_レ畢竟_レ入_レ於_レ涅槃_レ抄出

【讀方】またはいはく、善男子、羅閱祇の王頻婆娑羅、その王の太子なづけて善見といふ、業因縁のゆへに惡
 逆の心を生じて、その父を害せんとするに而も便をえず。そのときに惡人提婆達多、また過去の業因
 縁によるがゆへに、また我所において不善の心を生じて、われを害せんと。すなはち五逆を修して、久しか
 らずして、獲得せり。善見太子とともに、親厚たり。太子のためのゆへに、種々の神通の事を現作す。門にあ
 らざるよりいで、門よりしていで、門に非ざるよりしていで。あるときは象馬、牛羊、
 男子の身を示現す。善見太子みはりて、即ち愛心、喜心、敬信の心を生ず。これを本とするがゆへに、嚴
 く種々の供養の具を設けて、しかもこれを供養す。
 また白てまふさく、大師聖人、われいま曼陀羅華を見んとおもふと。ときに提婆達多、すなはち三十三
 天に往き至りて、かの天人に従ひて、しかも之を求索するに、その福つくるがゆへに、都あたふるもの
 なし。すでに華をえず。この思惟をなさく、曼陀羅樹は我々所なし。もし自らとらんにまさき何の罪がある
 べき。即ちすんで取んとするに、すなはち神通をうしなへり。かへりて己身をみれば王舍城にあり。心に

悪徳を生ずるに、また善見太子に見ゆること能はず。またこの念をななく、われ今まさに如来のみもとに往至して、大衆を求索すべし、佛もし聽さば、われまさに意に隨ひて、教へてすなはち舍利弗等に教誨勸使すべしと。そのときに提婆達多、すなはち我とくろに來りてかくのごときの言をななく唯我がはくば如来、この大衆をもてわれに付屬せよ。我まさに種々に法をときて、教化してそれをして調伏せしむべしと。われ癡人にいはく、舍利弗等は聽聞の大智なり。世に信伏せらる。われなを大衆をもて付屬せず。いはんや汝癡人、唾を食ふものをやと。ときに提婆達多、また我所においてます、惡心を生じて、是のごときの言をななく、瞿曇、なんぢいままた大衆を調伏すといへども、勢また久しからじ。まさに磨滅せらるべしと。この語をなしはるに、大地即時に六反震動す。提婆達多すなはちの時に地にたふれて、その身の邊より大暴風をいだして、もろ／＼の塵土をふきて、而もこれを汗塗す。提婆達多、惡相をみかはりてまたこの言をななく、もし我この身現世にかならず阿鼻地獄にいらば、我必ずすまじかのごときの大惡を報ふべし。ときに提婆達多すなはちたちて善見太子のところに往至す。善見みをはりてすなはち聖人に問く、なんがゆへぞ顔容憔悴して、靈の色あるやと。提婆達多いはく、われ常にかくのごとし、汝しらすやと。善見にたへていはく、願はるるを説べし。なんの因縁あつてしかると。提婆達多のいはく、我いま汝がために、きはめて親愛をなす。外人、汝を罵りて非理とす。我、この事をきくにあに憂へざるをえんや。善見太子またこの言をななく、國の人のいかに我を罵辱すると。提婆達多のいはく、國の人に汝を罵りて未生怨とすと。善見またいはく、なんがゆへぞ我をなづけ

て未生怨とする。誰かかの名をなすと、提婆達多のいはく、汝いまだ生れざりしとき、一切相師みなこの言をななく、この兒生まれ已てまさにその父を殺すべし。このゆへに外人、みなこと／＼汝を號して未生怨とす。一切内のひと汝が心を護るがゆへに、いひて善見とす。毗提夫人この語を聞をはりて、すでに汝が身を生んとして高樓のうへよりこれを地にすて、汝が一つの指をやぶれり。この因縁をもて人また汝を號して婆羅留枝とす。我、これを聞をはりて心に愁憤を生じて、しかもまた汝に向ひて之を説くことあたはず。提婆達多、かくの如き種の種々の惡事をなして、をしへて父を殺さしむ。もし汝が父死せば、われ亦よく瞿曇沙門を殺さんと。

善見太子ひとりの大臣にとはく、なづけて兩行といふ。大王なんがゆへぞ我に字を立てんとするに、未生怨と作くと。大臣すなはち爲にその本末をとく。提婆達多の所説のごとくして異なし。善見き、已てすなはち大臣とともにその父の王を殺て、これを城のほかにとがて、四種の兵をもて而もこれを守衛せしむ。毗提夫人この事をきくをはりて、すなはち王のところに至る。時に王を守る人、遮りて入ることをゆるさず。そのときに夫人瞋怒の心を生じてすなはち之を呵罵る。ときに諸の守入、すなはち太子につぐらく、大王の夫人、父の王をみんと欲ふをは、いぶかし、聽してんやいなやと、善見き、をはりてまた瞋嫌を生じて、すなはち母のところゆきて、すんで母の髪をひきて、刀を抜て研らんとす。そのときに善見白していはく、大王、國を有ちてより已來、罪きはめて重しといへども、女人におよばず。いはんや所生の母をやと。善見太子この語

なきいはりて、奢婆のためのゆへに、すなはち放捨す。さへぎりて大王の衣服、臥具、飲食、湯藥をたつ。七日を過ぎをばりて、王の命すなはちをばりぬと。

善見太子父の喪をみをばりてまさに悔心を生ず。兩行大臣また種々の惡邪の法をもて、而もために之をとく。大王一切の業行すべて罪あることなし。何がゆへぞ、いましかも悔心を生ずるやと。奢婆またいはく、大王まさに知るべし。かくのごときの業は罪業二重なり。一には父の王を殺す。二には須陀洹を殺せり。かくのごときの罪は佛を除きてさらによく除滅したまふ者なげんと。善見王のいはく、如來は清淨にして穢濁ましますことなし。われら罪人、云何してか見たてまつることをえん。善男子、われこの事をしれり。阿難にづけたまはく、三月を過ぎをばりて、吾まさに涅槃すべきがゆへに。善見をばりて、即ち我とるに來れり。我ために法なときて重罪なしてうすきことをえしめ、無根の信をえしむ。

善男子、我もろの弟子、この説をきいりて、我意をさとらざるがゆへに、この言をななく、如來さだめて畢竟涅槃とときたまへり。善男子、菩薩に二種あり。一には實義、二には假名なり。假名の菩薩はわれ三月ありてまさに涅槃にいるべしとききて、みな退心を生じて、而もこの言をななく、如しれ如來無常にして住したまはずば、我等いかせん、この事のためのゆへに、無量世のうちに大苦惱なうけき。如來世尊は無量の功徳を成就し具足したまへるに、尙かくの如きの死屍を壞することあたはず。いはんや我等がともから、當によく壞すべけんやと。善男子、このゆへに我がくのごときの菩薩のために、而もこの言をななく、如來は常住

にして變易あることなし。我もろの弟子、この説を聞き已て我意をさとらざれば、さだめていはく、如來はつゝに畢竟して涅槃にいらすと。抄出

【字解】一。羅閱城 梵語ラーヤグラハの音譯。王舍城のこと。

二。善見太子 阿闍世太子のこと。上五六〇頁を見よ。

三。曼陀羅華 梵語マन्दारा(Mandara or mandarin)天妙華、白華と譯す。高潔にして色香よく、見る者、意に適ふ故に、適意華ともいふ。

四。三十三天 梵語トラーヤストリンシャーフ(Trayastambha)初利天ともいふ。六欲天の第二。閻浮提より八萬由旬の上、即ち須彌山の頂にあり、城、八萬由旬にして、三十三天に別れ、帝釋天これを結ぶ。人間の百年を以て一日一夜として、千年を壽命とす。換算すれば、人壽三億六千萬歳である。

五。我 自我のこと。俗に「おれが」といふもの。主觀の中心にして、常、一、主、宰を内容としてある。即ち「いつも、自分一人が、王者のやうに、我儘自由の出来るもの」が「我」の自性である。

六。我所 自我の所有物。自己の身體を始めとし、眷族、財貨、名譽等、凡て「おれがもの」の中へはいれるもの全稱。

七。舍利弗 釋尊の大弟子。梵語シャリープトラ(Sariputra)本名優波低沙(Upanishya)王舍城の東南

一里半迦羅臂拳迦 (Kalapinata) 邑に生る。友人目連とともに師の波羅門を棄て、釋尊の弟子となり、教團の上首として、智慧第一と稱せられ、釋尊入滅の年、故郷に還りて寂す。

八。阿鼻地獄 無間地獄のこと。上五六二頁を看よ。

九。毘提夫人 韋提希夫人のこと。上五二三頁を看よ。

一〇。婆羅留杖 折損といふと傳ふ。梵語不明。

一一。兩行 又は馮舍、梵語ワルシヤーカーラ (Vashtakarā)。釋尊當時に於ける王舎城の老臣にして、頻婆娑羅王の死後は、阿闍世王に仕へ、王の使として釋尊に跋耆國を打つ可否を問ひ奉り、後巴連弗

に城砦を築いて跋耆國を防いだが、此地は後に摩竭陀の都府となるに至つた。

一二。須陀洹 梵語シユローマバンナ (Surohama)。聲聞四果の二。預流果、又は初果といふ。三界の見惑(理に迷ふ煩惱)を斷じて、聖者の群に入る位。須陀洹は初果の聖者のこと。

【文科】「迦羅品」によりて、闍王逆罪の顛末、佛入滅の豫言等を述べたまふのである。

【講義】又『涅槃經』迦羅品に宣ふやう。善男子よ、王舎城の王頻婆娑羅王の太子を善見といふが、過去の業報で無道の心を起し、父の王を殺して國を奪はんとしたが、便りを得なかつた。爾の時惡人の提婆達多も亦過去世の業報に依つて、私に對して善からの心不起し私を無きものにせやうとした。提婆は五神通を修得して居つたが、この神通に依つて善見

太子と親しい友達となり、太子のために種々の神通を現じてみせてゐた。或は門でない處から出て門から入つたり、門から入つて、門でない處から出でたり。又或る時には、象馬牛羊男女のすがたを示したりして、阿闍世王の機嫌を取つたのである。阿闍世王は、この神通をみて、すつかり提婆を好きこのみ、敬ひ信するやうになり、いろいろの供養の品物を充分に備へて、提婆を供養したのである。而して、提婆に對していふやう。我が大師聖人よ、私は曼陀羅華を見たいと思ひます。提婆達多は、この阿闍世王の請を容れて、直に神通に依つて、三十三天に上り、天人について曼陀羅華を求めたが、今は福運が盡きて居るから、誰も與へるものがなかつた。提婆は思ふやう。曼陀羅の樹は、人間や動物と違つて非情であるから我もなく我所もないであらう。してみれば、ひそかにこの華をもぎとつても強ちに罪となることもあるまい。提婆はこのやうな考を起して華をとらうとして神通を失ひ、振り返つて見れば、自分はいつの間にか三十三天を下つて王舎城に落ちて居るのである。提婆はこの失敗を非常に耻かしく思ひ、善見太子に見ることが出来なんだ。提婆達多は又思ふやう。私はこれから如來の御許へ行つて、如來の弟子を私に付屬せんことを願はう。如來もし許し給はば、私は隨意に、彼の舍利弗等に命令を下すことが出来

るであらう。提婆達多は斯のやうに思うて、私の處へ来て、申し出したのである。世尊願くばこの御弟子等を私に任して預けますまいか。さすれば、私はいろ／＼に法を説きかせて、その煩惱を調伏いたします。

私はその時、この思かものに對していふた。佛弟子の中でも、舍利弗等は、常に聽聞を重ねて、廣大なる智慧あり、世の人々に信任せられて居る人達である。それでも、猶私は弟子達を委ねないではないか。況して汝のやうな愚かもの、人の唾を食ふやうや卑しいものにどうして、弟子達を任せられやうぞ。

提婆達多はこれをきいて益々私に對して惡心を起し、瞋曇、汝は今こそ、このやうに多くの人達を随へて居るけれども、この勢はやがて遠からず滅びて仕舞ふであらう、と申ししたが、この暴言を吐くと同時に、にはかに大地が六度震動して、提婆達多はこれがために躡され、足下より大暴風起つて沙や塵を巻き上げ、提婆達多の身の上に吹きつけて、その身體を汚した。提婆達多は、この有様をみて思ふやう。もしどうしても生き乍ら地獄へ墮ちねばならぬとすれば、私もこれに對して大報復をしてやらねばならぬ。

この思ひで提婆達多は立ち上つて、善見太子の處へ行つた。太子は提婆をみて問ひかけ

ていふやう。聖人、あなたは何故にそんなに御顔色がわるいのでありますか。何故に心配相にして御座るのでありますか。提婆はいふやう。私はいつもの通りなのであるが、あなたにはこの譯がわからぬのでありますか。太子はいふやう。どうぞその譯をさかして下さい。どうしてそのやうに御心配になるのか、御聞かせ下さい。

そこで、提婆達多がいふやう。私は今あなたと大變に親しくして居りますが、世間の奴等はあなたのことを罵つてわからずやというて居ります。あなたと親しい間柄にある私がこれをきいてどうして心配せずに居られましやうぞ。善見太子、更に問ふていふやう。この國のもの共は、どういふ具合に私のことを惡口いふのでありますか。提婆達多がいふには、この國のもの共は、あなたのことを罵つて未生怨といつて居ります。善見太子はいふやう何故私のことを未生怨といふのであります。そうして誰が、この名を私につけたのであります。提婆達多はいふやう。あなたが、未だ生れられない時に、すべての古相師は、皆、この子が生れると父を殺すものになるといひました。それで世間の奴等はあなたのことを未生怨といふのであります。宮庭内の人達はあなたにこのことをきかせず、あなたの心を荒れさせないやうにするために善見太子と善い名を呼んで居るのであります。

韋提希夫人は、占相師の言をきいて、あなたを生み落す時に、高樓に上つて、その上からあなたを眞實の意味に於て生み落したのであります。その時にあなたは一本の指をこはしたので、人々はあなたのことを婆羅留枝ともいうて居ります。私はこういふ事をきいて悲しくも思ひ、腹立たしくも感ずるのである。而もさすがに今まであなたに告ぐることも出来なかつたのである。

提婆達多は、斯ういふ風にいろいろの悪事を教へ、父の王を殺させるやうにし、もしあなたを殺せば、私は沙門瞿曇を殺しますとさへ申したのである。

善見太子は、提婆からこれらのことをきいて、これを確めるために、兩行といふ大臣に尋ねてみた。父の王は、何故、私を未生怨と呼ぶやうになさしめ給ふたのであらうか。兩行大臣は一部始終の物語をして提婆達多と同じ事を話してきかしたのである。

善見太子はこのことをきゝ終ると、直に兩行大臣を相手にして、父の王を捕へ、城外の或る場所に幽閉して、四種の兵をして厳しく守らしめた。韋提希夫人はこのことをきいて驚き悲んで直に頻婆娑羅の所へ行かうとしたが、守門者が、入つて王に遇ふことを許さないで、腹立ちまぎれに慘々に、守門者を罵つた。守門者は、太子の所へ行つて、この話

をして、韋提希夫人が頻婆娑羅王に遇はんとし給ふが許しませうかどうかを尋ねた。これをきいた善見太子は大に嘆り、直に母の御殿へ押しかけて、髪を掴んで、引きたをし刀を抜いて研らうとしたが、大王、國立ち始まつて以來、罪はいかに重くても、女子には刑罰は加はらぬといふことになつて居ります。況してや太子の母君でありますといふ者婆の諫言をきいて、殺すことを止めて、頻婆娑羅王の幽所へ赴くことを禁じ、父の王に對しては衣服、夜の具、飲食、湯藥、一切を送らず、かくて頻婆娑羅王は七日目に非業の最後を遂げられたのである。

善見太子は、父の王の死なれたといふことをきいて、始めて後悔を生じて來た。兩行大臣はいろいろ邪のことを説いて、太子の心をまぎらさんとし、どんなことをしても罪などあるものでない。何でそんなによく思つて御座るのかなどと申した。然し者婆は、正直に、王の罪は、茲に二色の大罪になつて居ます。一には父を殺した罪、二には父の王は須陀洹果の證を開いて御座つたから、須陀洹の聖者を殺した罪の二つであります。斯のやうな大罪は、如來の外除き去つて下さる方はありませんと申し上げた。善見王は、者婆の勧めをきいたけれども、如來は清淨にして穢濁のない方であれば、私の様な罪人がどうし

て行けやうぞと、辭退をして居つた。私はこれを知つて居つたから、阿難に三月の後に涅槃の雲に隠れることを告げて、善見王の心を急がせ、善見王は、このことをきいて、私の所へ來たのである。私は特に阿闍世王のために、法を説き、その重罪を除き、王の汚ない胸に根のない清淨な信仰を起さしめたのである。

善男子よ、私の弟子の中に、私が三月の後に涅槃に入るといふた語をき、私の語の眞義が解らないで、如來は定めて涅槃に入り給ふといふものがある。善男子よ、凡て菩薩といふ中にも、二種の類の菩薩がある。一には一乘眞實の眞義、他方本願の謂れを解して居る實義の菩薩と、この眞義をき、乍ら、了解の出來ない假名の菩薩とある。この假名の菩薩は私の三月の後に涅槃に入るといふたのをきいて、退墮の心を起して居る。彼等は斯ういふことをいうてゐる。如來の御命もへ無常であつて、永く世に住し給はないならば、私共はどういたそう、この無常のために死のために、私共は無量永劫の間、大苦惱を受けて來たのである。如來は數限りもない大功徳を成就して、一身に具へ給ひながら、猶、この死といふことに打ち勝ち給ふことが出來ないのである。況してや、私共がどうして死に打ち勝つことが出來やうぞと。

私はこれらの假名の菩薩の間違つた考を正さんために、如來は常住にして、無量永劫變り給ふことはないといふたのである。私の弟子の中では、この私の語をきいて、又一邊に執じて、如來は、いつまでも涅槃に入り給はぬといふものがある。

【餘義】一。此引文は、闍王逆惡の起因を示す。一寸した出來事でも、その原因を調べるに、夫相應に複雑な動機と、そのこゝに至る已むを得ない經過があるものである。王舍城内の大悲劇は、かやうな動機から起つたのであるといふ所謂時機純熟の徑路を示さんが爲めに引用せられたのである。『觀經和讃』

釋迦章提方便して

淨土の機縁熟すれば

兩行大臣證として

闍王逆惡興せしむ

の意である。

二。「獲無根信」の次の文「善男子、我諸の弟子、是説を聞き已て」以下は、別に意味があつて引かれたのではない、上の文と一連の文であるか引かれたといふ説と、又、機法二種を圓に會得した者が實義の菩薩、どちらかの一方に偏つてゐる者は假名の菩薩である故に實義の菩薩たることを勸むる爲めに引用せられたといふ説がある。何れにしても御引

用の意は一寸解し難い。

前の同文故來說は、餘りに投げやりの説である。第二説は稍首肯すべき説であるが、尙ほ至り届かぬ譏りを免れぬ。こゝは、上來眞佛弟子を廣説し來つたのであるから、實義、假名の二菩薩が必要で引用せられたに相違ない。即ち實義菩薩は、如來の實意に徹した人、假名菩薩とは名ばかりで實のない信者といふことであらう。そして此兩者の差別を決定するに、如來の涅槃をもつてせられた。經の當相から云へば、涅槃の實義に達した菩薩と、之に達せぬ人の意味に相違ない。然るにこの涅槃の實義とは、如來の大慈悲心である。五逆罪を造る衆生の爲めに涅槃に入らずと仰せらるゝ正意に徹するが涅槃の實義に達した人である。即ち如來の大慈悲を信する人が實義の菩薩である。然るにこの如來の正意に達せぬ人々は、唯徒に如來の入滅、不入滅といふ表面の問題を氣にしてゐる爲めに、或は徒に自分の肉身の無常を思うて死を恐れ、又「如來常住」の教を聞けば、輕々しくこの言葉によりて如來は入涅槃せずと安堵する。そして自分は何も獲る所がないのである。是等は共に如來の涅槃の實義を解了せぬ假名の菩薩、名あつて實のない菩薩であるといふのである。即ち如來の涅槃とは、單に肉身の滅亡でもなければ、空寂の證りでもない。常に活動し

如來涅槃の意義

つゝある大慈悲心が夫である。逆惡の衆生を一子の如く憐念し給ひてさながら鬼魅に著れて狂亂する人のやうに、大悲の胸を碎き給ふことが涅槃の眞意義である。即ち如來の本願である。名號の謂れである。存覺師がこの下の『六要』に名號涅槃の同一を主張せられたのはこゝの所を力説せられたことと思はれる。又左様でなくてはならぬのである。かくてこの引文が非常に深い意義を示すに至るのである。

第二項 私釋

是以今據大聖眞說難化、三機難治、三病者憑大悲、弘誓歸利他、信海於哀斯治憐憫斯療、如醍醐妙藥、療一切病、濁世庶類穢惡、群生應求念金剛不壞眞心、可執持本願醍醐妙藥也、應所知

【讀方】こゝをよみていま大聖の眞說によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲弘誓をたのみ、利他の信海に歸すれば、これを治哀して治し、これを憐憫して療したまふ。たとへば醍醐の妙藥の、一切の病を療するがごとし。濁世の庶類、穢惡の群生、金剛不壞の眞心を求念すべし。本願醍醐の妙藥を執持すべきなり。しるべし。

【字解】一。難化三機、化度し難い三種の機類。五逆、謗法、闍提。

二。庶類 いろ／＼の類。衆生のこと。

【文科】 上の『涅槃經』の引文を結びたまふ一段である。

【講義】 今まで長々と引用した『涅槃經』の經説に依つて見れば、療治し難い三種の病人に譬へた化益し難い三種の衆生は、阿彌陀如來の誓願を頼み、他力の信心を頂かして貰へば、如來は、この衆生をあわれみ給うて、その難治の病氣を療治して下さるのである。譬へて申せば最早何の藥に依つても治らない病氣も、醍醐の不思議の藥で易々と治るやうなものである。であるから、五濁惡世に生れ遇はした人達、身心共に穢れ果て、造惡のみを仕事とする衆生は、他力より賜はる金剛のやうに堅固にして壞はれない信心を得んと望み彌陀如來の本願といふ醍醐の妙藥を大切にいたすべきである。

第三項 抑止文釋

これより以下は、正しく抑止文を釋したまふ。第一科は問題を提問し、第二科は總覽、善導二師の文をもつて解答となし、第三科には更に五逆の何ものたるかを釋したまふ。

第一科 問

夫據諸大乘二說二難化機今大經言唯除五逆誹謗正法或言唯除造無間惡業誹謗正法及諸聖人觀經明五逆往生不說誹謗法涅槃經說難治機與病斯等真教云何思量耶

【讀方】 それ諸大乘によるに難化の機をとけり。いま大經には唯除五逆誹謗正法といひ、あるひは唯除造無間惡業誹謗正法及諸聖人といへり。觀經には、五逆の往生をあかして誹謗法とせず。涅槃經には、難治の機と病とをとり。これらの真教、いかに思量せんや。

【字解】 一。『觀無量壽經』一卷 淨土三部經の一。劉宗、置良、耶舍譯(現存)。劉宋、曇摩密多譯(缺本)梵本缺。釋尊の晩年に、阿闍世王の爲めに幽閉せられたる韋提希夫人の爲めに、説かれたる經典。極樂へ往生する方便として、定善十三觀、散善三觀を説き、最後に、一經の要旨として、無量壽佛の御名(南無阿彌陀佛)を阿難に付囑し給ふ。『大無量壽經』に説かれたる彌陀の本願は、この王者の家庭に於ける大悲劇の上に、實現せられたることは、注意せねばならぬとである。

【文科】 抑止について『大經』『觀經』『涅槃經』の相違に就いて問をおこしたまふ。

【講義】 いろ／＼の大乘經典に化益し難い機類のことが説いてあるが、『大無量壽經』

には、唯、五逆と正法を誹謗するをば除くというてある。又、『大經』の異譯の『如來會』には、これに相當する處に、唯無間業を造ると、正法と及び諸聖人とを誹謗することは除くというてある。然るに『觀無量壽經』には、五逆のものは往生すると説いてあつて、謗法の往生は説いてない。又『涅槃經』には、難治難化の五逆と謗法と一闍提のことが説いてあるそれでこの『大經』、『觀經』、『涅槃經』の教説をいかに考ふべきであらうか。

第二科 曇鸞善導二師の釋答

報導論註云、問曰無量壽經言願往生者皆得往生唯除五逆誹謗正法觀無量壽經言五逆十惡具諸不善亦得往生此二經云何會。答曰一經以具二種重罪一者五逆二者誹謗正法以此二種重罪故所以不得往生一經但言作十惡五逆等罪不言誹謗正法以不謗正法故是故得往生。問曰假使一人具五逆罪而不誹謗正法經許得往生復有一人但誹謗正法而無五逆諸罪願往生者得往生以不。

答曰但令誹謗正法雖更無餘罪必不得往生何以言之經言五逆罪人墮阿鼻大地獄中具受一劫重罪誹謗正法人墮阿鼻大地獄中如是展轉逕百千阿鼻大地獄佛不記得出時節以誹謗正法罪極重故又正法者即是佛法此愚癡人既生誹謗安有願生佛土之理假使但貪彼生安樂而願生者亦如求非水之水無烟之火豈有得理。

問曰何等相是誹謗正法。

答曰若言無佛無佛法無菩薩無菩薩法如是等見若心自解若從他受其心決定皆名誹謗正法。

問曰如是等計但是已事於衆生有何苦惱踰於五逆重罪耶。

答曰若無諸佛菩薩說世間出世間善道教化衆生者豈知有仁義禮智信耶如是世間一切善法皆斷出世間一切賢聖皆滅汝但知五逆罪爲重而不知五逆罪從無正法生是故誹謗正法人其罪最重。

問曰業道經言業道如秤重者先牽如觀無量壽經言有人造五逆十惡具諸不善應墮惡道還歷多劫受無量苦臨命終時遇善知識教稱南無無量壽佛如是至心令聲不絕具足十念便得往生安樂淨土即入大乘正定之聚畢竟不退與三塗諸苦永隔先牽之義於理如何又曠劫已來備造諸行有漏之法繫屬三界但以十念念阿彌陀佛便出三界繫業之義復欲云何

答曰汝謂五逆十惡繫業等為重以下下品人十念為輕應為罪所牽先墮地獄繫在三界者今當以義校量輕重之義在在在緣在決定不在在時節久近多少也云何在在彼造罪人自依止虛妄顛倒見生此十念者依善知識方便安慰開實相法生一實一虛豈得相比譬如千歲闇室光若暫至即便明朗闇豈得言在室千歲而不去耶是名在在在緣彼造罪人自依止妄想心依煩惱虛妄果報衆生此十念者依止無上信心依阿彌陀如來方便莊嚴真實清淨無量功德名號生譬如有人被毒箭所中截筋

破骨聞滅除藥鼓即箭出毒除首楞嚴經言譬如藥名曰滅除若聞藥時用以塗鼓三昧聞其名者三毒之箭自然拔出豈可得言彼箭深毒厲聞鼓音聲不能拔箭去毒耶是名在緣云何在決定彼造罪人依止有後心有間心生此十念者依止無後心無間心生是名決定校量三義十念者重重者先牽能出三有兩經一義耳

問曰幾時名為一念

答曰百一生滅名一刹那六十刹那名一念此中云念者不取此時節也但言憶念阿彌陀佛若總相若別相隨所觀緣心無他思想十念相續名為十念但稱名號亦復如是

問曰心若他緣攝之令還可知念之多少但知多少復非無間若疑心注想復依何可得記念之多少

答曰經言十念者明業事成辦耳不必須知頭數也如言蟬蛻不識春秋伊蟲豈知朱陽之節乎知者言之耳十念業成者是亦通神者言之耳但積念相續不緣他事便罷復何假須知念之頭數

也若必須^レ知^レ亦^レ有^レ方便^ニ必須^ニ口授^ニ不得^レ題^ニ之^ニ筆點^ニ已上

【讀方】こたへていはく、論の註にいはく、問ていはく、無量壽經にのたまはく、往生を願ぜんもの、みな往生をこしむ。たゞし五逆と誹謗正法とをのぞく。觀無量壽經に、五逆十惡もろくの不善を具するもの、また往生なうとへり。この二經いかんが會せんや。

こたへていはく、一經には二種の重罪を具するなしてなり。一には五逆、二には誹謗正法なり。この二種の罪をつくるというて、正法を誹謗すといはず。正法を謗せざるなしての故に、このゆへに生ずることなえしむ。問ていはく、たとひ一人は五逆罪を具して、しかも正法を誹謗せざれば、經に生ずることなうとゆるす。また一人ありて、たゞ正法を誹謗してしかも五逆のもろくの罪なきもの、往生を願せば生ずることなえんやいなや。

こたへていはく、たゞ正法を誹謗せしめて、さらに餘の罪なきいふとも、かならず生ずることなえじ。何を以てかこれを言ふとならば、經にいはく、五逆の罪人、阿鼻大地獄のなかに墮して、つゞさ一劫の重罪なうく。誹謗正法のひとは、阿鼻大地獄のなかに墮して、この劫もしつければ、また轉じて他方の阿鼻大地獄のなかにいたる。是のごとく展轉して、百千の阿鼻大地獄をふ。佛いづることをうる時節を記したまはず。正法を誹謗するつみ極重なるなもつての故なり。また正法はすなはちこれ佛法なり。この愚癡の人すでに誹謗を生ず。いづくんぞ佛土を願生する理あらんや。たとひ但かの安樂に生ぜんことを貪して、生を願ぜんば、また亦

にあらざる水、烟なき火なもとめんがごとし。あに得ることほりあらんや。

問ていはく、なんらの相かこれ誹謗正法なるや。

こたへていはく、もし佛もなし佛法もなし、菩薩もなし、菩薩法もなしといはん。是のごときらの見を以て、もしは心にみづから解り、もしは他にしたがひて、その心を受て決定するを、みな誹謗正法となづく。

問ていはく、是のごときらの計は、たゞこれおのれが事なり。衆生において、なんの苦惱ありてか五逆の重罪にこえんや。

こたへていはく、もし諸佛菩薩、世間、出世間の善道をときて、衆生を教化する者ましまさずばあに仁義禮智信あることをしらんや。かくのごとき世間の一切善法、みな斷じ、出世間の一切賢聖みな滅しなん。法たゞ五逆罪の重なることをしりて、しかも五逆罪の正法なきより生ずることをしらす。このゆへに誹謗正法の人はそのつみ最重なり。

問ていはく、業道經にいはく、業道はばかりのごとし。重きものまづひく。觀無量壽經にいふがごとし人ありて五逆十惡をつくり、もろくの不善を具せん。惡道に墮して、多劫を還歷して、無量の苦なうくべし。命終のときにぞんで、善知識の人をして南無無量壽佛を稱せしむるにあはん、是のごとく心をいたして、聲をしてたえざらしめて、十念を具足すれば、すなはち安樂淨土に往生することなえて、すなはち大衆正定の樂にいりて、畢竟して不退ならん。三塗のもろくの苦とながくへだつ。まづ衆くの義、理においていかん

ぞ。また、曠劫よりこのかた、つぶさにもろくの行をつくれる有漏の法は、三界に繋属せり。たゞ十念をもて阿彌陀佛を念じて、すなはち三界をいでなば、繋属の義またいかんかせんとするや。

こたへていはく、なんぢ五逆十惡の繋属等を重とし、下々品の人十念を輕として、罪のために牽れてまづ地獄に墮して、三界に繋属すべしといはば、いままさに義をもて輕重の義を揆量すべし。心にあり、縁にあり、決定にあり。時節の久近、多少にあるにはあらざるなり。いかんぞ心にあり、かの罪をつくる人は、みづから處妄顛倒の見に依止して生ず。この十念は善知識の方便安慰して、實相の法なきかしまるによりて生ず。一は實、一は虛なり。あにあひ比ぶることをえんや。たとへば千歳の闇室に光も少し暫くいたれば、すなはち明朗なるがごとし。闇あに室にあること千歳にして、しかも去じといふことをえんや。これを在念となづく。いかに縁にある、かの罪をつくる人は、みづから妄想の心に依止し、煩惱虛妄の果報の衆生に依止して生ず。この十念は無上の信心に依止し、阿彌陀如来の方便、莊嚴、眞實、清淨、無量功德の名號によりて生ず。たとへば人ありて毒の箭をかちふりて、申ることころ筋をきり骨をやぶるに、滅除藥の鼓をきけば、すなはち箭ぬけ毒のぞくるがごとし(首楞嚴經にはくたとへばくすりあり、なづけて滅除といふ。もし闇職のときにもて鼓にぬるに、鼓のこゑをきくもの、箭ぬけ毒のぞくるがごとし、菩薩摩訶薩もまたくかくのごとし。首楞嚴經に住して、その名なきくもの、三毒の箭自然に拔出す。)あにかの箭ふかく毒はげし、鼓の音聲をきくと箭をぬき毒をさること能はじといふことを得べけんや。これを在縁となづく。いかに決定にある、かの罪

をつくる人は、有後心、有間心に依止して生ず。この十念は無後心、無間心に依止して生ず。これを決定となづく。三の義を揆量するに、十念は重なり。重きものまづ牽きて、よく三有をいづ。兩經一義ならくのみ。問ていはく、いくばくの時をか、なづけて一念とするや。

こたへていはく、百一の生滅を一刹那となづく。六十刹那をなづけて一念とす。このなかに念といふはこの時節をとらざるなり。たゞ阿彌陀佛を憶念して、もしは總相、もしは別相、所觀の縁にしたがひて、心に他縁なくして、十念相續するをなづけて十念とすといふなり。たゞ名號を稱することもまたくかくのごとし。問ていはく、心もし他縁せば、これを攝してかへらしめて、念の多少をしるべし。たゞし多少をしらば、また問なきにあらす。もし心かこらし想をとめば、復たによりてか念の多少を記することなうべきや。

答ていはく、經に十念といふは、業事成辨をおかすならくのみ。かならずしも須く頭數をしるべからざるなり。譬猶春秋をしらす。伊蓋あに朱陽の節をしらんやといふがごとし。知るもの之を言ふならくのみ。十念業成といふは、これまた神に通ずるもの之をいふならくのみ。ただ念をつみ相續して他事を縁せざれば、すなはち罪のみ。また何ぞかりに念の頭數をしることなもちぬんや。もし必ず知ることなもちぬばまた方便あり。かならず口授なもちぬんや。これを筆點に題することなえされと。上巳

【字解】一業道經 此名の如き經典があるわけではないが、業道因果の理を説いた經典を指して、かやうに名づけられたらしい。

二。十念 十聲のこと

三。三塗 三惡道のこと。火塗(地獄)、刀塗(餓鬼)、血塗(畜生)。

四。聚業之義 善惡の業因に聚かれて、相當の果報を獲る因果の法則のこと。

五。下々品人 經に説かれたる九種の機類の中の最下等の人。即ち惡凡夫。

六。「首楞嚴經」具には「首楞嚴三昧經」三卷。鳩摩羅什譯。佛、堅意菩薩の請ひに應じて、首楞嚴三昧の妙諦を廣説したまひたる經典。

七。首楞嚴三昧 梵語シユーラガイ、サイードヒ(Suraganam or Suranganam Samadhi) 勇健定、健行定と譯す。この三昧に入れば、諸の三昧(定)の内容を知ること怖も大將が諸の兵力を知るやうである。又煩惱も惡覺も、決して破壞することが出来ない故にこの名あり。

八。樂事成辦 極樂往生の樂因ができたがること。

九。總結 ひぐらし。春生れて秋死ぬる處。

一〇。伊魯 このむし。こほるぎ。

一一。朱闍 夏のこと。

【文科】「論註」によりて逆謗攝不の義をのべたまふのである。

【講義】 答へて曰く、「淨土論註」に、委しくこのことについて問答してあるから、今そ

の文を引用して見やう。

問うて曰く、「大無量壽經」には、往生したいと願ふものは皆生れさして頂くことが出来るが、五逆罪のものと正法を誹謗するものはこの限りでないというである。然るに「觀無量壽經」には、五逆十逆等のいかなる惡業をかへたものでも、みな往生することが出来るというである。この二經の相違はいかやうに會通すべきであらうか。

答へて曰く、「大經」には五逆と謗法の二種の重罪を擧げて、この二重罪のものは往生が出来ないと説き、「觀經」では、五逆十逆等の罪だけ擧げて謗法のことをいうてないから、往生することが出来ると説いたものである。

問うて曰く。五逆罪を作つても、正法を誹謗せないものは、往生が出来るといふのであるならば、反對に、正法を誹謗しても、五逆罪を作らぬ人ならば、往生が出来るといふか。答へて曰く、正法を誹謗すれば、たとひ、他の罪を少しも作らぬものでも往生することが出来る。何故ならば、「大品般若經」には、五逆罪を造つたものは、無間地獄に墮ちて、一劫の長い間苦惱を受けねばならぬ、然し正法を誹謗するものは、これにも増して、無間地獄に墮ち、その地獄にて苦む時間が過ぎれば、又他方の無間地獄に墮ち、こうして無數

の無間地獄を経めぐると、説いてある。如來は、この謗法罪のものが、無間地獄を出づる時を説き給はぬのである。謗法の罪がありとあらゆる、罪の中で最も重いものであるからである。

又、誹謗正法の正法といふは、佛法のことである、愚ものは、この佛法を誹謗する以上理として淨土へ生れたいと願ふ思ひのないことは定つてゐる。よし又たとひ、淨土は安樂な處だから生れたいといふ貪欲の心から往生を願うても、丁度、水でない氷、烟のない火を求むるやうなもので、往生の出來やう道理はないのである。

問うて曰く、正法を誹謗するといふのは、どういふことを指していふのであるか。

答へて曰く、佛もない、佛法もない、菩薩もない、菩薩の法もないといふ斯ういふ考を自ら獨り手に起すもの、又は他人からきいて、成程それに相違ないと心を決めるやうなことを誹謗正法といふのである。

問うて曰く、そんなら、斯ういふ考は、自分一人だけで起してゐるもので、他の人々に害を及ぼし苦惱を與へるものでもない。どうしてこれをかの恐るべき五逆罪よりも重いと云ふのであるか。

答へて曰く、もし諸佛菩薩が、世間の道、出世間の道、兩方を説いて、衆生に御きかせ下さらなかつたならば、人々は、どうして仁義禮智信といふ人の道を辨へることが出來やうぞ。さうなれば、世間の善いことはみな滅び、出世間の賢人も聖者もみな後を斷ち給ふであらう。汝は、五逆罪の重いことを知つてゐるが、この五逆罪が、佛法のない所から起つて來ることに氣がつかないのである。であるからして、正法を誹謗する人の罪は、罪といふ罪の中で、一番重いのである。

問うて曰く、『業道經』には、業道は秤のやうなもので、重い方に先づ傾くものであると云うてある。然るに、『觀無量壽經』には、五逆十惡を造り、いろ／＼よからぬことを身に具へ、地獄へ墮ち込んで、限りのない苦惱を受けねばならぬ人が、臨終の時に、善知識に遇うて、南無阿彌陀佛を稱へよ、といふ教を蒙り、一心になつて聲を絶やさず、十返念佛を稱ふれば、安樂淨土に往生して、正定不退の位に入り、永久に三塗にかへることはないといふのである。重い業の方に先づ牽かれるといふ佛説をあてはめて見ると、どうなるのであらうか。又、衆生は久遠劫來いろ／＼のことをやつて、來て居るが、皆煩惱妄念の結果であるから、皆この迷の三界につながれてゐる。たつた十念の稱名で、この長い闇翳が

れて居つた三界を出るといふならば、業によつてつながれるといふこともいかゞ考ふべきことであらうか。

答へて曰く、汝は五逆十惡等の罪の方を重いやうに見て、下々品の人が稱ふる十念の念佛を軽いやうに思つてゐるが、それが抑々間違である。その間違があるから、重い罪の方に牽かれて地獄に墮ち、迷の三界に繋かれるといふのであるが、今、義理を立て、五逆等の罪が重いか、十念の念佛の方が重いか驗べてみやう。重い軽いは心に在り、縁に在り、決定にあるので、時間の長い短いに依るのではないのである。

第一に心に在るといふは、いかなることかといふに、罪を造るのは、顛倒の妄想からであるし、十念の念佛は、善知識のいろ／＼に慰めて下されて、實相微妙の六字名號をきかして下され、きいて信するまこと心から出て來るのである。罪は虚から出、念佛は實から出る。これ丈の區別があつて見れば、どうしてかれとこれと比較することが出來やうぞ譬へてみれば、千年も黒闇の續いた室に、光を持つて來れば、一時に明るくなるやうなものである。闇が千年もこの室を占領して居つたのだからと意地張つてみても、光にはかたはないのである。これが心に在るといふた意味である。

第二に縁に在るといふはいかなる意味かといふに、罪を造るは、妄想に依り、煩惱をかかへたうそいつはりの業報の衆生に對して罪を造るのであり、十念の念佛は、この上ない他力の信心から起るので、阿彌陀如來の三種の莊嚴、及び、眞實にして清らかな無量の功德を具へた名號に依つて出て來るのである。一は煩惱の衆生を相手とし、一は阿彌陀如來を相手として居る。九で比べものにならぬのである。それであるから、譬へていふと、毒箭を受けた人が、毒箭のために、筋肉は截れ、骨髓まで壞はれても、かの滅除藥の鼓(首楞嚴經)に出て、居る譬であつて、譬へば滅除藥といふ藥を、鬪戰の時に、鼓に塗つて、この鼓を打てば、この聲をきくものは、受けた箭が自然に抜け出で、毒がなくなるやうに菩薩摩訶薩もその通りに、首楞嚴三昧に住してその三昧の名をきけば、貪瞋痴の三毒の煩惱の箭がひとりでに抜け出ると記してある)の音を聞けば、箭もひとりでに抜け出で、毒もなくなるやうなものであつて、箭が深く入つて居るから、毒が厲しいからというて、いかに鼓の音をきいても、箭が抜けまい毒が消えまいとは云はれないのである。これが縁に在るといふ意味である。

第三に決定にあるといふのは、罪を造る時には、この後にも猶生きて居ると豫想してつ

くるので、従つて、他の考に難られるのであるが、この十念の念佛は、せつばつまつた時の念佛で、後があるとも思はず、従つて少しも餘念の難らぬ、最も緊調た心から出るのである。この相違を決定に在るといふたのである。

以上三つの義理があるから、十念の念佛の方が重いので、重いものが先づ牽くといふ原則に従つて、この十念の念佛に依つて、迷妄の三界を離れるのである。それであるから『業道經』の所説も、『觀經』の所説も少しも違はぬのである。

問うて曰く、一念といふは何れ程の時間のことをいふのであるか。

答へて曰く、この一念の中には六十の刹那があり、一刹那の中には百一の生滅があつたのである。けれども今一念といふのは、この時間を指していふのではなく、阿彌陀佛のことを思ひ奉るに、佛の全體を思ひ、一部分を思ふにしても、外の想に邪魔せられず、十念相續するを十念といふたのである。又名號を稱する心の相續も十念といふのである。

問うて曰く、されど十念念佛の時、心がもう、外へ走つて行つて居るならば、もとへもどして来て、一返、二返と、念佛の數を知ることも出来る。然し斯ういふ風に數を數へる様では、心に餘裕があるので先きに云はれた無間心で申す念佛ではなくなる。又もし一心

に心を凝し、佛の方ばかりに氣をとられて居れば、十念の數を知ることが出来る。これはいかいすべきであらうか。

答へて曰く、經文には十念とあるが、これは、往生の事業が成辨することを示したので、十念の數を覺えて稱へよといふのではない。譬へば、ひぐらしといふ蟲は、春も秋も知らず、夏に生れて夏に死ぬ蟲であるが、この蟲が夏に生れるからといふて、夏を知つてゐるといふのではない、知つて居るのは、人間ばかりで、人間が「あの蟲は夏に生れる」といふのである。今十念に往生の業事が成辨するといふのも、如來の方で仰せられるので、凡夫の方では一念一念と念佛を申し、相續して、他の事を思はねばよいので、數を知る必要はないのである。もし數を知りたいといふのなら、又別に手段もあることであるが、これは口づから傳ふべきことで、筆に上すべきものではない。

【餘義】一。これより以下、正しく諸經典の文面に就いて細に逆謗の攝不を示す。即ち『大經』第十八願には、五逆罪と謗法罪の兩罪は往生することを得ずと説き『觀經』には、下品に於いて、五逆罪の往生を許し、『涅槃經』には、五逆と謗法と闍提の三機の往生を許す。かやうに經文に相違のあるのはどういふ道理であらうかといふのである。是等の問題

に對して聖人は、初に『論註』を引き、後に『散善義』『法事讚』の文を引いて、答とし給ふ。

以下『論註』文は上巻八番問答の中、第一を除いて、以下七番の問答を引用せらる。先づ始めに『大經』『觀經』二經の相違に就いては、大經は二種の重罪を具へてゐるし、觀經は唯五逆罪で丈であるから往生を許すといひ、經證、理證に互りて細に謗法罪の極罪たることを明かにせられた。

上の説丈に就いて云へば、鸞師は絶對的に謗法の罪人を抑止せらるゝやうであるが、強ちさうではない。下の『法事讚』の釋の如く廻心すれば、皆な往生を許すのである。『觀經』に五逆罪を攝取することを説かるゝも矢張り廻心の機に就いて云ふことは言を俟たない。既に謗法罪に就いても、上(四八二頁)に引用せる如く『論註』下十七丁に衆生、憍慢を以て故に正法を誹謗す、乃至是の如き等の諸の苦の衆生、阿彌陀如來の至德の名號説法の音聲を聞けば、上の如き種々の口業の繫縛皆な解脱を得、如來の家に入り、畢竟して平等の口業を得。と釋してある。この文中至德の名號を聞くとときは云ふまでもなく信することである。即ち

廻心である。謗法闡提の機も廻心すれば皆な往生をうるといふことは鸞師も善導と異ることはない。

唯この『論註』の文は、謗法罪の極重なることを遺憾なく示してをられることは、吾等の心を沈めて味はねばならぬ所である。

二。五逆の重罪がどうして、命終の十念々佛よりも力が弱いのであるか、それでは重きもの先牽くの理に離れてゐるでないか。又曠劫以來三界に繫屬してゐる業が、どうして十念々佛によりて、この業繫を斷することが出来るか。これ等の重要な問題に對して鸞師は三在釋を出された。

良にこの問題は、宗教の根本に觸れてゐる問題である。十念往生は、常識をもつては決して納得することの出来ない説である。従つてこの問ひは、宗教の精髓を引き出すにはおかぬものである。鸞師の此三在釋は、此の重要な任務を帯びて生れた。千鈞の重さがある。

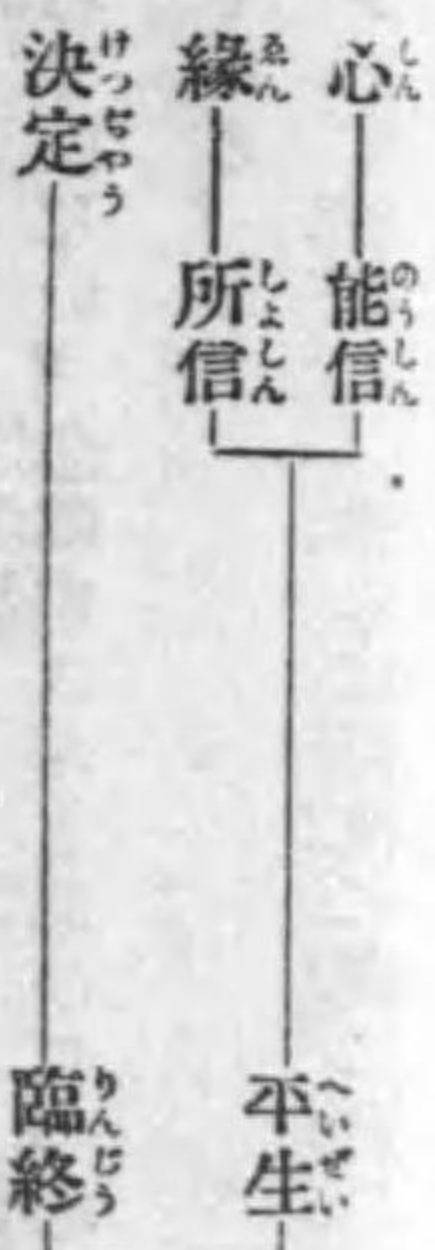
第一は在心得である。凡夫虚妄の心に依りて造る罪は、如來の眞實心より生ずる十念には比べること出来ぬ。千歳の暗室も、光り來れば、直ちに消える。信の一念に六趣四生の

因亡じ果滅するは、この不可思議の事實であるといふのである。

第二は在縁である。縁は増上縁をいふ。此下の『六要』に「在縁は境に約す」とあるに就いて、種々に議論があるやうであるが、矢張り増上縁でよいと思ふ。今造罪に就いて上の阿闍世王の例に取れば、王は提婆の誘惑によりて殺父殺母の逆罪を犯すに至つた。即ち提婆といふ虚妄の衆生を増上縁としたのである。かやうに吾等の造罪は、常に煩惱虚妄の衆生を増上縁とするが、この十念は、功德無量の名號を増上縁として生じたのである。故に此十念の力が強いといふのである。

第三は決定である。造罪は何んというても自己の生命の繼續を豫想して行ふ故に、その心には餘裕がある。緊張つてをらぬ。深刻でない。然るに臨終の十念は、生命の繼續を豫想しない。命懸けである。故にこの十念は、我等の心の奥底から根ざした心であるから力が強いといふのである。

上の三理由によりて、十念往生の義を成立せられた。文面の上から上の三理由を圖示すれば左の通りである。



この中、決定は一應は臨終であるが、よく文意を探れば、矢張り平生にもあるのである。即ちこの三在釋は、その儘信の一念の内容である。

心——信心歡喜

縁——聞其名號

決定——即得往生住不退轉

この三が一念同時であることは、上に屢々述ぶる所である。釋師は、この一念の内容を打ち出して、上の重罪消滅の意義を明かにせられたのである。

三。上に十念と重罪と比較したが、この十念は如何なるものであるかといふ問題が残つてゐる。そこでこゝに一念を釋せらるゝ此下の『六要』に、念に三義を擧ぐ、時節、觀念、稱念である。今この釋に従つて、上の文を解釋すれば、

第一、この十念の念は時節の念でない、明瞭と決定された。上四〇一頁「信樂開發の時

刻の極促の意義參照、親鸞聖人の時刻の極促とは、この時節の意味ではない。

第二、觀念、こゝに觀念とは、觀法の意味でない。意念意念のことである。心に念ずることである。即ち阿彌陀佛の本願を心に浮べみるの意、本願を信する心をいふ。其次に「若は總相、若は別相、所觀の縁に隨つて、心に他想なく」とあるは、如來の様々な功德即ち智慧威神御相好、等をその時に從つて、心に感じ喜ぶことで、上の「憶念阿彌陀佛」の憶念の内容を示されたものである。是等の言葉は、凡て定善の觀法のやうに解せられるやうであるか。決して左様ではない。既にこの場合が「觀經」散善下々品の十念であるから、定善の觀法であるべき筈でない。吾等の散心をもつて如來を念ずると、即ち信心相續を示されたものである。

第三、稱念は、「但し名號を稱すること」云々の所である。これは上に總相、別相等を念ずる意念の如く、名號を稱へんとする心の相續を示されたもので、矢張り心念である。十聲の稱名ではない。「念佛申さんと思ひたつ心」を指す。この心の相續が十念相續であるといふのである。

四。かくて最後に「然らば何故に經に特に十念と説かれたのであるか」といふ問題が起

る。是に對して鸞師は、十念とは業事成辨の異名であると斷言せられた。即ち上に述べた一念は絕對の一念であるから、こゝに十念といふも、數學的に一を十度加へた十ではない。絕對者の言葉である。我等は唯心を一つにして一心一向に佛に向ひ奉ればよいのである。この一心歸命の心を十念と名けるのである。是は常識的な、數學的な、概念的な言葉でない。神秘的な哲學的な、實感的な言葉であるといふのである。

光明寺和尚云問曰如四十八願中唯除五逆誹謗正法不得往生今此觀經下品下生中簡誹謗攝五逆者有何意也
答曰此義仰就抑止門中解如四十八願中除誹謗法五逆者然此之二業其障極重衆生若造直入阿鼻歷劫周章無由可出但如來恐其造斯二過方便止言不得往生亦不是不攝也又下品下生中取五逆除誹謗法者其五逆已作不可捨令流轉還發大悲攝取往生然誹謗法之罪未爲又止言若起誹謗法即不得往生此就未造業而解也若造還攝得往生雖得生彼華合還於多劫此等罪人在

華、内一時有三種障、一者不得見佛及諸聖衆、二者不得聽聞正法、三者不得歷事供養、除此已外、更無諸苦、經云、猶如比丘、入三禪之樂也、應知雖在華中、多劫不開、可勝阿鼻地獄之中、長時永劫受諸苦痛也、此義就抑止門解竟上已

又云、永絕譏嫌、等無憂惱、人天善惡皆得往到、彼無殊齊、同不退何、意然者、乃由彌陀因地、世饒王佛所捨位出家、即起悲智之心、廣弘四十八願、以佛願力、五逆之與十惡、罪滅得生、謗法闍提、剋心皆往出

【讀方】光明寺の和尙のたまはく。問ていはく、四十八願のなかのことは、たゞ五逆と誹謗正法とをのぞきて、往生をえしめず。いまこの觀經の下品下生のなかには、誹謗をえらんで、五逆を攝せるはなんのころかあるや。答ていはく、この義あふいて抑止門のなかにつきて解す。四十八願のなかのときは、謗法五逆をのぞくは、然るにこの二業、そのさばり極重なり。衆生もし造れば、ただちに阿鼻にいりて、歷劫周章して、いづへきによしなし。たゞ如来、それこの二つの過を造んを恐れて、方便してとめて往生をえすとたまへり。またこれ攝せざるにはあらざるなり。また下品下生のなかに、五逆をとりて謗法をのぞくことは、それ五逆はす

でにつくれり、すて、流轉せしむすからず。かへりて大悲をおこして攝取して往生せしむ。しかるに謗法の罪はいまだつぐらす。また止めてもし勝法をおこさば、すなはち生ずることをえじとのたまふ。これは未造業について解するなり。もし造ばかへりて攝して生ずることをえしめん。かしこに生ずることを得といふとも、華合して多劫をへん。これらの罪人は華のうちにあるとき、三種のさばりあり。一には佛およびもろゝの聖衆をみることをえじ。二には正法を聽聞することをえじ。三には歷事供養をえじ。これを除きて已外は、さらにもろゝの苦なげん。經にいはいはく、なを比丘の三禪の樂に在るがごときなり。しるべし、華の中において多劫ひらけずといふも、阿鼻地獄のなかにして、長時永劫にもろゝの苦痛をうけんに勝れざるべけんや。この義、抑止門につきて解しをはんぬ。上已

またはいはく、ながく譏嫌を絶て、ひとしくして憂惱なし。人天善惡みな往くことをう。かしこに到りて殊ることなし。齊同不退なり。何の意ありてか、然るとならば、いまし彌陀の因地にして、世饒王佛のみもとにして、位をすて家をいで、すなはち悲智の心をおこして、ひろく四十八願を廣めたまひしによりてなり。佛願力をもて五逆と、十惡と、罪滅し生ずることをえしむ。謗法闍提廻心すればみなゆく。出抄

【字解】一。阿鼻 阿鼻地獄。無間地獄のこと。

二。歷劫 劫を歷ること。長い劫波をすこと。

三。三禪之樂 色界の第三禪の樂。欲界にありて、色界の四禪定に入ることが出来る。今はその中の第三禪の樂をいふ。

【文科】 善導大師の二文「散善義」「法事讃」によりて逆謗の攝不を述べたまふのである。

【講義】 光明寺の善導和尚の『散善義』に宣はく。問うて曰く、四十八願の中、第十八願には、五逆と正法を誹謗するものは往生が出来ないというのである。しかるに、今この『觀經』の下々品の處では誹謗正法のことには記してないが、五逆のものも往生が出来ると攝取してあるは、どういふ意味であらうか。

答へて曰く、このことは、釋迦如來の慈悲の御心から、抑止して下される。その方面から伺はねばならぬ。第十八願に於て、誹法罪と五逆罪を除くと記し給ふたは、罪といふ罪の中でも、この二つの罪は、障りが最も重く、衆生もしこの罪を造れば、直に阿鼻地獄に墮ちて、長い間、いかにあわて、見ても出づることが出来ないで、釋迦如來、大悲心から、衆生のこの二罪を作らんことを恐れて、方便を以て往生が出来ないぞと厳しく止めて下さつたのであつて、さういふ罪人は、攝取しないといふことではない。それで、『觀經』下々品の中に、五逆のものは救はれると説きながら、誹法罪のものを除き給ふたのは、五逆罪は既に作つたものであるから仕方もない、捨て、は置かれぬ。釋迦如來茲に於て大慈悲心を以てそのものも、阿彌陀如來の本願の信心念佛で助かるぞ、往生出来るぞ

と、こちらへ抱きとつて教へて下されたのである、誹法の重罪は未だ造らないから、誹法罪を犯さないやうに、誹法罪のものは往生することは出来ないといふ説き給ふのである。即ち未造業といふ側で、止め、造れば、攝取して往生出来るぞと教へ給ふのである。

此兩罪のものは、淨土に往生することが出来るが、華の中に包まれて、十二大劫の間、その中から出ることは出来ぬ。彼等はこの華の中で、三つの障を受ける。一には、佛や聖衆の御すがたを拜むことが出来ぬ。二には正法を聽聞することが出来ぬ。三には諸佛如來の御國を經行りて供養し奉ることが出来ぬ。この三つの障を除いては、外の苦惱は何もない。經典には、この境地を寫して、比丘が、色界三禪天に入つて楽しむやうなものであると説いてある。華に包まれて、十二大劫の間出ることが出来ぬとも、無間地獄の中で、兆載永劫の間苦しむのとは比べものにならぬ。以上、釋迦如來の大慈悲心から抑止し給ふ義門で解釋し竟つたのである。

又『法事讃』に宣ふやう、彼の淨土には、二乗と女人と根欠(肉體の不具のもの)のものがない許りでなく、この三者を識つた名もないのである。少しも心配や苦惱といふものはない。人間でも天人でも、善人でも悪人でも、皆往生することが出来る。淨土へ往生す

れば、みな、一味平等の證を開いて、再び惡趣へかへることはないのである。どうしてこれが出来るかといへば、阿彌陀如来が、因位永劫の昔、世自在王佛の御許で、王位を捨て家を捨て、大悲大智の御心から、廣く四十八願を起して下されたからである。この因位の願力で、五逆のものでも、十惡のものでも、みな罪が消えて淨土に往生することが出来るのである。正法を誹謗する恐ろしいものも、斷善根の仕方のないものも、みな回心して如来に向ひさへすれば、往生が出来るのである。

已造業
未造業

【餘義】一。善導大師の抑止門に對する見解は、人情の機微を穿つた説である。即ち親子を愛する餘りに、重罪を犯すことを恐れて、豫め誠めたのが、大經の兩罪抑止である。即ち未造業に就いての抑止である。然るに『觀經』にありては、既に五逆を犯してゐる。故に大慈悲の正意を顯はして、攝取せられたのである。されど謗法罪はまだ起つてをらぬ故に、之を抑止せられた。もし謗法罪が起れば、亦攝取するのである。即ち五逆は申す迄もなく、謗法も闡提も、廻心すれば皆な往生することが出来ると決せられた。この最後の『法華經』の文によりて、折り返して釘を打つやうに、上の最初の問題を解決せられたのである。

以上、曇鸞、善導二師の眞意を概括して、仰せられたのが、上(五四一頁)所引の銘文の言葉である。

多劫抑止

このふたつのつみ(五逆、謗法)のおもきことをしらしめて、十方一切の衆生、みなもれず往生すべしとしらせんとなり。

二。上の文中、五逆、謗法の人が攝取せられて往生しても、尙ほ華に包まれて、三寶を見聞することが出来ないと云はれてゐる。之を多劫抑止と稱す。これは下々品の往生人はかりでない、下三品に通ずる抑止である。されどこの抑止も亦釋尊の方便であつて、彌陀の眞意でない。彌陀の本願は、一切の惡人を等しく救済し給ふにある。唯釋尊がどこ迄もこの方便の抑止を致されるのは、これによつて益本願の正意を顯彰せられんが爲めである。父は叱り、母は懐く。共に子の爲めに働く同一慈悲心の發現である。かくて攝取とは抑止を孕んだ攝取であり、抑止は亦攝取を含んだ抑止である。これが大慈悲の内容である。

第三科 五逆釋義

言五逆者若依三溜州五逆有二一者三乘五逆謂一者故思殺父

二者故思殺母三者故思殺羅漢四者倒見破和合僧五者惡心
 出佛身血以下背恩田違中福田故名之爲逆執此逆者身壞命終必
 定墮無間地獄一大劫中受無間苦名無間業
 又俱舍論中有五無間同類業彼頌云汗無學尼殺母殺住定
 菩薩同類及有學無學同類奪僧和合緣同類破塔率都婆佛
 身二者大乘五逆如薩遮尼乾子經說一者破壞塔焚燒經藏及
 以盜用三寶財物二者謗三乘法言非聖教障破留難隱蔽覆藏
 三者一切出家人若戒無戒破戒打罵呵責說過禁閉還俗驅使
 債調斷命四者殺父母害母出佛身血破和合僧殺阿羅漢五者謗
 無因果長夜常行十不善業上巳
 彼經云一起不善心殺害獨覺是殺生二媼羅漢尼是云邪行也
 三侵損所施三寶物是不與取四倒見破和合僧衆是虛誑語也
 出略

【讀方】五逆といふは、もし灌州によるに、五逆にふたつあり。一には三乘の五逆、いはく一には、故におも

うて父を殺す。二には故におもつて母を殺す。三には故におもつて羅漢を殺す。四には倒見して和合僧を破
 す。五には惡心をもつて佛身より血をいだす。恩田にそむき、福田に違するをもつての故に、これをなづけて逆とす。
 この逆を執するものは、身やぶれ命をへて、必定して無間地獄に墮して、一大劫のうちに無間の苦をうけん。無
 間の業となづく。

また俱舍論のなかに五無間の同類の業あり。彼頌にいへく、母無學尼をけがす(殺母罪の同類)。住定の菩薩(殺
 父罪の同類)および有學無學を殺す(殺羅漢の同類)。僧の和合縁をうげふ(破僧罪の同類)率都婆を破壞す(出
 佛身血の同類)。二には大乘の五逆。薩遮尼乾子經にとくがごとし、一には塔を破壞し、經藏を焚燒
 し、および三寶の財物を盗用するなり。二には三乘の法をそしりて、聖教にあらずといひて、邪破留難し、
 隱蔽覆藏す。三には一切出家人、もしは戒、無戒、破戒のものを打罵し呵責して、過をとき禁閉し、還俗せ
 しめ驅使偵調し、斷命せしむ。四には父を殺し、母を害し、佛身より血をいだし、和合僧を破し、阿羅漢を殺
 す。五には因果なしと謗して長夜につれに十不善業を行するなり。上巳
 かの際にいへく、一には不善の心をおこして、獨覺を殺害する、これ殺生なり。二には羅漢にを害する、これ
 を邪行といふなり。三には所施の三寶物を侵損する、これ不與取なり。四には倒見して和合僧衆を破する、こ
 れ虛誑語なり。出略

【字解】一。灌州 支那法相宗第三祖智周(西曆七〇〇年の人)をいふ。灌州はその住地である。慈恩の門下
 第七章 重釋要義

たる慧沼の弟子、撰陽の人であるから撰陽大師とも稱せらる。日本の知風入唐の際、法相宗を授けた人である。『成唯識演秘鈔』『成唯識論了義燈記』等十部四十餘卷の著あり。寂年かく。

二。『俱舍論』具には『阿毘達磨俱舍論』梵語(Abhidharmakosastra)『對法藏論』と譯す。三十卷。真宗七高僧の一、天親(又は世親といふ)菩薩者。唐の玄奘三藏譯。界品(二卷)根品(五卷)世間品(五卷)業品(六卷)隨眠品(三卷)賢聖品(四卷)智品(二卷)定品(二卷)破我品(一卷)初め八品に於て、認識論、宇宙論、因果論、修道論等、所謂有漏無漏の諸法を論じ、最後の「破我品」に於いて、無我の眞理を説示す。俱舍宗正依の論にして、亦純乎たる古代の宗教哲學書である。

三。率都婆 塔のこと。梵語スツパ(Supa)率都婆、塔婆、蘇偷婆、浮都等と音譯す。方墳、圓、高顯等と譯す。古代印度に於いては、舍利を藏むる爲め、供養の爲め、報恩の爲め、靈域を表はす爲め等に建てた。『長阿含經』には、辟支佛緣覺、聲聞、轉輪王の四人には、塔を建て、供養せよと説かれてある。爾來、印度、支那、日本に通じて、塔は盛に建立せられた。現今、俗にソトバ(率都婆)又はタフバ(塔婆)といふは、細長い板の上部を、塔の形に模して、是に經文を書いたものを指すは、根本の意味より狭くなつてゐるのである。

四。障 破留難 佛法を障へ破りて、難を留めること。即ち佛法の流布するを妨げ、危害を構へること。
五。隱蔽覆藏 上の妨害は積極的であるが、これは消極的に、佛法の光りを覆ひ隠して、弘まらぬやうにすること。

六。債 調 債は責めること。調は調伏、即ち荒れ馬をこなすこと。馬を使ふやうに、こまづかふこと。
七。十不善業 十惡のこと。殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚痴
【文科】『往生十因』によりて 逆罪を廣く述べたまふ一段である。

【講義】 五逆罪といふことについて、法相宗の溜州の惠沼大師は三乘の五逆と、大乘の五逆と二種類に分けて置き給ふた。その中、三乘の五逆といふのは、一には故意に父を殺すこと、二には故意に母を殺すこと、三には故意に阿羅漢を殺すこと、四には顛倒の妄見から、僧團の和合を破ること、五には惡心を起して、佛の御身體から血を流すこと、それである。これは父母の恩田に背き、佛僧の福田に背くことであるから逆罪と名けるのである。この逆罪を犯すものは、一身の壽命終る時に無間地獄へ墮ち込んで、一大劫の間、間のない苦惱を受けねばならぬ。間のない苦を受ける地獄であるから無間地獄と名けるのである。

又『俱舍論』の中にこの五無間業に似て居る罪を擧げてある。俱舍論の頌にこのやうにいうてある。母と阿羅漢果を得た比丘尼の節操を汚すこと(殺母罪の同類)。三僧祇劫の修

行が濟んで、今百大劫の修行中の住定の菩薩を殺すこと（殺父罪の同類）。有學果、無學果の聖者を殺すこと（殺阿羅漢罪の同類）、僧團の和合して行く資縁となるもの、即ち米麥等の飲食を奪ふこと（破和合僧の同類）。卒都婆を壊すこと（出佛身血の同類）。

第二に、大乘の五逆といふのは、『薩遮尼乾子經』に説いてある通り、一には、塔をこぼし、經藏を焼き、佛法僧三寶に附屬する財物を盗み用ゆること。二には、聲聞緣覺菩薩三乘の教を排して、佛敎でないというて、佛法の世の間に弘まることに邪魔をすること。三には、すべての出家の人や戒を持つてゐる人、戒を破つた人を打つたり嘗つたり責めたりして、過失を擧げて無理に還俗させ、追ひ使ひ、責めさいなんで、死なせること。四には殺父、害母、出佛身血、破和合僧、殺阿羅漢のこと、五には、因果などはないこと、邪見をつのつて、長夜の夢を貪り、十惡を犯して居ることである。『十輪經』に曰く、一に善からぬ心を起して緣覺を殺すは、殺生である。二に無學果を證つた比丘尼に對して姪行をするは、邪姪行である。三に諸方から施與になつた三寶の財物を侵すは不與取である。四に顛倒の妄想から、僧團の和合を破るはうそいつはりの語である。

五逆罪に就て

【餘義】一。引く所の文は、永觀の『往生十因』に依りて淄州の智周師の釋を引く。即ち

師の『最勝王經疏』の文である。

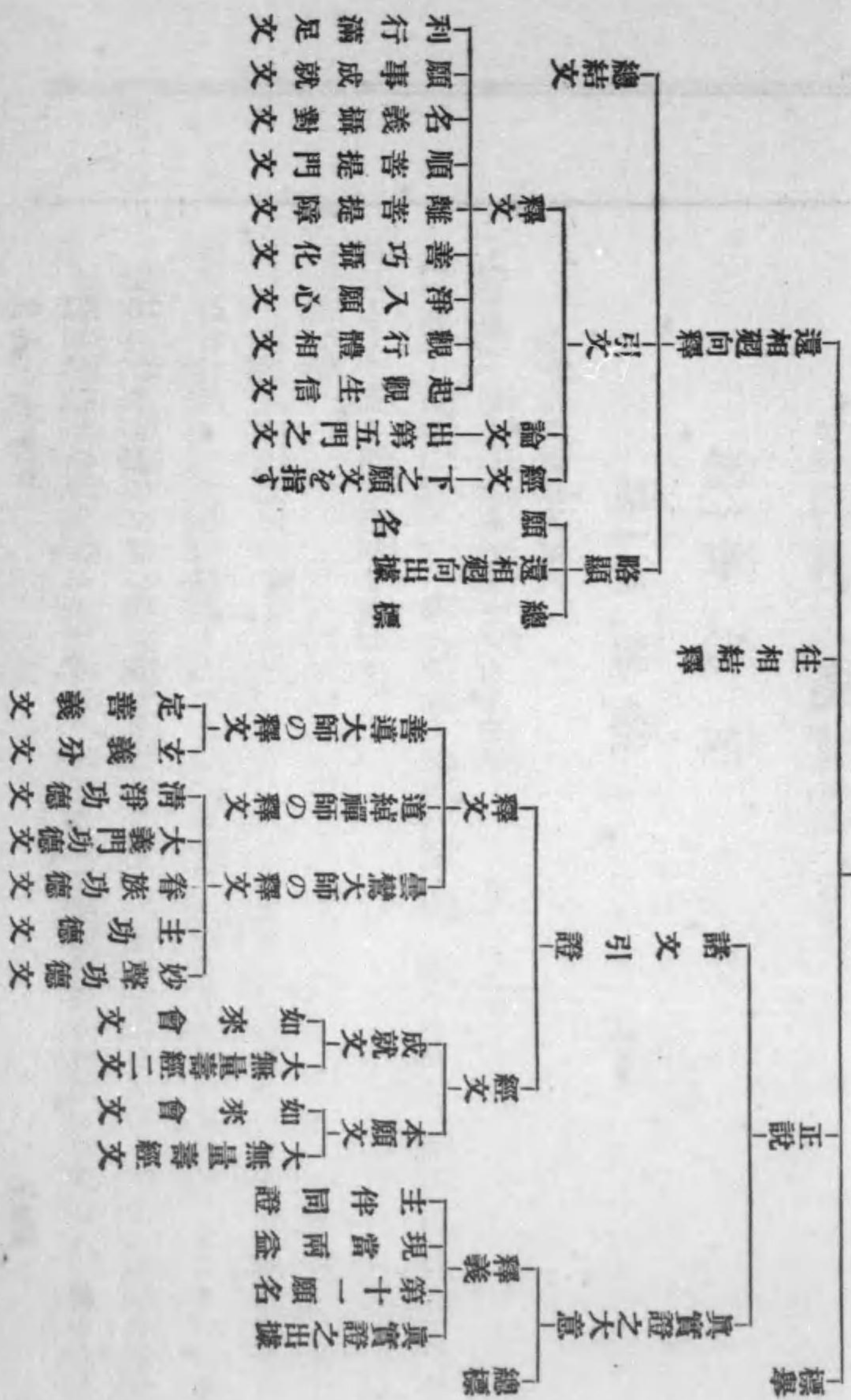
此文の引意に就いては、此下の『六要』に二義を擧げてある。一は、上に五逆謗法の往生を示してゐるが、その中謗法罪に就いては、『論註』に委しく解釋せられてあるが、五逆に就いては未だその内容を明にしてない。今やその罪相を示さんが爲めに引用せられた。二は、若し小乗の五逆ならば、多くの人は、犯してをらぬと思つてゐる。けれども大乘の五逆説に照さるゝ時は、何人も五逆罪を免ることは出来ない。人は皆常に十惡五逆を行うてゐるのである。乃ち是等の罪相を明かにして、慚愧の念を生せんが爲めに引用せられたといふのである。

『六要』の此二義は、動きの取れない適切の説である。但し文中『薩遮尼乾子經』の説に依れば、謗法罪も亦第二逆罪の中に攝してゐる所から見れば『觀經』の五逆罪を攝取する中に、矢張り謗法罪をも攝してゐることが知られると經證せられたに相違ない。良に上來、五逆謗法の兩罪に就いて多の問題が起つてゐるのであるが、この兩罪と決して離れてゐるものでない。矢張り私共一人々々に相關連して存するのである。吾等は實に五逆謗法闡提の凡を集めてゐる惡機である。『末燈鈔』四十七丁に

善知識をおろかにおもひ、師をそしめるものをば、謗法のもと申すなり。親をそしめるものをば、五逆のもと申すなり。

殊に吾等に取りては適切な御言葉である。あゝ何人か五逆謗法の罪を免るゝことが出来やうぞ。聖人は自らこの自覺を表白し、普くこの自覺を促し給ふ爲めに此文を引用せられたものである。

證卷



第四編 眞實證 (證卷)

第一章 解題

第一節 題號

顯淨土眞實證文類四

【講義】 淨土眞宗の證果を顯はす文類。

【餘義】 前卷に於いて、淨土眞宗の眞實の信を明し終つたから、當卷に於いては、その信によりて獲る所の證果を顯はす。



證果の意

他力の行信の因によりて獲る所の證果は、眞如一實の涅槃である。行信の功德利益の種が、正しく圓に華實を結ぶ所である。淨土を論じた支那の高僧達は、淨土をもつて單に不

退の位を獲る所とし、往生即成佛の極致とはせなかつた。即ち諸師の多くは、經典の文面を固執して、その裏に流れてゐる實義を知ることが出来なかつたのである。然るに我聖人は、當卷に於いて、他力廻向の大信心が必然的に生む所の淨土の證果と、これに即した如來の大慈悲の至極を開顯はされた。

眞實證は、また方便化士の證果を選びすてた言葉である。即ち下の化身士にも對するものである。

第二節 選號

愚禿釋親鸞集

上二五頁をみよ、この六字、御眞本にも御草本にもない、後人の手に依つて附け加へられにものであらう。

第二章 標舉

【大意】この「證卷」一部に説き明すべき證を標したまふのである。この十一字御草本、御清書本ともに表紙の裏に二行にしてかゝられてある。

必至滅度之願 難思議往生

【字解】一。必至滅度の願、下の餘義(次頁)をみよ。

【文科】「證卷」一巻にとき明す證を標舉する一段。

【講義】この巻に説き明す證といふのは、第十一願成就のもので、淨土眞實の證である。阿彌陀如來が、どうしても吾等をして淨土の證果を開かせずばをかぬといふ誓ひが即ち夫である。吾等が久遠劫來の流轉の三界をいで、無碍圓滿の證りを開くのは、この誓願力によるのである。これ實に不可思議である。故に難思議往生と仰せらる。

【餘義】一。行巻には第十七願、信巻には第十八願を標せられ、こゝには第十一願を標せられた。行信證は一々みな本願の上にあるのである。即ち凡夫の起す所でない、偏に如來の廻向であることを示し給ふ。

願名に就いて、『略本』には三名を擧げられた。この二願名の外に、往生證果願を添ふ。その中、今は願文に親しいのと、元祖相承の名であることによりて、この必至滅度之願名を標せられた。

凡そこの十一願には、二つの願事がある。即ち住定聚と必至滅度である。この二つの中、何れを願の中心にするか、即ち何れを願體とするか、一問題である。次の第十一願文の下の『六要』には、支那の義寂、法位、玄一の三師の説、日本の靜照、眞源二師の説をあげ、何れも住正定聚を願體としてゐることを述べ、さて是を通釋して云ふには、正定聚は淨土の始益、滅度は淨土の終益であるとせられた。

支那、日本の諸師の説は、往生即成佛とたてるのではなくして、往生して喜ぶ正定聚に住し、次に長い修行の後、始めて證りを開くといふのである。即ち彌陀の淨土は、此娑婆世界のやうに修行の障りがないから、先づそこへ行きて、佛道修行を續けるといふのが説の根本となつてゐるのである。故にこの十一願も、我等に親しい願事は往生して正定聚に住することである。これが第一に入用なのである。滅度は終局の目的ではあるが、それは今の我等に取りては第二の問題である。そこで此住正定聚を願體とし、此名も合

住定聚 願 住定聚、住定聚願、住必至滅度之願と云はれた。

然るに我聖人は、往生即成佛の根柢の上に据つてゐられるから、従つて此十一願の願體を必至滅度とせられ、名も亦必至滅度之願、證大涅槃之願等と云はれたのである。即ち我聖人にありては住正定聚は現益である。これは信の一念の所に獲るのであるから果というても眞實の證果ではなく、寧ろ信心に具はる利益である。故に正しく往生の證果は必至滅度である。これ實に我聖人が、諸師の説と異なる所以である。存覺師が、淨土の證果に始益、終益を分けられたのは、所謂他宗對抗門の態度で、能と一步下つて、融和説を試みられたまでに過ぎない。

二。更にこの必至滅度は、明に淨土往生の證果を指すのであるが、聖人はまた是を現益と味うてもわらせられる。『一多證文』五丁に

このくらゐ(正定聚)にさだまりぬれば、必ず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆへに、等正覺をなるともとき、云々

とあるは夫である。此は文字の上から云へば、「必至」を強く見たのである。詩いた種は必ず生へると云ふことは、種はまだ生へぬが、必ず生へる種であるといふ意味である。吾等

はまだ佛とはならぬ、されど佛となるべき信心の因を獲てゐるから、必ず佛になる身である。無上涅槃に至るべき身であるといふのである。こゝが亦信仰の妙趣である。往生の確信と希望は、現在の感味である。これを全く離れては、往生とか滅度とかと云ふことは無意義である。この意味に於いて、結果は原因に含まれてゐると云はねばならぬ。是れ聖人が必至滅度を正定聚の内容として味ひ給ふ所以である。覺如上人は之を受けて『本願鈔』三丁に

一念歡喜のおもひおこるについて、往生たるところにさだまるを、正定聚のくらゐに住すともいひ、かならず滅度にいたるともいひ、攝取不捨の益にあづかるともいふなり。と云はれ、『御文』二の一通には

又このくらゐを、あるひは正定聚に住すとも、滅度にいたるとも、等正覺にいたるとも、彌勒にひとしとも申すなり。

とあるは、皆なこの謂れである。されど是をもつて、直に一益法門を主張するならば、早計と誤謬の甚しいことは云ふまでもない。

三。細註の難思議往生は、化巻の難思議往生、雙樹林下往生に對す。これは聖人が、善導

大師の『法事讚』四丁の文意を探りて、要、眞、弘の三門に配せられたものである。『愚禿鈔』上五丁

法事讚に三往生あり

- 一には難思議往生は大經の宗なり
- 二には雙樹林下往生は觀經の宗なり
- 三には難思議往生は彌陀經の宗なり

と仰せられ、自力他力の行信の因によりて、獲る所の證果を褒貶せられたのである。今試に『三經往生文類』の文を引いて、三往生の分齊を明かにするであらう。

大經往生といふは、如來選擇の本願、不可思議の願海、これを他力とまふすなり。これ即ち念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらゐに住して、かならず眞實報土にいたる。乃至、これを大經の宗致とす。このゆへに大經往生とまふす、また難思議往生とまふすなり。(中略)

觀經往生といふは、修諸功德の願により、至心發願のちかひによりて、萬善諸行の自善を廻向して、淨土を忻慕せしむるなり。乃至、これは他力の中に自力を宗致としたま

へり。このゆへに觀經往生とまふすは、これみな方便化士の往生なり。これを雙樹林下往生とまふすなり。(中略)

彌陀經往生といふは、植諸徳本の誓願によりて、不果遂者の眞門にいり、善本徳本の名號をえらびて、萬善諸行の少善をさしおく。しかりといへども、定散自力の行人は、不可思議の佛智を疑惑して信受せず、如來の尊號をおのれが善根として、みづから淨土に廻向して、果遂のちかひをたのむ乃至しかれども如來の尊號を稱念するゆへに、胎宮にとまらる。徳號によるがゆへに、難思往生とまふすなり。不可思議の誓願疑惑するつみによりて、難思議往生とはまふさずとしるべきなり。(下略)

上の引文によりて三往生の區別は明かである。自力作善の往生は雙樹林下往生、半自力半他力の往生は難思往生、絕對他力の往生はこの難思議往生である。されど三往生の據である所の『法事讚』を見るに、唯迷界の厭ふべきこと、淨土の樂ふべきことをのべてこの三往生を讚詠せられたもので、上に掲げたやうな自力他力に配當したものでないのである。然るを我聖人は、例の如く文面に拘泥せず、直ちに善導大師の胸に入りて、この三往生の眞意義を發揮せられたのである。

當卷に於ける廻向の位置

四。尙ほ當卷には還相廻向をも説示してゐるが、それを滅度のやうに標示せないのは、どういふ譯であるかと云へば、もと還相廻向は證果の活動である。證りというても、單なる寂靜無爲ではない。その證りに根ざした化他の大活動である。その方面が即ち還相廻向である。『和讃』に

願土にいたればすみやかに
すなはち大悲をおこすなり

無上涅槃を證してぞ
これを廻向となづけたり。

がそれである。従つて證果を主として明す時は、還相廻向は全く證りの内容となる。故に今は必至滅度の中に含まれてゐるのである。時に名目に掲げられないのは是が爲である。『略本』は二廻向を二大綱格とし、その往相廻向の中に教行信證の四法を説かれたもので、二廻向が主であるが、本典の組織は是と異り、四法を綱格とし、その中に二廻向を攝めてゐる。即ち還相廻向は、證果の大用として當卷に出されたことである。條理整然としてゐる。

第三章 眞實證

【大意】 此れより以下正しく淨土眞實の證を説き示し給ふのである。第一節に眞實證の何たるかを總括めて示し、第二節には證の義を釋し給ふ。それに四項あり、第一項は眞實證の出處、第二項は願名、第三項は現當の兩益、第四項は淨土の主伴同證を示したまふ。

第一節 總標

謹顯眞實證者則是利他圓滿之妙位無上涅槃之極果也

【讀方】 謹んで眞實證をあらはさば、すなはちこれ利他圓滿の妙位、無上涅槃の極果なり

【字解】 一。利他圓滿之妙位 利他は他力のこと。他力廻向の、萬徳圓滿せる佛果をいふ。佛果は無上不可思議の極位であるから、妙位といふ。

二。涅槃 梵語ニルワナ (Nirvāṇa) 泥洹、涅槃那と音譯し、滅度、圓寂、寂滅等と譯す。又無生、無爲、無作等ともいふ。迷妄を脱し、惡業の繫縛を離れ、眞理を窮めて、寂滅無爲の法身の證を開くを云ふ。小乗の身を灰にし、意識を滅する、消極的の涅槃に對して、無上涅槃、又は大般涅槃とも云ふ。

【文料】 他力廻向の證を總標したまふ一段。

【講義】 教行信證の眞實四法のうち、今謹んで、眞實證を頂いてみるに、これは彌陀如來御廻向の他力の缺目のない證の位である。又彌陀如來と同じ位の、この上ない大涅槃のさとりである。

【餘義】 一。「利他圓滿之妙位」等の二句は、略本には簡明に「證といふは、即ち利他圓滿の妙果也」とせられてある。廣略異なるけれども、その意はともに眞實證の内容を示されたものである。

初句の利他は他力の異名である。彌陀如來より廻向せられたることを明す。圓滿は、よろづの功德のみち／＼て缺目ないこと。次の「無上涅槃の極果」とは、證りそのものをいふ。我等の眞實信心によりて獲る所の眞實證果は、彌陀廻向の證にして亦彌陀如來の證りそのものであるといふのである。

下の『眞卷』五十丁左に『法事讚』の文たる「彌陀の妙果をば、號して無上涅槃といふ」を引かれた。いまこの二句に照し合はせて見ると、我等の證果と彌陀の妙果が全く同一たることが知られてくる。この幽玄微妙なる味を、聖人は『末燈鈔』の「自然法爾事」に説いて言ひ顯はされた。初めに行者のはからひを離るゝことを述べられ、後に

ちかひのやうは、無上佛にならしめんとかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆへに、自然とはまふすなり。かたちましますとしめるときには、無上涅槃とはまふさす。かたちもましまさぬやうをしらせんとてはじめて彌陀佛とまふすとぞきゝならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしやうせんれうなり云々。

と仰せられた。即ち無上涅槃とは無上佛のことである。證身と證とは全く一つである。故に彌陀如来の誓願は、御自身と同じ證りに入らしめ、證りの身となせしめんが爲に外ならぬ。かくて彌陀の證りは我等の證り、我等は彌陀と等しき無上佛となるのである。これ實に不可思議の誓願力の然らしむる所である。従つてその味も計ひを離れた時に自と味はるる不可思議の信味である。唯教理として、言葉として記憶することでない。亦徒に饒舌を逞しても何の益にも立たぬ。こゝの消息を同文の終りに

この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なを義のあるになるべし。

これは佛智の不思議にてあるなり。

と云はれてある。誠に他力自然の妙を徒に云爲することは捕へることの出来ぬ不可思議の宗教的生命を、捕へんとするのである。もし捕へる時には死んで仕舞うのである。

莊子に一つの譬喩がある。南海の帝たる儻と、北海の帝たる忽とが相談して、中央の帝渾沌の徳に報せんが爲めに、彼が耳目等の七竅なきを見て、日々渾沌の身に一竅つゝ穿つと、七日にして七竅が成就上るとも、渾沌は直ちに死んだといふ。この喩はそのまゝ移してこゝに味ふことが出来ると思ふ。他力自然不可思議の旨趣は、徒なる義理や、單なる思索をもつて目鼻をつければ、却つて死んで仕舞うのである。吾等がこの證卷を味ふにつけても、大に心を留めねばならぬ點である。

第二節 釋義

第一項 眞實證の出據

即是出於必至滅度之願

【譯方】即ち、これ必至滅度の願よりいでたり。

【文科】 眞實證の據を示したまふ一段。

【講義】 而して凡夫がどうして斯ういふ無上のさとりを頂けるかといふに、彌陀如來因位に於て四十八願の中に特に第十一の必至滅度の願を御立てなされてあるからである。

【餘義】 一、『略本』には必至滅度と、證大涅槃の外に往相證果之願をあぐ。されどここには眞實證の下に還相廻向を明されることがあるから、此名前は却つて思想上の混雜を惹起する恐れがある。それ故に態と此處には往相證果願名を略されたい。所處までも用意周密である。

第二項 十一願名

亦名證大涅槃之願也

【讀方】 また證大涅槃の願となづくるなり。

【文科】 第十一願の別名をあげたまふ。

【講義】 この第十一願は大涅槃を證らしむる願であるから亦證大涅槃の願とも名けるのである。

第三項 現當兩益

然煩惱成就凡夫生死罪濁群萌獲往相廻向心行即時入大乘
正定聚之數住正定聚故必至滅度必至滅度即是常樂常樂即
是畢竟寂滅寂滅即是無上涅槃無上涅槃即是無爲法身無爲
法身即是實相實相即是法性法性即是眞如眞如即是一如

【讀方】 しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行をうれば、即ちの時に、大乘正定聚の數に在るなり。正定聚に住するがゆへに、かならず滅度にいたる。かならず滅度にいたるは、すなはちこれ常樂なり。常樂はすなはちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり。無上涅槃は、すなはちこれ無爲法身なり。無爲法身は、すなはちこれ實相なり。實相はすなはちこれ法性なり。法性はすなはちこれ眞如なり。眞如はすなはちこれ一如なり。

【字解】 一、群萌 衆生のこと。

二、往相廻向心行 淨土 往生の因たる如來廻向の三信(心)十念(行)。即ち信心のこと。

三、大乘正定之聚 小乘の正定聚に對して大乘といふ。即ち必ず圓融無碍の大乘の證を開くにきまる位。下六九一頁の餘義參照。

- 四。滅度 淨土の證。涅槃の譯。上(六八四頁)をみよ。
- 五。常樂 常住に移り變りなく、樂みづくめといふこと。
- 六。畢竟寂滅 終局の證といふこと。生もなく滅もなく、絶對平等の靜寂境ないふ。涅槃の譯語。
- 七。無上涅槃 このうへない證。
- 八。無爲法身 色もなく、形もなき、常住にして一切に過ぎ法身佛のこと。迷ひの流轉生滅する有爲法に對して、不生不滅の本來常住法なることを示して無爲の二字を冠す。
- 九。實相 ありのまゝの相。これに二面ありて、相對的方面から云へば、萬有みな異なるが、絶對的方面は、萬有みな平等である。そして此相對そのまゝが絶對、絶對そのまゝが相對である。故に一塵といへども眞如實相にして、虛妄ではないといふのである。今は此實相の智見の開覺は淨土の證りによりて獲らるゝといふ意味である。

- 一〇。法性 一切萬有の體性。眞如のこと。
- 二〇。一如 一は唯一絶對。如は平等無差別。絶對平等の眞如法性をいふ。

【文科】 他方信心の果たる現當兩益を示したまふ一段である。

【講義】 それで、あらゆる煩惱をかへた凡夫、生死の海に沈みきりの罪に汚れた衆生が、淨土へ參らして下さるゝ働きのある大信と大行を頂けば、その時直ぐ様、淨土へ生る

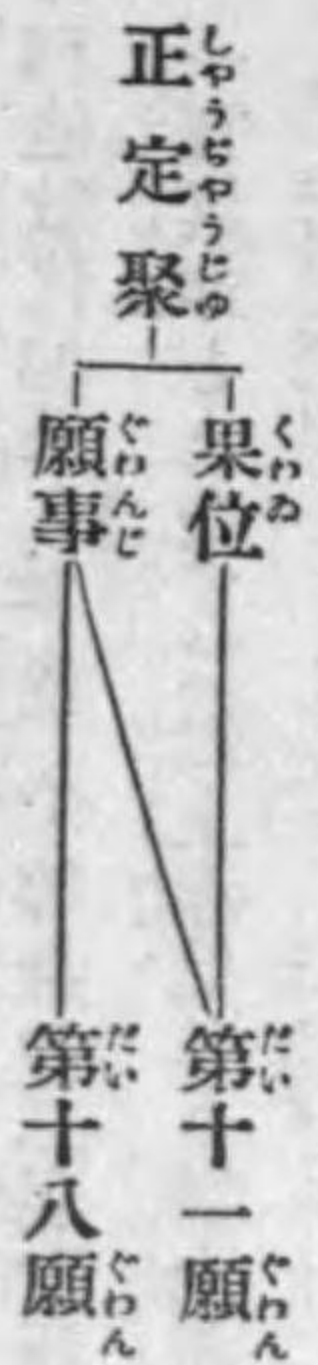
るに間違ない位にして下さるのである。この正定聚の位に定まるから、命終れば、必ず大涅槃のさとりをひらき、大涅槃のさとりをひらくから、常樂我淨の四徳を具ふるにやうになる。この常樂我淨の四徳を具ふるものは、その後のない、おんづまりの寂滅である。寂滅は、この上ない涅槃である。無上涅槃は、爲作造作を離れた眞如法身である。この無爲法身は實相であり、實相は法性であり、法性は眞如であり、眞如は絶對唯一の無差別平等の法である。

【餘義】 一。此下正しく證果の大益を擧ぐ。即ち現益としては正定聚、當益としては滅度である。この二益は共に十一願に誓ふ所である。そして此中滅度が願體であることは、上六七九頁に詳述した所である。既に滅度が願の眼目であるとするならば、いまや正定聚の何たるかを講究せねばならぬ。

第一にこの正定聚については『行卷』私釋他力の下に龍樹、曇鸞二祖を引いて、「即時入必定」「入正定聚之數」を擧げ、『信卷』現生十種益には、入正定聚益をあげて、信の一念に正定聚の位に定ることを示してある。是等に依りて見れば、正定聚は第十一願の願事たるのみならず、第十八願にも屬するものと云はねばならぬ。この關係はいかに。

この疑難に對しては、勢ひ第十八願と第十一願の關係を見ねばならぬ。既に『三經往生文類』初丁に「念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり」と云ふ如く、第十八願の信心の因によりて、第十一願の證果を獲るのであるが、この中正定聚は、二願に通じてゐるのである。第十八願にありては、正定聚は現生の利益として其役目を演じてゐる成就文の「即得往生住不退轉」が即ち是れである。是は信の一念の同時にうる所の利益であつて決して離れることは出来ぬ。云はゞ信一念の位である。されど且く因果相望して其所屬を論ずれば、正定聚は矢張り第十一願に屬せねばならぬ。信は因であり、この因によりて正定、滅度の果を獲るのである。この證果を誓ふが第十一願である。『正信偈』の「等覺を成じ、大涅槃を證するは、必至滅度願成就したまへばなり」が是である。其他『三經往生文類』四十「願々鈔」初丁「最要鈔」三丁等みな之と同じ。

かやうに正定聚は明かに第十一願の願事ではあるが、現益であるから正しく信因の證果とは云ふことは出来ない。唯信の一念に攝取不捨の光益に預り、横に四流を斷ちて、當來には必ず大涅槃を證るべき位に定つたといふ丈である。門戸を開くべき鑰は握られたけれども、未だその門戸は開かれてはないのである。正しく淨土の門戸が開かれてその中に



悟入した所が第十一願の眼目である。之を『論註』の果の五功德門に配すれば、正定聚は近門、大會衆門に當るのである。

二、かやうに正定と滅度は此世と淨土の二益であることは、諸聖教に明示する所である。『執持鈔』初丁に

眞實信心の行人は攝取不捨のゆへに正定聚に住す。正定聚に住するが故に必ず滅度にいたる。

又『御文章』(『御文』)二ノ四通には、

問うていはく、正定と滅度とは、一益とこゝろうべきか、また二益とこゝろうべきや。

答へていはく、一念發起のかたは正定聚なり。これは穢土の益なり。つきに滅度は淨土にてうべき益にてあるなりとこゝろうべきなり。されば二益なりとおもふべきものなり。

又『御一代聞書』十丁に、

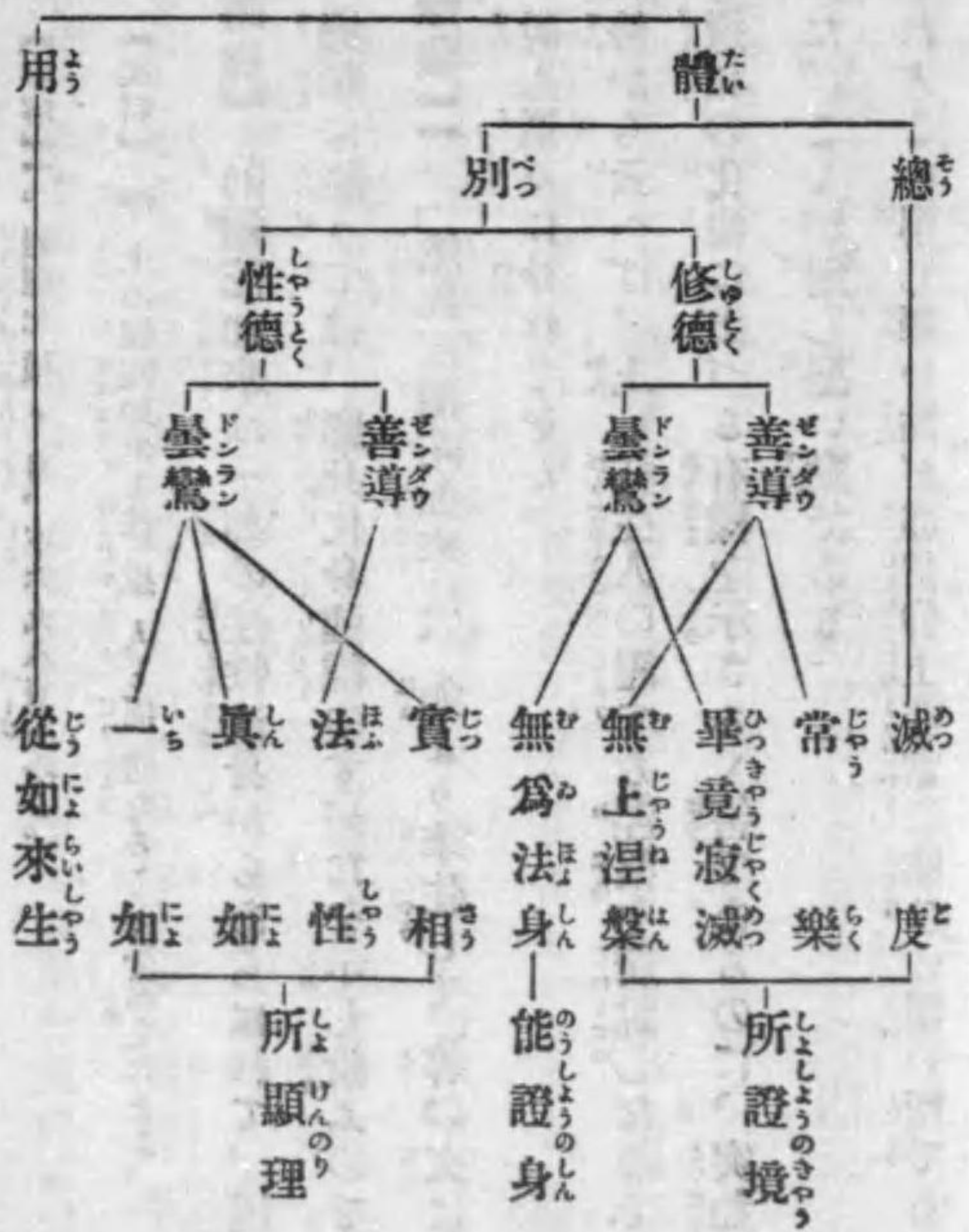
正定聚のかたは、御たすけありたるとよろこぶころ、滅度のさとりのかたは、御たすけあらうすることのありがたさよとまふすころなり。いづれも佛になることをよろこぶころよと仰せさふらふなり。

かやうに正定聚と滅度とはこの世と淨土の二益であることは明かである。そして是が又他力宗教の妙味のある所である。信の一念に迷妄の業因を断ちて不退位に入り、必ず滅度に至る身となるけれども、吾等の終局の理想たる大涅槃、如來の大悲の至極たる法性の證りは、之を當來に俟たねばならぬ。こゝに無限の希望が湧くのである。眞實の目的地は正しく之に向けられたる第一歩に依りて定まる。即ち眞實の希望は、眞實の信に根ざしてゐるのである。證卷の正しく明す所は、その信心の證果たる大般涅槃である。

三。滅度の異名は、そのまゝ滅度の内容を表現してゐるのである。「略本」には此八名の外に利他教化地果と畢竟平等身の二名を添ふ、「一多證文」廿丁には

一實眞如とまうすは無上涅槃なり無上涅槃すなはち法性なり。法性すなはち如來なり。とあり。「唯信文意」十七丁にも此滅度の異名をあぐ。今試に此八名を先輩の指導によりて圖示すれば、

滅度の異名



此中修德とは修行によりて得たる後天的の功德、性德は本來固有の先天的の徳である。所證、能證、所顯と分てど、此三が全く絶對の一に圓融して無礙なることは云ふまでもない。そして是等は一括して體であるとするれば、次の「從如來生」は如來の活動であるから用である。

第四項 主伴同證

然者彌陀如來從_レ如來生示現報應化種種身也

【讀方】 しかれば彌陀如來は如より來生して、報應化種々の身を示現したまふなり。

【字解】 一。報應化種々身、下六九八頁をみよ。

【文科】 淨土の彌陀如來と往生人と同證なることを示したまふ。

【講義】 阿彌陀如來は一如の法性法身からあらはれて、因行に酬いては報身を現じ、衆生の機類に隨うては、應化身種種のすがたを示し給ふのである。

【餘義】 一。「然れば彌陀如來は、如より來生して」等の文は解し難い文である。從つて先輩の説も區々に分れてをる。

文勢から云へば、上に往生人の證する涅槃を廣説したのであるから、此は其涅槃の果徳から還相の化他に出づる有様を示さるゝ筈であるのに、突如として、彌陀如來の顯現を説かれた。こゝが解し難い點である。

されどこの解し難い點が亦信仰上非常に味の深い所である。即ち上には吾等の證るべ

從如來
生の文

き絶對の證果を説いて、是が一如法界である、法性眞如であると、無邊無限の涅槃界を示し、直ちに是を承けて、その眞如法性から吾等の救済主たる彌陀如來が顯現せられたことを明かされたのである。即ち吾等に對しては往生の一念にいろもかたちもなき一如法界の眞身に悟入して、彌陀同體の證りを聞くことを示し、彌陀如來に關しては、その一如法界から罪濁の吾等を救ひ給ふ報身佛と顯はれたといふことを顯示したのである。素よりこゝの一段も文章が極めて簡淨であるから、味ひ方によりては、還相廻向を明すとも、吾等をして法性の理を悟らしめんとする如來の御心を示すとも、いろ／＼に考へられることであるが、大體に於いて此所は眞實證を顯はす主文であるから、どこまでも此立場を離れてはならぬと思ふ、この意味に於いて『樹心録』の主伴の所證平等を明す文と解することが尤も妥當の説であると思ふ。この見解に立ちて類文を見れば、一層明となる。

『一多證文』廿丁に

一實眞如とまうすは、無上涅槃なり乃至この一如寶海よりかたちをあらはして、法藏菩薩となりのりたまひて、無礙のちかひをおこしたまふをたねとして阿彌陀佛となりたまふがゆへに、報身如來とまうすなり。乃至

この如來を方便法身とはまうすなり。方便とまうすは、かたちをあらはし、御名をしめして、衆生にしらしめたまふをまうすなり。(『唯信文意』十七丁以下参照) 阿彌陀佛の眞身を説くは次の『眞卷』であるが、こゝは唯一如法界より顯現し給ふ方面を示すの意である。

『和讃』に

無明の太夜をあはれみて

法身の光輪きはもなく

無礙光佛としめしてぞ

安養界に影現する。

とあるは是である。この法身とは方便法身である。同一阿彌陀如來を、因願に酬報せられた方面から報身佛と名け、法性より顯現せられた方面から方便法身と名け奉るのである。云はゞ一枚の紙の裏表のやうなもので離すことは出来ぬ。今は主伴同證を示す所であるから、法性顯現の方面を説いて「從如來生」云々と云はれたのである。上の『二多證文』の文は能く之を明かにしてある。

二。「從如」の如は『論註』二法身の中、法性法身「報」とは方便法身である。即ち光壽無量の阿彌陀佛である。「應化種々身」とは『唯信文意』十八丁に

この報身より應化等の無量無數の身をあらはして、微塵世界に無礙の智慧をはなたしめたまふゆへに、盡十方無礙光佛とまうす。

にて明かである。衆生濟度の爲めに機縁に應じて限りなく現はしたまふ身を應化身といふ『正信偈』の「生死に圓の入りて應化を示す」といふは是れである。

第三節 經文證

【大意】 上にて釋義を了つたから、これより下は例の如く經文を引いて上の義を證したまふ。第一項は本願文第二項は成就の文である。各項に「大經」と「如來會」を引きたまふ。

第一項 本願文

第一科 『大無量壽經』の文

必至滅度、願文大經言、設我得佛、國中、人、天、不、住、定、聚、必、至、滅、度、者、不、取、正、覺、已

【讀方】 必至滅度の願文、大經にのたまはく、設われ佛をえたらんに、國の中の人天、定聚に住し、かならず滅度にいたらずば正覺をとらじ。已上

【文科】『大經』第十一願文を引いて眞實證を證明したまふ一段。

【講義】必至滅度の願、即ち『大無量壽經』の第十一願に言はく、若し我れ佛となるであらう時に、國の中の人天、現生に正定聚の位に入り、命終り次第必ず大涅槃の佛果を得ぬやうなことがあらば、正覺は取らない。

【餘義】一。願文中、住定聚を現益とせられしにつき、文章の意義を通ずるには、次上の「國中人天」を娑婆世界の人とせねばならぬ。さうでなければ、文面上には、住定聚も當益とせねばならぬこととなる。これが爲めに随分詭辯を弄して、強いて「國中」を娑婆國土であると斷定した人もあるが、夫はどうしても無理である。

然るに存覺師は次上の『六要』に、經文の顯正(文の表面)から云へば、正定聚は往生後の益、隱傍に依れば、現生の益であると云はれ、又西派の道隱師は『略讚』に日珠師は『對問記』に、各之を承けて、密益から云へば現生不退、顯益から云へば彼土不退であつて、滅度と一體である。畢竟一涅槃中の示現の相違であつて、體は一つであるというてをられる。然るに東派の皆往院師は、之に反し、飽くまでも正定聚は現益である、と主張せられた。即ち蓮師が「御一代開書」八十一丁に「不退の密益」と仰せられたのは、往生の定つた約

「國中
天」の
解

正定聚の
顯益の
論

束を指すので、淨土の顯益に對して云はれたのではない。正定滅度一體説は、畢竟一益法門に陥つたものであるといふ。

以上の二説は大なる相違があるのでない。道隱師の説も敢て正定聚の當益を主張せられたのではなく、現生の密益とは、云は、可能性若くは潛勢力の意味で、之が淨土に顯勢力となつて開發する所が正定聚滅度の一體である。又他方面から云へば、この潛勢力たる正定聚は、やがて開發すべき滅度を孕んでをるから一體とも云へると云ふたまでに過ぎないのである。殊に『六要』の「正定聚に隱顯傍正あり」についての見解なども極めて巧妙である。即ちこの正定聚は、第十八願にありては、信の一念に正定聚の位に入るのであるから密益(現)の正定聚は正、顯益(當)の正定聚は傍。次に第十一願にありては、滅度が主であるから、密益の正定聚は傍、顯益の正定聚は正といふ。



願文を解釋する點から云へば、一種の見解と云はねばならぬ。

二。されど我聖人は、強ちに文面の通解を主せられなかつた。唯平生業成の信仰上の見地からこの願文の住定聚を信の一念同時の現益と味はれたのである。さてこの見地に立ちて諸經論を讀まれた。そして殊に明白に現生正定聚を見られたのは、龍樹の『易行品』の文「即時入必定」等の文である。かくて天馬の空を驅くるが如く、現生正定聚を唱へられたのである。存覺師の『六要』の釋は、他宗對抗の釋が多いから、常に一段下りてゐることに留意せねばならぬ。唯祖意を失はずに他宗を誘引せられた努力を謝するばかりである。

第二科 『無量壽如來會』の文

無量壽如來會言若我成佛國中、有情若不決定成等正覺證大涅槃者、不取菩提。上

【讀方】 無量壽如來會にのたまはくもしわれ成佛せんに、國のうちの有情、もし決定して等正覺なり、大涅槃を證せずば、菩提をとらじ。已上

【文科】 異譯の文を引いて、上出の正依の經文を助顯したまふ。

【講義】 『無量壽如來會』に言はく。もし我れ、成佛した時に、國の中の生あるものが、必ず、等正覺不退の位に入り、大涅槃の佛果を開き得ないやうなことがあれば、菩提を取らない。

【餘義】 一。こゝに云ふ等正覺は一生補處である。即ち正定聚である。『末燈鈔』十丁信心をえたる人は、かならず正定聚のくらゐに住するがゆへに等正覺の位と申すなり大無量壽經には攝取不捨の利益にさだまるものを、正定聚となづけ、無量壽如來會には、等正覺とよきたまへり。云々

かやうに我聖人が、信心を獲たる位を、正定聚といひ、一生補處といひ、又は初歡喜地、等正覺といはるゝは、何れも是等の言葉に寄顯して、再び流轉することなき信心の位を示されたもので、常並の意義をもつて、解すべきものではない。因に等正覺等について新舊兩譯の差を示せば





今は新譯によりて、等正覺を一生補處とし、彌勒の位とし、そして之を信心を獲たる位であるとせられたのである。

第二項 成就文

第一科 『大無量壽經』の文

願成就文經言其有衆生二彼國者皆悉往於正定之聚所以者何彼佛國中無諸邪聚及不定聚

【讀方】願成就の文、經にのたまはく、それ衆生ありてかの國に生ずるものは、みなことごとく正定の聚に住す、ゆへはいかん、かの佛國のうちには、もろく邪聚および不定聚なければなり。

【字解】一。正定聚 正しく佛となるべき身に定められたる機類。第十八願の他力念佛の機。眞報土に往生す。(七〇七頁を見よ)

二。邪聚 邪定聚。如來の本願でない自力の諸善を以つて、淨土へ生れんとする機類。第十九願

の要門の機、正定に對して邪定といふ。往生の土は化土。(同上)

三。不定聚 正定聚と邪定聚の中間にありて、自力念佛を勵み、淨土に生れんとする機類。自力、半他力である。故に不定聚といふ。第廿願眞門念佛の機。(同上)

【文科】『大經』第十一願成就文を引いて眞實證をしめしたまふ一段。

【講義】『大無量壽經』の第十一願成就の文に言はく、もし衆生あつて、彼の安樂國に生れやうとするものは、皆悉く正定聚の位に入つたものでなければならぬ。何故かなれば、彼の安樂淨土には、諸の邪定聚や不定聚のものは生るゝことが出来ぬからである。

【餘義】一。此引文は第十一願の中、現生正定聚の成就の文として引用せられた。『一多證文』五丁

それ衆生ありて、かのくにうまれんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。

と訓まれてあるによりて知らる。かくの如くこの文は正定聚の成就であつて、滅度が略されてあるから、次の文を引いて滅度の成就を明す。故にこの二文合して十一願成就の文となるのである。

二。さて聖人が此文を現生正定聚とせられたに就いては、元より信仰上の實驗より味はれたることは無論であるが、亦有力な根據があるのである。それは下に引用せられた『如来會』の文である。かしこには「當に淨土に生れむとする者」の中、邪定聚、不定聚の人々は、彼の往生の因たる名號の謂れを了知することが出来ない。即ち正定聚の人のみが往生成佛すると云ふことを示して居る。あの文を以つて、此文を讀めば、「生彼國者」は「若當生者」に當ると明かである。即ち「彼國に生まれんとするものは皆な悉く正定聚に住すと」訓まれたのである。従つて「所以者何」等の文は、淨土には邪定聚、不定聚の人は生れることはないといふ意味となる。『和讃』に

安樂國をねがふひと 正定聚にこそ住すなれ
 邪定不定聚くになし 諸佛讚嘆したまへり。

とあるは此意である。かくて異譯助顯の功果は鮮かである。

然るに一説には、正定滅度一體の立場から此文を當益にとり、正定聚の中に滅度を含んでゐるといふは、文字に拘泥して祖意を失うた説と云はねばならぬ。此文に滅度をあげないから、次の二文に滅度の成就をあげてある。文證歴然として諍うの餘地はないのである。

である。

二。因に三定聚に就いて略述すれば、此下の『六要』に廣く常並の意味に於ける三定聚を擧ぐ。

- (一) 『俱舍論』卷十、十八丁の説
 - 四果の聖者……………正定聚
 - 五逆の罪人……………邪定聚
 - 其他の凡夫……………不定聚
- (二) 『釋摩訶衍論』第一に三説をあぐ。
 - 第一説
 - 十信位以下の凡夫……………邪定聚（業報を信せざる故に）
 - 三賢十聖……………正定聚（不退位なる故に）
 - 十信……………不定聚（進退未決の故に）
 - 第二説
 - 十信以下並に十信……………邪定聚（皆な無根の故に）

大覺果……………正定聚（已に満足の故に）
 三賢十聖……………不定聚（皆な未究竟の故に）

第三説

十信以下……………邪定聚（樂求心なき故に）
 十聖……………正定聚（已に眞證を得る故に）
 十信、三賢……………不定聚（未だ正證を得ざる故に）

斯の如く三定聚は「俱舍論」等にて、自力修道者の修行の階級に名けたものである。即ち惡道に墮落せざる位に正定聚、必ず退墮する位が邪定聚、その中間にありて進退定まらざる位が不定聚である。

然るに聖人は大體に是等の意味を含めながら、此三定聚を特殊の意義に須みられた。

正定聚……………本願名號を信受したる人。第十八願の機類。（上五六頁參照）

不定聚……………名號の謂れを聞信せず、稱ふる名號を己が善根として淨土に廻向する人（『化卷』第九、所引『如來會』文參照）半自力半他力。第廿願

眞門の機類。

邪定聚……………自の善根功徳を廻向して、他力の信を生ずることが出来ない人（『化

卷』第八、所引『如來會』の文參照）第十九願、要門の機類。

即ち三定聚は、全く現世に於ける本願所被の機類となつた。かくて支那の淨土經の註釋家が、經文に拘泥りて正定聚を淨土の土徳としての不退とせるに反して、信の一念に獲る所の現生不退となし、そして第十九、廿の邪定、不定聚の機も、遂にはこの第十八願の正定聚に轉入することを示された。（『化卷』第九、三十四丁左以下參照。）

又言、彼佛國土清淨安穩微妙快樂次於無爲泥洹之道其諸聲聞菩薩天人智慧高明神通洞達咸同一類形無異狀但因願餘方故有二人天之名顏貌端正超世希有容色微妙非天非人皆受自然虛無之身無極之體

【讀方】又のたまはく、かの佛國土は清淨安穩にして、微妙快樂なり。無爲泥洹の道にちかし。そのものもろの聲聞、菩薩、天人、智慧高明にして神通あきらかに達せり。ことごとくおなじく一類にして、形に異なる狀なし。たゞし餘方に因願するがゆへに、人天の名あり。顏貌端正にして世にこえて希有なり。容色微妙にして、天にあらす人にあらす、みな自然虛無の身、無極の體をうけたるなり。

【字解】一。無爲泥洹。無爲涅槃のこと。無爲は本來法爾の眞如。故に無爲泥洹とは、眞如法性の證りな

いふ、「涅槃」は上六八四頁を看よ。
二。自然虛無之身。自然は、凡夫の智慮を絶した、無爲常住のこと。虛無は、色も形もなきこと。即ち法性法身を指す

三。無極之體。一切に遍滿せる法身佛の體のこと。

【文科】引ついで第十一願成就の文を引用したまふ一段。

【講義】彼の安樂淨土は、清らかにして安らかに、微妙くして快樂に満ちて居る。固より彌陀如來の因願に酬い現はれた御淨土であるから、空寂無相のものではなく、相形のあ

る御淨土ではあるが、而もその常住不變の有様は、無爲涅槃の道理に離れぬ寂靜なものである。その淨土の聲聞、菩薩、天人の智慧は高く明かで、神通は自由自在である。そして姿形はみな同じで、大小美醜の差別はない。たゞ他の世界にならうて、天人とか人間とかいふ名稱だけを用ゐて居る。顔貌の正しいこと、この世に比べるものもなく、容色の妙なるさまは、天界にも人界にも見出すことは出来ぬ、みな無爲涅槃の理にかなつた自然虛無の身、無極の體を受けて居る。

【餘義】一。本文は第十一願の眼目たる滅度を説いた文として引用せらる。初めより「泥

法性に即せる依正

洹之道」までは依報莊嚴の殊勝なることを明す。「次し」は親近の意にて「相離れぬ」こと。即ち淨土の宮殿、園林等の客觀世界が、無爲法性の妙理と離れぬといふことである。

『和讃』に

寶林寶樹微妙音

自然清和の伎樂にて

哀婉雅亮すぐれたり

清淨樂を歸命せよ。

七寶樹林くにみつ

光耀たがひにかやけり

華葉枝葉またおなじ

本願功德聚を歸命せよ。

等、依報の微妙安穩なることを、心ゆくばかりに讃詠せられたのは、是法性に即した淨土の依報莊嚴を嘆美せられたのである。

「其諸聲聞」等以下は正報莊嚴を説く、淨土の無量の眷族は、智慧明かにして神通自在である。『和讃』に

安樂聲聞菩薩衆

人天智慧はがらかに

身相莊嚴みなおなじ

他力に順じて名をつらぬ。

顔容端正たぐひなし

精微妙軀非人天

虛無之身無極體

平等力を歸命せよ。

等是である。無限廣遠の土、超勝無二の眷族、あらゆる美と善と、功德と神秘の圓融せる畢竟の大涅槃界である。如來の至極の慈悲の發現せる所、吾等が百川の海に注ぐやうに遂に至りつく大理想世界である。そして此理想世界は現實にその係を宿し、現實の世界は、神秘の波をうたせて、かの樂土と共鳴する。良に藝術と哲學と宗教と道德の融會せる大樂土である。

第二科 『無量壽如來會』の文

又言、彼國、衆生若當生者皆悉究竟無上菩提、到涅槃處、何以故、若邪定聚及不定聚不能了知、建立彼因、故抄已上。

【讀方】 またのたまはく、かの國の衆生、もし當に生んもの、みなことごとく無上菩提を究竟し、涅槃のところにいたらしめん、何をもつての故に、もし邪定聚および不定聚は、かの因を建立せることを了知するにあはざるがゆへなり。已上要抄す。

【文科】 異譯の文を引いて上出の正依の經文を助顯したまふ。

【講義】 『無量壽如來會』に言はく。彼の淨土の衆生も、娑婆の正定聚に住して居る衆生も、皆必ず、この上ない菩提を得、大涅槃の極果にいたるのである。何故かなれば、娑婆に於ける邪定聚のものや、不定聚のものは、彼の無上菩提の因たる大信大行を建立する譯合を知らないから彼の國へ生れることが出来ないのである。

【餘義】 この文をよみて、更に上七〇六頁にいづる此文の意味に關する説をよんでいた

第四節 釋文證

【大意】 上に經文を引きをいつたから、これより下は釋文を引用したまふ。第一項は曇鸞大師の五文。第二項は道綽禪師の一文。第三項は善導大師の二文である。

第一項 曇鸞大師の釋文

第一科 妙聲功德の文

淨土論曰莊嚴妙聲功德成就者、偈言、梵聲悟深遠、微妙聞十方、

故此云何不思議經言若人但聞彼國土清淨安樂剋念願生亦得往生即入正定聚此是國土名字爲佛事安可思議

【讀方】淨土論にいばく、莊嚴妙聲功德成就といふは、(一)梵聲 悟深遠、微妙聞十方といへるがゆへに、これいざぞ不思議なるや。經にのたまはく、もし人たゞかの國土の清淨安樂なるをきいて、莊念して生ぜん願ぜんものと、また往生をうるものは、すなはち正定聚に在る。これはこれ國土の名字佛事をなす、いづくんぞ思議すべきや。

【字解】一。「淨土論」天親菩薩造、五言九十六句をもつて極樂を讚詠し、長行をとつて其意義を論ず。北魏永安二年、菩提留支の譯。

二。偈文。梵語ガートハ (Gāthā) 頌と譯す。詩句をもつて佛徳を讚嘆し、又は教理を述べたるもの。

三。梵聲。梵は清淨の義。清淨なる聲のこと。即ち如來の御聲をさす。

四。剋念。剋念のこと。信心の相である。心を專注すること。

【文科】「論註」五文の中、初めに妙聲功德の文である。

【講義】『淨土論』に曰はく、莊嚴妙聲功德成就といふは、偈文には、極樂淨土の清らかなる御名に深遠なる意味合があつて、微妙じくも十方に聞え、きくものをして信心を得せしめ給ふというである。このとは何故に不思議といはれたのであるか。

經には、このことを、若し衆生あつて、五念門の行をつとむることは難かしくとも但、彼の安樂淨土の清らかにして安樂なるをき、信心をいたゞいて生れたいと願ふものと、又既に彼の國へ往生して居るものとは、共に正定聚不退の位に入るといふである。これに依つて見れば、安樂淨土の御名が、衆生を利益濟度し、正定聚に入れしめ給ふのである。されば、まことに思ひ議ることの出来ぬことではないか。

【餘義】一。是より以下「論註」によりて五文を引く。「論註」の文なれど「淨土論曰」と仰せらるゝは、「論註」は「淨土論」の眞意を得てあるから註を本論と同じに見給ふ我聖人の常の格式である。五文の中初文は正定聚を明し、後の四文は滅度を示す、即ち十一願の願事に應るのである。

である。「尅念願生」等の文は、『一多證文』七丁に釋あり。

この文のこゝろは、もしひと、ひとへにかのくにの清淨安樂なるをきゝて、尅念してむまれんとねがふひと、またすでに往生をえたるひとすなはち正定聚といふなり。

この釋によりて見れば、往生せんとする人と、往生した人が正定聚に住すといふ意である、常の解釋から云へば、「尅念して生せん」と願すれば、亦往生を得て、即ち正定聚に入る」と當益丈を明したことになるのであるが。聖人は上のやうに訓點を施して、現當の正定聚とせられた。この當益の正定聚は軽い意味で、尅念願生の一念に正定聚に住することが今の主要であることは云ふ迄もない。「尅念」は上の『一多證文』には「えてといふ」と左訓してある。即ち信心獲得の相をいふ。尅は克である。「己に克つ」の克で、我妄心に克ちて、一心に彌陀をたのむことである。

「國土名字」等は、上の『一多證文』に「く」の名字をきくに、さだめて佛事をなす」とありて、聞信の一念に、無邊の聖徳自と身に備はりて、化他の活動をなすことが不可思議であるといふのである。

第二科 主功德の文

莊嚴主功德成就者偈言正覺阿彌陀法王善住持故此云何不思議正覺阿彌陀不可思議彼安樂淨土爲正覺阿彌陀善力住持云何可得思議耶住名不異不滅持名不散不失如以三不朽藥塗種子在水不爛在火不燒得因緣即生上何以故不朽藥力故若人一生安樂淨土後時意願下生三界教化衆生捨淨土命隨願得生雖生三界雜生水火中無上菩提種子畢竟不朽何以故以還正覺阿彌陀善住持故

【讀方】莊嚴主功德成就といふは、偈に正覺阿彌陀法王善住持といへるがゆへに。これいかんぞ不思議なるや、正覺の阿彌陀不可思議にまします。かの安樂淨土は、正覺阿彌陀の善力のために住持せられたり。いかに思議することなすべきや。住は不異不滅になづく、持は不散不失になづく、不朽藥をして種子にぬりて、水におくに爛れず、火におくに焼れず、因緣をえてすなはち生ずるがごとし。何をもつての故に、不朽藥の力なるがゆへなり。もし人ひとたび安樂淨土に生ずれば後の時に意に三界にうまれて、衆生を教化せんと願じ

て、淨土の命をすて、願にしたがひて生をえて、三界雜生の火の中にうまるといへども、無上菩提の種子、畢竟してくちす。何を以のゆへに、正覺阿彌陀の善住持を運るをもてのゆへに。

【文科】 第二主功德の文を引いて、如來の住持力をのべたまふ一段である。

【講義】 莊嚴主功德成就といふは、偈文には、正覺果上の阿彌陀如來に善く住持せられて居るというてある。これが何故に不思議といはれるのかといふに、御さとりを開き給ふた阿彌陀如來はまことに思ひ及ぶことも議することも出来ぬ方であつて、あの安樂淨土は、この阿彌陀如來の御力に依つて住持せられて居るのであるから、どうして思ひ議ることが出来やうぞ。住持の住は異なる、滅びないこと、持はしつかと持ちて散失せしめないことである。丁度不朽藥を木の實に塗つて置けば水の中に入れても朽ちず、火の中へ入れても焼けず、春になつて、雨露水上の因縁があれば、芽を吹き出して來るやうに、もし衆生あつて、一度、御淨土へ生れた後に、自分の願ひで、再び迷の三界へ顯れて縁ある衆生を濟度したいと思ふ時には、その願の通り淨土を離れて三界に生れることは出来るが、いかに迷の三界四生の水火の中に生れても、一度いたゞいたこの上ない菩提の種子は、その水火に朽ちず焼けず、時あつて菩提の花を開くのである。何故かといへば、正覺果上の

阿彌陀如來の御力にしつかと住持せられてゐるからである。

【餘義】 一。吾等の淨土の證果は、阿彌陀佛の善く住持し給ふ所であるといふ此文によりて見れば、上の正定聚も、自と佛力住持たることが暗示せらる。本文は心ゆくばかり、彌陀如來の威神他力を表現はしてゐる。

第三科 眷屬功德の文

莊嚴眷屬功德成就者、偈言如來淨華衆正覺華化生、故此云何不思議。凡是雜生、世界若胎若卵若濕若化、眷屬若干、苦樂萬品、以雜業故、彼安樂國土、莫非是阿彌陀如來、正覺淨華之所化生。同一念佛、無別道、故遠通、夫四海之内、皆爲兄弟也。眷屬無賞焉。可思議。

【讀方】 莊嚴眷屬功德成就といふは、偈に如來淨華衆、正覺華化生といへるがゆへに。これいかんぞ不思議なるや。おほよその雜生の世界には、もしは胎、もしは卵、もしは濕、もしは化、眷屬そこばくなり。苦樂萬品なり。雜業をもてのゆへに。かの安樂國土はこれ阿彌陀如來、正覺淨華の化生する所に

あらざることなし。同一に念佛して別のみちなきがゆへに。となく通するに、それ四海のうちみな兄弟とするなり。眷屬無量なり。いつくんぞ思議すべきや。

【字解】一。萬品。千差萬別のこと。

【文科】眷屬功德の文によりて宗教的同胞の意義を示したまふ一段である。

【講義】莊嚴眷屬功德成就といふは、偈文には、かの御淨土の人々は、皆阿彌陀如來の正覺の華の中より化生し給ふのでそれで如來の淨華衆と呼ばれるというてある。これは何故に、不思議といはれるかといふに、この迷の三界には生れ方にもいろ／＼あつて、胎生あり卵生あり、濕生あり化生あり、それ／＼澤山の仲間があつて、苦惱、快樂いろ／＼品品ある。雑多の業因があるから、この雑多の果生を受けるのである。處が、彼の安樂淨土に於ては、阿彌陀如來の正覺の華から化生せぬものはないのである。もと／＼、すべて同じく彌陀の御名を稱へて、生れさせて貰ふので、外の道で往生するのではないから、因も平等なれば、果も亦平等なのである。十方世界、一樣に彌陀の淨土へ往生するものは、假令どんなに遠く離れて居つても、念佛の行者なれば、皆兄弟である。この兄弟眷屬は數限りもなく多いので、これらのことはどうして思ひ議ることが出來やうぞ。

【餘義】一。純一無雜の信念佛の一因によりて、同一化生をうることを示す。『和讃』に

安樂佛國にいたるには

無上寶珠の名號と

眞實信心一つにて

無別道故と、きたまふ。

が是である。大願清淨の報土は、自力雜行をもつては生れ難い。唯如來廻向の信念佛の一道丈にて餘の道はないといふのである。

この下の『六要』は、常に異りて往生即成佛の眞實義を述べ。

問ふ、極樂の中に、胎生化生の差別分明なり。何ぞ此の如く釋するや。

答、彼の胎生は即ち是れ化土、疑惑佛智の行者の生ずる所なり。此化生とは、即ち是れ報土、明信佛智の行者の生ずる所なり。今の釋最も眞實證を明すの要文たる歟。

とあり。即ちこゝにいふ化生とは他力信心の行者が、本願の一道によりて往生成佛するの謂ひである。

二、四海兄弟の文、宗教的同胞の眞實義を示す。如來廻向の同一念佛の行者は、四海を通じて皆な兄弟である。『御一代聞書』二十丁

一、仰に身をすて、おの／＼と同坐するをば、聖人のおほせに、四海の信心のひとほみ

な兄弟と仰せられたれば、われもその御ことばのごとくなり。云々

又「同」百一丁には、進んで

一、蓮如上人、願誓に對し仰せられ候。法敬と我とは兄弟よと仰せられ候。法敬申され候。是は冥加もなき御事と申され候。蓮如上人仰せられ候。信をえつれば、さきに生る者は兄、後に生るゝ者は弟よ、法敬とは兄弟よと仰せられ候。佛恩を同一にうれば、信心一致のうへは、四海みな兄弟といへり。

誠に實際について、此本文を味ひたる活きた解釋と云はねばならぬ。温い信仰的氣分が、身を包むやうに感ぜられる。同一信心の人々は、その生命の根を一つにした人である。如来の血を頼ちたる眞の兄弟である。

第四科 大義門功德の文

又言願往生者本則三三之品今無一二之殊亦如溜澗 食陵 一

味焉可思議

【讀方】 またいはく、往生を願ふもの、本はすなはち三三の品なれども、いまは一二の殊なし。また溜澗の

一味なるがごとし。いづくんぞ思議すべきや。

【字解】 一。溜澗 溜水、澗水の二河のこと。

【文科】 眞實報土に往生すれば皆な一味の證を開くことを示さるゝ文である。

【講義】 又曰はく、淨土へ往生したいと願ふものの中には、三々九品の機の差別はあれども、一度本願海に歸して、淨土へ往生して見れば、決して少しの差別もないのである。譬へば、溜水と澗水とは別れて居れば二つの川であるが、一つになつてみれば、全く一つ味に融け會ふやうなものである。このことはどうして思ひ議ることが出來やうぞ。

【餘義】 一。三三の品に就いては、『六要』に二義をあぐ。初義は、二乘、女人、諸根不具の三に各々名と體とあるにより、體三、名三となる。之を三三の品といふ。かやうに本は三三の差別があるが、同一念佛して往生すれば、大海に入る溜澗二河のやうに互に異なることとはないといふ意。二義は、九品の機類を指す。機に差別あれど、淨土に至れば一味平等である。又淨土に九品の差別あるは、化土の相であつて眞實報土ではないと云ふのである。

後義を取るべきである。『和讃』に

如來清淨本願の

無生の生なりければ

本則三々の品なれど

一二もかはることぞなき。

はこの意である。極樂は無生の生である。絶対の生である。そこに差別はない。機に九品の差あれども、同一念佛の道によりて、同一絶対の往生をうるのである。

第五科 清淨功德の文

又論曰、莊嚴清淨功德成就者、偈言、觀彼世界相勝過三界道、故此云何不思議有、凡夫人煩惱成就、亦得生彼淨土、三界繫業畢竟不牽、則是不斷煩惱、得涅槃分焉、可思議、已上

【讀方】また論にいはいく、莊嚴清淨功德成就といふは、偈に觀彼世界相勝過三界道といへるがゆへに、これいかんぞ不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの淨土に生ずることをうれば、三界の繫業、畢竟してひかす。すなはちこれ煩惱を斷せずして涅槃分をう。いづくんぞ思議すべけんや。已上要を抄す。

【字解】一。涅槃分 此處には分は分證の義ではなく、分齊の義。涅槃の分齊のこと。果上の分齊は、口筆に説くことは出來ぬ。故に今は不可説の涅槃の境界といふ意。

【文科】淨土の清淨なる土徳を示したまふ文である。

【講義】又『淨土論』に曰はく、莊嚴清淨功德成就といふは、偈文には、彼の極樂淨土のことを考へみると、全く有漏三界の迷妄の境界とはかけ離れて居るといふてある。これは何故に不思議といはれるのかといふに、あらゆる煩惱を一つも欠目なく具へて居る凡夫が、他力の信心を頂いて、彼の御淨土へ生れさしていたければ、迷の三界の惡業はいかに強くとも引き止めて置くことが出來ず、凡夫はそのまゝ、煩惱を一分斷せず、涅槃を證するのである。このことはどうして思ひ議ることが出來やうぞ。

【條義】一。此文は上の諸文を總括つてゐるから、態と本文の前後を顛倒して引用せらる。

「不斷煩惱得涅槃分」に就いて、聖人は當益として引用せられた。『二門偈』四丁「煩惱成就の凡夫人 煩惱を斷せずして涅槃を得、則ち斯れ安樂自然の徳なり。」

明に安樂淨土の徳としてある。又『尊號眞像銘文』末十五丁には「不斷煩惱得涅槃」といふは、煩惱具足せるわれら無上大涅槃にいたるなりとしるべし。等是である。この時の「分」は分齊の義にして、彼の果分不可説等の分である。

不斷煩惱得涅槃分

然るに覺如、存覺、蓮如三師は、之を現益に解してをられる。『改邪鈔』廿一丁に
しかれば凡夫不成の迷情に令諸衆生の佛智滿入して、不成の迷心を他力より成就し
て、願入彌陀界の往生の正業成ずるときを、能發一念喜愛心とも、不斷煩惱得涅槃
とも、正定聚之數とも聖人釋し給へり。

在覺上人の『淨土真要鈔』九丁に『正信偈』の「不斷煩惱得涅槃」の文を釋して
一念歡喜の信心をおこせば、煩惱を斷せざる具縛の凡夫ながらすなはち涅槃の分をう。
と云ひ、蓮如上人の『正信偈大意』十一丁

不思議の願力なるがゆへに、わが身には煩惱を斷せざれども、佛のかたよりはつゝに
涅槃にいたるべき分にさだめましますものなり。

等と、明に現生に涅槃分を獲ることとせられた。この時の分は分屬の義、涅槃の分といふ
ことである。併しかやうに文面上では相違してゐるやうであるが、信の一念に「横に五
趣八難の道を超え」といふ點から云へば、この文は、自と三師のやうに解せられるので
ある。少くとも、此説は祖意を發揮してゐると云うても差支へがないと思はれる。
終りに『六要』の當益説は、淨土の分證の意味で、例の如く誘引的の方便説に過ぎない。

第二項 道綽禪師の釋文

安樂集云然二佛神力應亦齊等但釋迦如來不申己能故顯
彼長欲使一切衆生莫不齊歸是故釋迦處處嘆歸須知此意
也是故曇鸞法師正意歸西故傍大經奉讚曰安樂聲聞菩薩衆
人天智慧咸洞達身相莊嚴無殊異但順他方故列名顏容端正
無可比精微妙軀非人天虛無之身無極體是故頂禮平等力已

【讀方】安樂集にいはいく、しかるに二佛の神力また齊等なるべし。たゞし釋迦如來、おのれが能を申すして、
故にかの長を顯したまふこと、一切衆生をして、ひとしく歸せざること莫らしめんと欲してなり。このゆ
へに釋迦處々に嘆歸せしめたまへり。須くこの意をなすべしとなり。このゆへに曇鸞法師の正意、西に歸す
るがゆへに、大經にそへて奉讚してはいはいく、安樂の聲聞菩薩衆、人天の智慧ことごとく洞達せり。身相莊嚴
殊異なし。たゞし他方に順するがゆへに名をつらぬ。顏容端正にして比すべきなし。精微妙軀にして人天に
あらず。虛無の身、无極の體なり。このゆへに、平等力を頂禮したてまつる。上巳

【文解】 『安樂集』道綽禪師者、上四九〇頁を看よ。

【文科】『安樂集』によりて西方淨土を讚美し往生を勧めたまふ文。

【講義】道綽禪師は『安樂集』にのたまふやう。釋迦如來と阿彌陀如來の果力の不思議に在すことは同じいことであらう。たゞ釋迦如來の御自分の御力を示し給はずして、阿彌陀如來の勝れ給ふことのみを説き給ふは、すべての衆生をして、一樣に、阿彌陀如來に歸命させたいからである。それであるから、釋迦如來は、經説のいたるところに、阿彌陀如來のことを稱説して、衆生をして歸命するやうにとす、め給ふた。この稱説する意味合を知れといふことである。それであるから、曇鸞大師も亦西方の彌陀如來に歸命し給ふものであるから、『大無量壽經』に依つて『讚阿彌陀佛偈』を作り左のやうに讚嘆なされた。安樂淨土の聲聞も、菩薩も、天人も人間も、みな智慧明かに神通に自在である。すがたかたちはみな一樣で、異なる處がないが、他の國々の模様に順うて暫らく人天等の差別の名を立て、置くだけである。顔貌は正しくして、比類すべきものなく、立派な相好の身體は人天の境界のものではない。自然虛無之身、無極の體を得て居るのである。それであるから私は、平等力の阿彌陀如來に歸命し奉る。

【餘義】一。道綽禪師の口を藉りて、曇鸞大師の正意を彰はす。『和讃』に

一切道俗もろともに 歸すべきところぞさらになき

安樂勸歸のこゝろざし 鸞師ひとりさだめたり。

の意である。こゝに二師の精神的一致を知ることが出来る。

第三項 善導大師の釋文

第一科『玄義分』の文

光明寺疏云言弘願者如大經說一切善惡凡夫得生者莫不乘阿彌陀佛大願業力爲増上緣也又佛密意弘深教門難曉三賢十聖弗測所闕況我信外輕毛敢知旨趣仰惟釋迦此方發遣彌陀即彼國來迎彼喚此遣豈容不去也唯可勸奉法畢命爲期捨此穢身即證彼法性之常樂

【讀方】光明寺の疏にいづく、弘願といふは大經の說のことし。一切善惡の凡夫、生ずることを得るは、みな阿彌陀佛の大願業力に乗じて、増上緣とせざるはなしとなり。また佛の密意弘深なれば、教門曉りがたし。三賢十聖と擧げて、窺ふところにあらず。いはんやわれ信外の輕毛なり。あへて旨趣をしらんや。仰

いでおもんみれば、釋迦は此方にして發遣し、彌陀はすなはち彼國より來迎す。かしこに喚びこゝに遣す。豈ゆかざるべけんや。たゞれんころに法につかへて、畢命を期としてこの穢身をすてい、すなはちかの法性の常樂を證すべし。

【字解】一。光明寺疏 光明寺は善導大師の居られし寺、こゝでは善導の『觀經疏』を指す。

二。三賢 三賢位。小乘にては、五停心觀位、別相念住位、總相念住位の聖者を指す。大乘にては、十住、十行、十廻向位の菩薩をいふ。共に自力修行に進む因位に於ける修道の三階次をいふ。

三。十聖 初地より十地までの菩薩をいふ。

四。信外輕毛 信は十信の位の事。即ち十信の位に入る事の出來ぬ常没の凡夫の事。凡夫は修行を退墮する事輕毛の風に飛ばざるやうであるからである。又一説には、十信の位は、十住の外であるから、十信の事を信外といふと。此説に依れば、輕毛のやうな賤しい取るに足らぬ十信位の凡夫を指す。

四。畢命 命をはるまで。一生涯の意。

【文科】『支義分』により、佛の増上縁によりて極樂へ生れることをとき、更に二尊の遺喚、常樂證のなべたまふ文である。

【講義】 光明寺の善導大師は『玄義分』に宣はく、弘願といふは、『大無量壽經』に説いてある教をいふのである、その教といふは、あらゆる凡夫が、淨土に往生するのは、皆阿

彌陀如來の大願のおはたらきを増上縁として、この願力によつて往生を得るのであるといふことである。

また、阿彌陀如來の御智慧は弘くして深く、從つて、これを説き給ふ釋迦如來の教説も甚深微妙にして、容易に曉り得るものではない。三賢の位の聖者も十聖の位の聖者も、影のぞきすら出來ないのである。況んや、私の様な十住位にも至らぬ外凡のつまらぬもので

は、どうしてその思召を知ることが出來やう。恐れ多いことではあるが、仰いて思へば、釋迦如來はこの娑婆より淨土へ參れよとおす、め下され、彌陀如來は、淨土の方からお迎へに出て下さるのである。向ふからは來いよと喚び此方からは行けよとす、めて下さるの

に、どうして御思召に従はずに居られやうぞ。たゞ一生懸命になつて、法の如くに奉行して、生命のある間つとめはげみ、この汚れた肉體を離れる時、極樂淨土の眞如法性のおさとり（常樂我淨の四徳を具へた）を開かしていたゞくのである。

第二科 『定善義』の文

又云、西方寂靜無爲、樂畢竟道遙離二有無、大悲熏心遊法界、分身

第二章 眞實證

七三一

利^{スル}物^ヲ等^ク無^ク殊^シ或^ハ現^レ神^通而^{シテ}說^キ法^ヲ或^ハ現^レ相^好入^ル無^ク餘^ニ變^現莊^嚴隨^テ意^ニ出^ツ群^生見^ル者^ハ罪^皆除^ク又^{シテ}讚^云歸^去來^魔鄉^不可^レ停^曠劫^來流^ニ轉^六道^盡皆^還到^處無^ク餘^樂唯^聞愁^歎聲^畢此^生平^後入^レ彼^{涅槃}城^上已

【讀方】またはいはく、四方寂靜無爲のみやこには、畢竟逍遙にして、有^レ無^レをばなれたり。大悲心に薰じて法界にあそぶ。分身して物を利すること、等^{しく}して殊ることなし。あるひは神通を現じてしかも法をとき、あるひは相好を現じて無餘にいる。變現の莊嚴、意にしたがひていづ。群生みろもの、罪なのぞこる。また讚じていはく、歸去來魔郷にはとまるべからず。曠劫よりこのかた六道に流轉して、ことごとくみなへたり。いたるところに餘の樂なし、たゞ愁歎のこゑをきく。この生平を畢て、後、かの涅槃の城にいたらん。上

【字解】一。逍遙 遊なる形容。

二。有見、無見の事。萬物の常住を固執するは有見。萬物の空無を固執するは無見。是等は、單に法の一面を見たる偏頗の邪見である。従つて、有無二見の言葉は、凡夫の一切の迷妄の見解を指す。

三。無餘 煩惱を餘す處なく斷じて、證りを開きたる事。即ち涅槃の事。

四。生平 今生一生成といふこと。

【文科】『定善義』によりて悠々たる四方願生の心情を披瀝したまふ一段である。

【講義】又『定善義』に宣ふやう。西方極樂淨土は、寂靜にして爲作造作をはなれた

無爲無漏の淨國である。第一義諦微妙の境界なれば、この上なく、際邊もなく、中道にして有無の二邊を離れて居る。この國に生るゝ衆生は、大慈悲を心に薰じ附けて、十方法界に遊び、一時に諸方に顯はれて、いろいろの身相を示し、衆生を利益濟度することがみな同じく、或は神通を示して法を説き、或は相好を現はして無餘涅槃に入るを見せ、思ひのまゝに、種々の莊嚴を變じ出して、衆生のこれを見のものをして罪惡を離れしむるのである。

又讀文に宣ふやう。いざいなん、娑婆世界、惡魔の栖家は長く停つて居る所ではない。私は、久遠劫の昔から、六道をめぐつて、何處として生れて見ない所はないが、何處でもたのしみのある所はない。行くところとして愁嘆の聲のみきこえない所はないのである。願くは、この一生を畢つた後には、彼の安樂淨土の涅槃の境界へ行きたいものである。

【餘義】一。是等の文に依りて、吾等は善導大師の悠々たる限りなき信徳に接することが出来。この種の文字は煩はしく法門の義理をもつて解剖すべきでない。吾等も自らの心中に躍動する生命の喜びを以つて始めて此文字と共鳴するのである。良に逍遙たる無爲

悠々たる
信界の光
景

涅槃界は、大師の如く痛烈に現實の魔境、現實の毒惡なる自我を味うた人でなければ、感知することが出来ない。深い悲みに接して、深い喜びを生む。吾等はこの文を讀むと、もに信卷の至誠心釋を併せ讀まねばならぬ。かくして始めて「歸去來魔境には停るべからず」等の心持ちに接することが出来るであらう。この暗黒の底より、迸り出でたる精神的實驗が、西方淨土の感念と憧憬である。この散文でない、流れるやうな讚詠の底に、大師の躍動せる信生命は、不久の音楽を奏でゝゐるのである。こゝに大師の圓かなる信念の表現がある。そして是が亦そのまゝ、我聖人の信仰の表現である。

第四章 結 釋

夫按眞宗教行信證者如來大悲廻向之利益故若因若果無有
 一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就因淨故果亦淨也
 應レ知

【讀方】それ眞宗の教行證を案すれば、如來大悲廻向の利益なり。かるがゆへにもしほ因、もしほ果、一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就したまへる所に非ざることをあることなし。因淨なるがゆへに果また淨なり。しるべし。

【文科】上來明し來つた教行信證の四法を結釋したまふ文である。

【講義】上來説き明し來つた淨土眞宗の教行信證は、これまでの處で充分知られた通り、阿彌陀如來の大悲心より衆生にさし向けて下さるゝ利益である。行と信との因も、大涅槃の證果も、何れ一つとして、阿彌陀如來の清らかな本願の御心からさし向けて成就して下されたものでないものはないのである。行信の因が清淨無漏であるから、淨土往生の證果も亦清淨無漏である。

第五章 還相廻向

【大意】是より以下還相廻向を明す。「教卷」初めに
 講んで淨土眞宗を按ずるに二種の回向あり。一には性相、二つには還相なり。
 と標してある。その還相をこゝに説示するのである。即ち「二」は上の文の「一に往相」に對するものである。
 元、廣本は教行信證の四法を大範疇として、その他の凡てはこの中に攝められたのであるから、「教卷」に
 掲げた還相は、證果の大用の意味の下に、この證卷が攝められたのである。故に本卷を主として云へば、
 上に廣く證果を明したから、是より以下第二に還相廻向を示すのである。されど廣本全體より見れば、還相
 廻向は、上述の如く、遠く教卷に派りて往相廻向に對するのである。
 第一節略題、第二節引文である。そして第三節總結文にて「證卷」は了るのである。

第一節 略顯

第一項 總標

二言還相廻向者則是利他教化地益也
 【讀方】二には還相廻向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。

【文科】還相廻向を總標したまふ一段。

【講義】「教卷」の始めに、淨土眞宗を按ずるに二種の回向あり、一には往相、二には還相と標し、これまでにてその往相廻向の四方を説示し畢つた。それでこれから還相廻向を表彰すであらう。

還相廻向といふは、淨土へ往生した衆生が、他の衆生を利益し教化する大用をいふのである。

第二項 還相廻向の出據

則是出於必至補處之願

【讀方】すなはちこれ必至補處の願よりいでたり。

【文科】還相廻向の出據を示したまふ一段。

【講義】この還相廻向は四十八願中の第二十二必至補處の願から願はれたのである。

第三項 願名

亦名、一生補處之願、亦可名、還相廻向之願也。

【讀方】 また一生補處の願となづく。また還相廻向の願となづくべきなり。

【字解】 一。一生補處 一生を過ぐれば、佛處を補ふべき等覺の位。

【文科】 還相廻向の願名をあげたまふ一段。

【講義】 またこの第二十二願は、一生補處の願ともなづけ、また還相廻向の願ともいはれて居るのである。

【餘義】 一。還相廻向を明すに當り、こゝに願名を標し、願文を掲ぐべき筈であるが、今は唯願名丈を列舉し、その願文は、次の『論註』に譲られた。

之は聖人の御考へのある所で、四法(教行信證)三願(第十七、第十八、第十一)の綱格によりて、既に本卷の初めに第十一願を標擧げてあるから、今こゝに第二十二願を標しては、この綱格を破り、思想上の混雜を惹き起す恐れがあるから、態と略されたのである。更に内容の方面から云へば、還相廻向は四法の綱格と相對立すべきものではなくして、此處には證果の大用として擧ぐるのであるから、勢ひ第十一願の下に隸屬せねばならぬ。故に願名を標せず、願文をあげないのである。

二。次に願名については、初めの二名は諸師の同意する所、後の還相廻向之願は聖人の命名に係る。そして又この三名は其儘第二十二願の内容を示すものである。即ち此願の願事は、一生補處と還相廻向の二つであるからである。

第二節 引文

【大意】 これより以下經論釋を引いて還相廻向を各方面より明したまふ。その中第一項の經文は、次の『論註』に引かれる願文に譲つて態と引用したまはず、第二項は論文、第三項は、起觀生信の文以下廣く『論註』の九文を引きたまふ。

第一項 經文

願註論故不出願文可披論註

【讀方】 註論にあらはれたり。かるがゆへに願文をいささず、註論をひらくべし。

【文科】 經文を引用すべき所、態と下の『論註』にゆづることを宣給ふ一段。

【講義】 この還相廻向の經文のことは、次下に引く『淨土論註』に願文を引いて説き明

してあるから、今は別に第二十二の願文を標擧げない。親しく次の『淨土論註』を披いて見るべしである。

第二項 論文

淨土論曰、出第五門者、以大慈悲、觀一切苦惱、衆生、示應化身、廻入生死、園煩惱、林中遊戲、神通、至教化地、以本願力、廻向、故名、出第五門、上巳

【讀方】淨土論にいはく、出の第五門は、大慈悲をもて一切苦惱の衆生を觀察して應化の身をしめす。生死の園、煩惱の林のなかに廻入して、神通に遊戯して、教化地にいたる本願力の廻向をもつてのゆへに、これを出の第五門となづく。上巳

【字解】一。應化身 三身の一。應身に同じ。報身佛が、衆生の機縁に應じて示し給へる佛身。

二。出第五門 果の五功德門中、最後の園林遊戯地門のこと。下七四二頁以下を看よ。

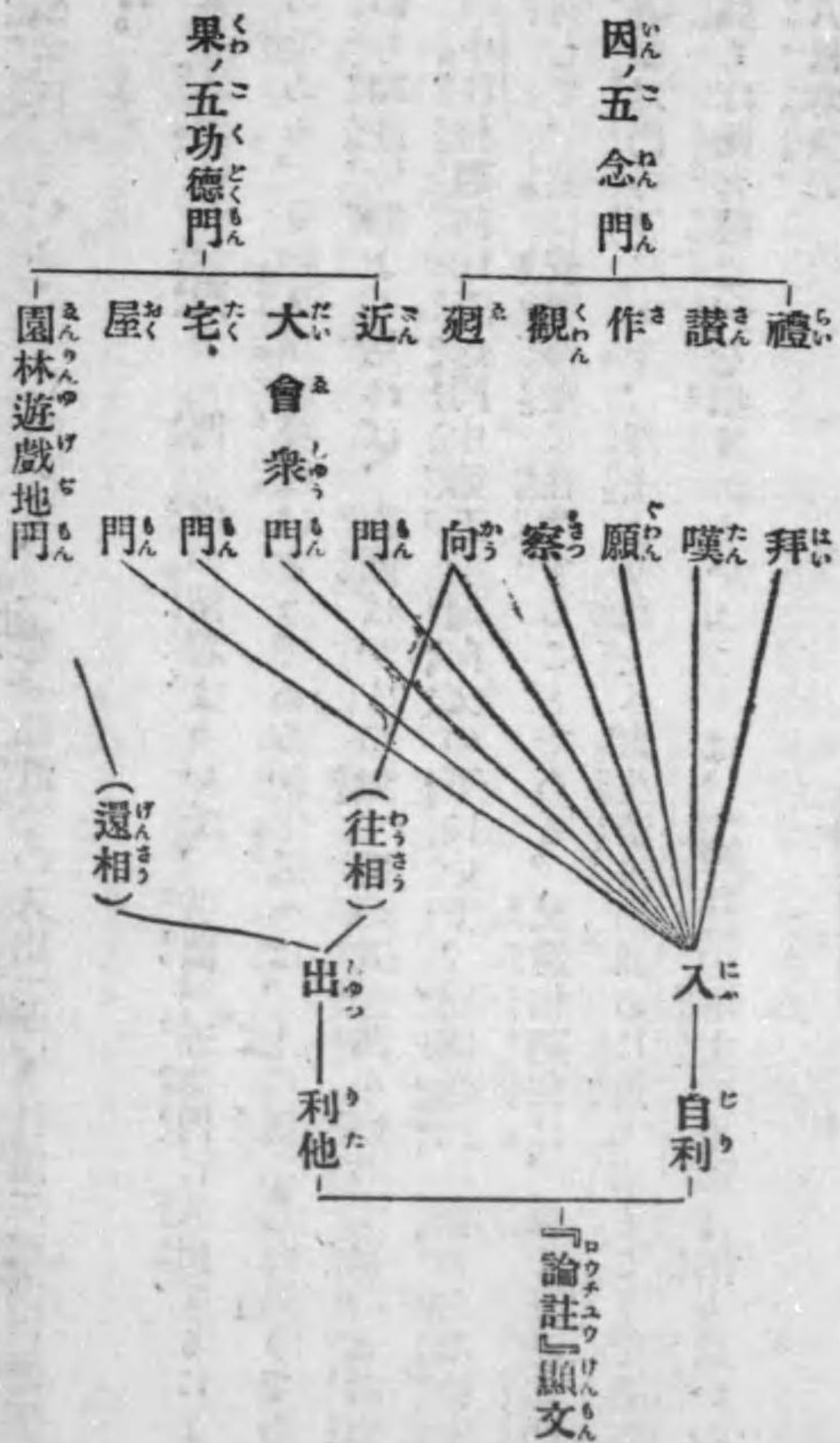
【文科】『淨土論』によりて、還相菩薩の大用を示したまふ一段。

【講義】『淨土論』に曰はく、入(自力)の前四門に對する、出(利他)の第五門、即ち園林遊戯地門といふは、極樂へ往生した菩薩が、大慈悲心を以て、迷界の苦しみ惱める衆生を

一の出入往還關係第

見て、機を勘み、種々の應化の身を顯はし、極樂より出で、生死の園、煩惱の林の中へわけ入り、神通を示し、種々の方便をめぐらして衆生を教化し給ふことをいふのである。そのはたらきは、もと彌陀如來の本願力より廻向して下されたので、この廻向に依つて、淨土を出で、衆生を化益するのであるから、出の第五門といふのである。

【餘義】一。



「出第五門」といふことについて、一應『論註』の出入二門と往還二廻向の關係を知らねばならぬ。

もと出入は五念門の「門」字の解釋よりいで、菩薩が五念門に入出するによりて門といふのである。その出入の模様はどうであるかと云へば、上に圖示した通りである。

即ち論註の顯より見れば、菩薩はかくの如く因の五念門を修めて果の五功德門を獲る。

この中往相廻向は五念門中第五の廻向文の下にいで、前四念門に修めた功德を一切衆生に廻向して、共に安樂淨土に往生することである。又還相廻向は、果の五功德門中第五の園林遊戯地門の下にいで、淨土より此土へ衆生濟度の爲めに還り來ることである。

然らば此菩薩は何を指すかといふことは、『論註』の本文の上には解り悪いのであるが、聖人は卷末の

然に要に其本を求むれば、阿彌陀如來を増上縁とするなり。乃至凡て是れ彼淨土に生ると、及び彼菩薩人天の起す所の諸行は、皆阿彌陀如來の本願力に縁るが故に、何を以て之を言はば、若し佛力に非らずんば四十八願便ち是れ徒に罷りたることとならむ。

等の文によりて、上の五念門の行を修めて五功德の果を獲たる菩薩は、實に彌陀の因位たる法藏菩薩にて在すと解せられ、かくて『出入二門偈』三丁には明に

無礙光佛因地の時、斯の弘誓を發し、此願を建つ、菩薩すでに智慧心を成じ乃至速に無上道を成就することを得、自利利他の功德を成す。則ち是を名けて入出門と爲すといは

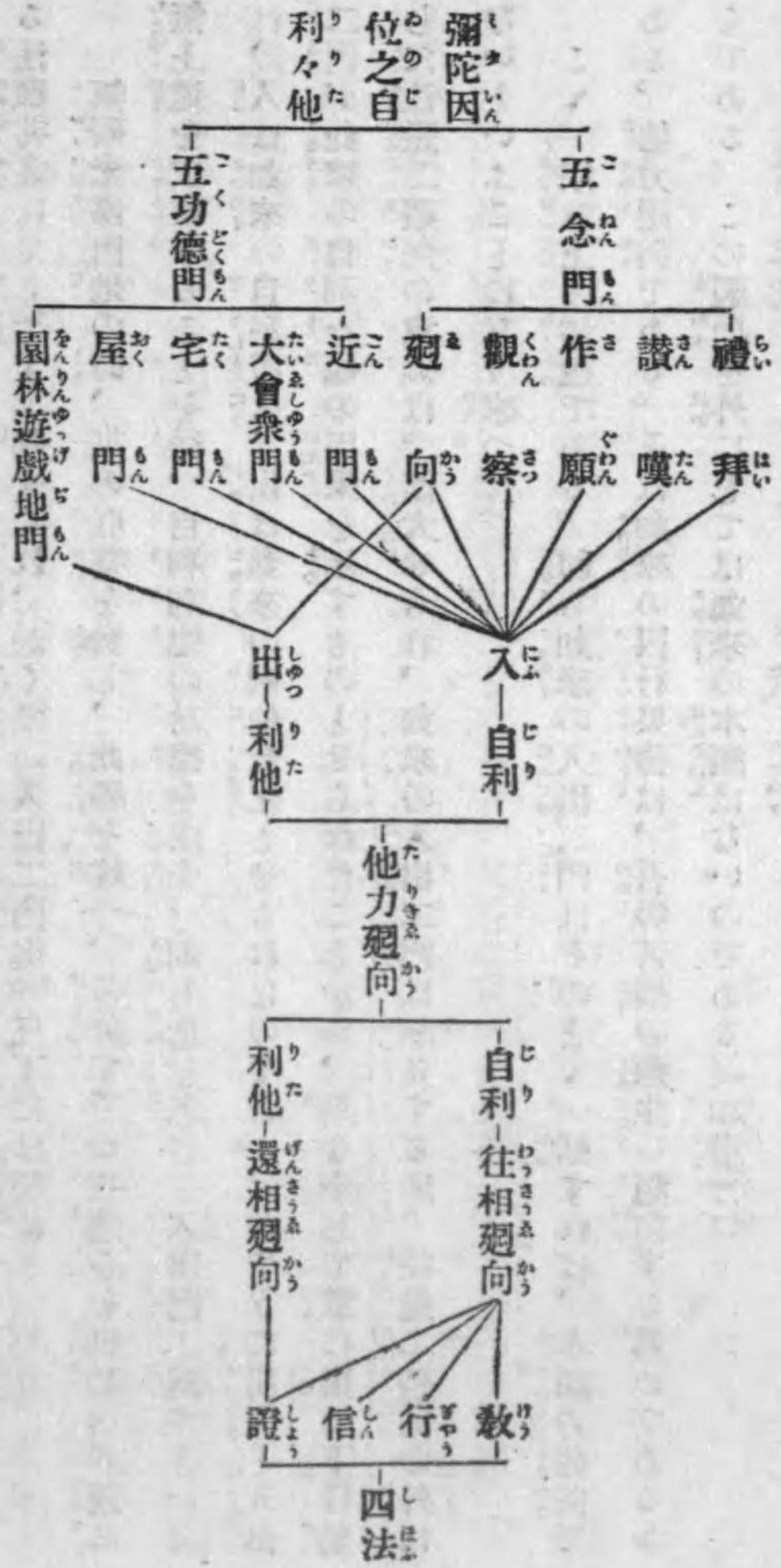
れ、入は如來の自利證入、出は如來の利他教化とせられたのである。かやうに明快と入出二門が如來の自利々他の因果を示すものとせられたことから、期せずして單に出の下に屬した往還二廻向の意義は、擴大せられ、如來の入出二門は畢竟する所、往還二廻向の外はないといふことになり來つた。

こゝが宗教上の妙趣である。即ち如來の入出二門はそのまゝ一括すれば、本願力廻向である。他力廻向である。そは如來の因行果徳は、吾等苦惱の衆生に廻向する爲めであるからである。この廻向を外にしては如來の本願はないのである。『和讃』に

如來の作願をたづぬれば 苦惱の有情をすてずして
廻向を主としたまひて 大悲心をば成就せり。

が是である。そしてこの廻向は云ふまでもなく往還二廻向である。こゝに於いてか初めに

法藏菩薩の成佛の歷程を示せし五念五功德の因果の一隅にありし二廻向は、今や如來の因果果徳全體を籠めたるものとなつたのである。そして是は必然のことである。この結果に立ちて試に入出他力、往還の關係を圖示すれば



斯の如く如來成道の因果歷程たる入出は、一括して他力廻向となり、その廻向を開いて

往還二種となし、更に細にその二廻向の内容を明かにし、吾等の上に親しく大悲廻向の功德を色味することを示したのが教行信證の四法である。即ち吾等の成道の因果である。かくて如來の因果功德は、そのまゝ吾等の因果功德となる如何にその大系の巧妙と剴切と善美を極むるよ。(第一卷二〇〇頁六六七頁以下参照)

二。上の如く入出二門は如來成佛の因果を示したものであるが、此處に「出第五門」の出は、上にいふ如く利他の替名にして、吾等衆生が、淨土の眞證から衆生濟度に出づる還相廻向のことである。即ち如來より與へられたる還相廻向が正しく實現する所である。この旨趣を明かにせん爲めに、次に「論註」の還相廻向の文を引かれたのである。

第三項 釋文

第一科 起觀生信の文

論註曰還相者生彼土已得奢摩他毘婆舍那方便力成就二廻入生死稠林教化一切衆生共向佛道若往若還皆爲拔衆生之波生死海是故言廻向爲首得成就大悲心故

【體方】論の註にはく、還相はかの土に生じをばりて、善摩他、毗婆舍那、方便力成就することを経て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、ともに佛道にむかはしむるなり。もしは往、もしは還、みな衆生をなきて、生死海をわたさんためなり。このゆへに廻向を首として、大悲心を成就することを得たまへるがゆへにと言へり。

【字解】一。善摩他 止。定のこと。上三五〇頁を看よ。

二。毗婆舍那 觀。觀察のこと。上三五〇頁を看よ。

三。生死稠林 三界生死の巷。上三五〇頁を看よ。

【文科】以下論註九文の中、第一に起、觀生信の文である。正しく還相菩薩の相を示す文である。

【講義】『淨土論註』に宣はく、還相廻向といふは、彼の極樂淨土へ往生してから、止觀の力と、善巧攝化の方便力とを成就して、再び、この生死苦惱の世界へ還り來り、あらゆる衆生を導いて、佛果菩提に向はしむることである。それでこの往相廻向といふも、還相廻向といふも、阿彌陀如來が迷悶の巷から衆生を救ひ出し、生死の大海を渡り越えしめ給ふために御與へ下されたものである。

であるから、『淨土論』に廻向を首として大悲心を成就することを待たまへりというのである。

第二科 觀行體相の文

又言、即見彼佛、未證淨心、菩薩畢竟得證平等法身、與淨心、菩薩與上地、諸菩薩畢竟同得寂滅平等、故平等法身者、八地已上、法性生身、菩薩也、寂滅平等者、即此法身、菩薩所證寂滅平等之法也、以得此寂滅平等法、故名爲平等法身、以平等法身、菩薩所得、故名爲寂滅平等法也、此菩薩得報生三昧、以三昧神力、能一念一時、徧十方世界、種種供養一切諸佛及諸佛大會衆海、能於無量世界、無佛法僧處、種種示現、種種教化、度脫一切衆生、常作佛事、初無往來、想供養、想度脫、想是故此身、名爲平等法身、此法、名爲寂滅平等法、未證淨心、菩薩者、初地已上、七地以還、諸菩薩也、此菩薩亦能現身若百若千若萬若億若百千萬億無佛國土、施作佛事、要須作心入三昧、乃能非不作心、以作心、故名爲未證淨心、此菩薩願生安樂淨土、即見阿彌陀佛、見阿彌陀佛、時與

上地諸菩薩畢竟身等法龍樹菩薩婆藪槃頭菩薩輩願生彼者當爲此耳

問曰按十地經菩薩進趣階級漸有無量功勳逕多劫數然後乃得此云何見阿彌陀佛時畢竟與上地諸菩薩身等法耶

答曰言畢竟者未言即等也畢竟不失此等故言等耳

問曰若不即等復何待言菩薩但登初地以漸增進自然當與佛等何假言與上地菩薩等

答曰菩薩於七地中得大寂滅上不見諸佛可求下不見衆生可度欲捨佛道證於實際爾時若不得十方諸佛神力加勸即便滅度與二乘無異菩薩若往生安樂見阿彌陀佛即無此難是故須言畢竟平等復次無量壽經中阿彌陀如來本願言

設我得佛他方佛土諸菩薩衆來生我國究竟必至一生補處除其本願自在所化爲衆生故被弘誓鎧積累德本度脫一切遊諸佛國修菩薩行供養十方諸佛如來開化恒沙無量衆生使立無

上正真之道超出常倫諸地之行現前修養普賢之德若不爾者不取正覺

按此經推彼國菩薩或可不從一地至一地言十地階次者是釋迦如來於閻浮提一應化道耳他方淨土何必如此五種不思議

中佛法最不可思議若言菩薩必從一地至一地無超越之理未敢詳也譬如樹名曰好堅是樹地生百歲乃具一日長高百丈

日日如此計百歲之長豈類脩松耶見松生長日不過寸聞彼好堅何能不疑即日有人開釋迦如來證羅漢於一聽制無生於終

朝謂是接誘之言非稱實之說聞此論事亦當不信夫非常之言不入常人之耳謂之不然亦其宜也

【讀方】またはいくすなはちかの佛をみてまつれば未證淨心の菩薩畢竟して平等法身を得證す淨心の菩薩と上地のものろくの菩薩と畢竟しておなじく寂滅平等なるがゆへにとのたまへり

平等法身は八地已上法性身の菩薩なり寂滅平等の法なりこの寂滅平等の法を得るをもつての故になづけて平等法身とす平等法身の菩薩の所得なるを以てのゆへになづけて寂滅平等の

法とするなり。この菩薩は報生三昧をう。三昧神力をもて、よく一處、一念、一時に十方世界に徧して、種々に一切諸佛および諸佛の大會衆海を供養す。よく无量世界の佛法僧ましまさぬ處にして、種々に示現し、種種に一切衆生を教化し度脱してつれに佛事をなす。はじめより往來のおもひ供養のおもひ、度脱の想なし。このゆへにこの身をなづけて平等法身とす。この法をなづけて寂滅平等の法とす。未證淨心の菩薩は、初地已上、七地以還のもろくの菩薩なり。この菩薩またよく身を現すること、もしは百、もしは千、もしは萬、もしは億、もしは百千萬億、無佛の國土にして佛事を施作す。かならず作心す。三昧に入れども、いましよく作心せざるにあらず。作心を以てのゆへに、なづけて未證淨心とす。この菩薩、安樂淨土に生じて、すなはち阿彌陀佛をみんと願す。阿彌陀佛をみるとき、上地の諸菩薩と畢竟して身ひとしく法ひとし。龍樹菩薩、遊戯樂頭菩薩のともがら、かしこに生ぜん願するものは、まさにこの爲なるべしならくのみ。

問ていはく、十地經を案するに、菩薩の逆趣階級、やうやく無量の功勳あり。おほくの劫數をふ。然してのち方これをう。いかんぞ阿彌陀佛をみたまつるとき、畢竟して上地のもろくの菩薩と、身ひとしく法ひとしきや。

こたへていはく、畢竟は未だすなはち等しといふにあらず。畢竟してこの等しきことを失せざるがゆへに等といふならくのみ。

問ていはく、若すなはち等しからずば、またなんぞ菩薩と言ふことをえん。たゞ初地にのれば、以て漸く増進して、自然にまさに佛と等しがるべし。なんぞかりに上地の菩薩と等しといふや。

こたへていはく、菩薩、七地のなかにして大寂滅をうれば、かみに諸佛の求むべきをみす。しもに衆生の度すべきをみす。佛道をすて、實際を證せんと思ふ。そのときにもし十方諸佛の神力加勳することをえすば、すなはち滅度して二衆と異なけん。菩薩もし安樂に往生して、阿彌陀佛をみたまつるに、すなはちこの難なけん。このゆへに須く畢竟平等といふべし。またつぎに無量壽經のなかに、阿彌陀如來の本願にのたまはく。

設われ佛を得たらんに、他方佛土の諸菩薩衆、わが國に來生して究竟してかならず一生補處にいたらん。その本願自在の所化、衆生のためのゆへに、弘誓の體をきて、徳本を積累し一切を度脱し、諸佛の國にあそび、菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恆沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。若しからずば正覺をとらじと。

この經を按じて彼のくにの菩薩を推するに、あるひは一地より一地に至らざるべし。十地の階次といふは、これ釋迦如來、圓淨提にして一の應化道ならくのみ、他方の淨土はなんぞ必しも此の如くならん。五種の不思議のなかに、佛法もつとも不可思議なり、もし菩薩、必らず一地より一地にいたりて、超越の理なしといはれ未あえて詳ならず。たとへば樹ありて、なづけて好聖といふ。この樹、地より生じて、百歳ならん、いまし具に一日に長高なること百丈なるがごとし。日々にかくのごとし。百歳のたけをはかるに、あに修松に類せんや。松の生長するをみるに、日に寸をすぎず。かの好聖なきいて、なんぞよく即日をうたがはざらん。